

中國文化大學外國語文學院日本語文學系
碩士論文

Master of Arts Thesis
Graduate School of Japanese Language and Literature
College of Foreign Languages and Literature
Chinese Culture University

推理輕小說的敘述與人物與構造的研究
— 西尾維新的「斬首循環」與乙一「GOTH」 —

ライトノベル・ミステリの叙述と人物と構造の研究
— 西尾維新の「クビキリサイクル」と乙一の「GOTH」に —

指導教授：齋藤正志 博士
Advisor: Masashi Saito Ph.D

研究生：彭巧蓉
Graduate Student: Peng-Chiao Jung

中華民國 103 年 12 月
December 2014

中國文化大學

碩士學位論文

推理輕小說的敘述與人物與構造的研究
—西尾維新的「斬首循環」與乙一「GOTH」—
ライトノベル・ミステリの敘述と人物と構造の研究
—西尾維新の「クビキリサイクル」と乙一の「GOTH」に—

研究生：彭巧蓉

經考試合格特此證明

口試委員：

內田 康

中村 祥子

齋藤 正志

指導教授：齋藤 正志

所 長：方南洲

口試日期：中華民國 103 年 12 月 26 日

摘要

有可輕鬆閱讀且出版速度快的特性的輕小說的作品，讀者群以國高中生的少年少女為主，並且不只日本，在台灣也受到多數讀者的歡迎，每年也會有大量的輕小說作品被代理進台灣。而關於作為本論文研究對象的兩部作品，西尾維新把推理小說會有的要素做為作品故事結構中的一部分而創作了《斬首循環—藍色學者與戲言跟班》，乙一則是因想以輕小說的方式來寫推理類的作品而創作出了《GOTH》，兩部作品雖是輕小說作品，但也常作為推理類作品而被評論。因此本論文的研究以西尾維新的《斬首循環—藍色學者與戲言跟班》以及乙一的《GOTH》這兩部作品來探討推理輕小說的敘述與人物與構造。

關鍵字：輕小說、推理、西尾維新、乙一



目次

序論	1
第 1 節 研究の目的と範囲	1
第 2 節 方法と論文の構成	1
第 3 節 先行研究の歴史	3
第 1 章 ライトノベルとミステリとの関係	6
第 1 節 ライトノベルの様々な定義	6
第 2 節 ライトノベル・ミステリの過去と現在	10
第 2 章 西尾維新のミステリ	15
第 1 節 西尾維新と「戯言シリーズ」について	15
第 2 節 「クビキリサイクル」の梗概と構成	16
第 3 節 「クビキリサイクル」の犯罪と人物	21
第 4 節 「クビキリサイクル」の陥穽と叙述	26
第 3 章 乙一のミステリ	31
第 1 節 乙一と連作短編集『GOTH』について	31
第 2 節 『GOTH 夜の章』3 篇の梗概と構造	32
第 3 節 『GOTH 夜の章』3 篇の犯罪と人物	40
第 4 節 『GOTH 夜の章』3 篇の陥穽と叙述	48
第 5 節 『GOTH 僕の章』3 篇の梗概と構造	55
第 6 節 『GOTH 僕の章』3 篇の犯罪と人物	65
第 7 節 『GOTH 僕の章』3 篇の陥穽と叙述	73
結論	82
第 1 節 対象二作における共通と差異	82
第 2 節 対象二作のミステリとしての価値	87
第 3 節 ライトノベル・ミステリの可能性	89
今後の展望	90
参考文献	92

序論

第1節 研究の目的と範囲

現代日本の、あるいは現代台湾の若者が好む比較的、読みやすい小説群として知られる「ライトノベル」の膨大な蓄積の中から、特に、いわゆるゼロ年代における二人の同時代人気作家による「ライトノベル・ミステリ」の作品を対象として論じたい。

この論文で対象とするのは、西尾維新のデビュー作である第23回メフィスト賞受賞作の『クビキリサイクル 青色サヴァンと戯言遣い』(2002)と、乙一が本格ミステリ大賞を受賞した『GOTH リストカット事件』(2002)である。両作品は叙述方法(語り手)に特徴がある小説テキストで、その独自の世界観に基づく作品構造と作中人物の造型方法に注目できる。そして、また、ライトノベルのミステリ作品としても評価されているので、本論文では、それぞれについて分析したい。

そこで、推理小説は大衆文学なので、読者の興味に迎合する傾向があるので、文学研究の対象になることは従来、考えられにくかったが、しかし、現在は、「文字として書かれたもの(エクリチュール: écriture)」すべてを文学研究の対象とすることができると考えられるので、現代推理小説の中のヤング・アダルト層を読者層とする「ライトノベル・ミステリ」もまた研究対象となりうると考えられる。

したがって、研究する対象範囲として、前掲した西尾維新の「戯言シリーズ」の嚆矢である『クビキリサイクル 青色サヴァンと戯言遣い』と、同じく前掲の乙一の『GOTH 夜の章』の「暗黒系」・「犬」・「記憶」と乙一の『GOTH 僕の章』の「リストカット事件」・「土」・「声」を選択する。

第2節 方法と論文の構成

西尾維新(2002)『クビキリサイクル 青色サヴァンと戯言遣い』(2008年に講談社文庫版西尾維新文庫として収録)と乙一(2002)『GOTH リストカット事件』(2005年に「夜の章」と「僕の章」との二分冊にされて角川文庫に収録)とを分析の対象とするが、これらの二作(ただし、『クビキリサイクル 青色サヴァンと戯言遣い』は長篇で、『GOTH リストカット事件』は連作短篇集だから、厳密には、長篇1篇と短篇6篇)は、2000年代前半に推理小説に関する文学賞を受けている。西尾維新の『クビキリサイクル 青色サヴァンと戯言遣い』は2002年に第23回のメフィスト賞を受賞し、乙一の『GOTH リストカット事件』は2003年に第

3回の本格ミステリ大賞を受賞した。この両作（冊数で言えば3冊、篇数で言えば7篇）を分析するに当たって、本論文が目的としているのは、構造と人物と叙述について考察することである。

西尾維新『クビキリサイクル 青色サヴァンと戯言遣い』（以下、『クビキリサイクル』と略称する）は、その後続く全9作の「戯言シリーズ」の巻頭を飾るのだが、作中には説明しきれない出来事や荒唐無稽な設定が数多くあり、「マジック・リアリズム」のような世界観を持っている。その独自の世界観を作品の構造として分析し、それが推理小説としての設定に如何なる意味を持っているのか、ということ、作中人物の造型分析や事件を解決する際の叙述方法などと関係させて論じていく。一方、乙一の連作短篇集の場合は、一人称と三人称との二種の語り手を設定した叙述方法や、焦点人物として内面を明らかにされる人物造型の分析を進めながら、短篇6篇に共通する世界観の構造を分析する。その上、両作の「ライトノベル・ミステリ」と従来の推理小説との関係について論じるのである。

さて、本論の第1章で、ライトノベルとミステリの関係について述べる。まず第1節では、現在に至るまでのライトノベルの定義を説明した。最初にライトノベルの歴史と発展に関して記述し、続いてライトノベルという名称の由来、ライトノベルと呼ばれる小説の特徴について記述し、最後に作風について述べた。次に第2節で、日本におけるミステリというジャンルの発展と定義を踏まえて、第1節に説明したライトノベルの定義を加えて、ライトノベル・ミステリについて記述した。

続く第2章と第3章は西尾維新の『クビキリサイクル』と乙一の連作短篇集『GOTH』を、それぞれの構造と人物と叙述について論じた。各章の第1節で作者と作品について記述した。

第2章の第2節で『クビキリサイクル』の梗概と構造をストーリーとプロットに分け、どのように物語を語っているのかということについて論じた。第3節では、犯罪と人物について、基本的に事件の主要関係者だけを対象とし、主人公と玖渚友、そして二人が招待された孤島で起きた事件の犯人のことを論じたのである。第4節の陥穽と叙述では、作品のトリックと語り手について論じた。

第3章は乙一の連作短編集『GOTH』の構造と人物と叙述の分析で、基本的に第2章と同じ方法で論じたが、『GOTH』は『夜の章』と『僕の章』という2冊なので、第2節から第4節にかけては『GOTH 夜の章』の作品分析であり、そして第5節から第7節にかけてが『GOTH 僕の

章』の作品分析である。

本論の結論に関しては、まず『クビキリサイクル』と『GOTH』の共通と差異について述べ、次に対象2作を従来のミステリの定義などと照合して、ミステリとしてどのような位置と価値があるのかについて論じ、さらに、今後のライトノベル・ミステリの可能性についても述べていきたいと考えている。

第3節 先行研究の歴史

前述のように現代推理小説そのものが研究対象とされることは最近のことであり、その中でもライトノベル関係は非常に僅少である。現在までの管見の限りでは、西尾維新関係で『ユリイカ九月臨時増刊号』(2004)の対談と評論、『西尾維新クロニクル』(2006)に収録された対談2篇、研究論文が井上貴翔(2007)「本格ミステリからの「逸脱」 西尾維新『クビキリサイクル』論」(『日本近代文学会北海道支部会報』)と堺愛由美(2010)「西尾維新「戯言シリーズ」論 〈鏡の向こう側〉の存在」(『筑紫語文 第19号』)の2篇である。

まず文芸誌『ユリイカ』は「詩と評論」と銘打たれ、青土社から刊行されているが、その中で特筆されるものが2004年の臨時増刊号として、9月に出版された『総特集 西尾維新』である。新本格ミステリの歴史から西尾維新の作品を評論し、また作中のキャラクターやミステリ小説の定番に関する評論と対談が載せられている。そして、最後に「新青春エンタ」と発行元の講談社に称されたライトノベルと新本格ミステリの間にある西尾維新の作品が評論されている。

次に『西尾維新クロニクル』は「戯言シリーズ」全9巻完結を記念したファンブックで宝島社から刊行された。その内容は、イラストレーターの紹介、作者自身のコメント付き「戯言キャラクター大図鑑」、作者自身のインタビュー、「戯言事件」地図、作者コメント付きの作品群の紹介、書き下ろし小説「ある果実」、そして「荒木飛呂彦×西尾維新「全てはジョジョから始まった！」」と「北山猛邦×西尾維新「新本格、は殺さない！旗は立て続ける」」という2本の対談を収録している。西尾は、荒木飛呂彦(『ジョジョの不思議な冒険』で知られる独特のデザインと決めゼリフとストーリー展開でファンを持つ漫画家)とキャラクターの作り方について対談した。また、西尾と同じくメフィスト賞を受賞してデビューした北山猛邦(「仕掛け」を使った犯罪である、「物理トリック」を多用し「物理の北山」と呼ばれ、本格ミステリーファンから根強い支持を

受けている)と西尾は作品に本格ミステリの要素をどのように入れるのか、そして創作する前にどのような下準備をしたのかについて対談した。

また井上(2007)では、まず、メフィスト新人賞を受賞してデビューした西尾が「脱格系作家」だといわれていることを紹介する。そして、笠井潔と二階堂黎人と有栖川有栖という3人の「脱格系」について述べて、「脱格」とは「本格形式」を前提としつつ、形式から「逸脱」する傾向があるとまとめている。そして、本格ミステリの基本手法である「入れ替わり」で『クビキリサイクル』を分析する。また、西尾の逸脱については、本格ミステリの犯人以外の基本的情報にうそがないというルールを破壊した点を述べ、西尾にとって本格ミステリは物語のひとつのパーツとして用いられているという結論でまとめている。

そして堺(2010)は、まず西尾自身と創作活動、「戯言シリーズ」について紹介し、戯言遣いの主人公と殺人鬼の零崎人識を、それぞれの過去と現在の設定、戯言遣いの主人公と玖渚友との関係、また零崎人識と匂宮出夢との関係についての人物描写を分析してから、最後に主人公と零崎人識は、同じスタート地点に居ながらも、お互いに背を向け合っている鏡の向こう側の存在だという結論を出した。

乙一については、雑誌収録の評論と対談しか入手できなかった。皆川博子(2003)「アラバールと乙一さん」(『文学界』第57巻第12号)、台湾の獨歩文化の『謎詭 ミステリー Vol.3』(2008)が乙一との対談と評論3篇を収録し、『ボイス 平成23年6月号』(2011)に対談1篇が収録されている。

文芸春秋社から出版されている文芸誌『文学界』の第57巻第12号(2003)で、乙一よりも大先輩の作家である皆川博子(2003) (『開かせていただき光栄です』で第16回本格ミステリ大賞を受賞)が「アラバールと乙一さん」という評論を載せている。皆川は1932年生まれのアラバールと乙一の作品には不条理と恐怖の童話のような雰囲気を感じるという共通点があり、アラバールの劇曲の「迷路」と、乙一の『ZOO』に収録された短篇「SEVEN DAYS」とを比較している。

『謎詭 ミステリー Vol.3』(2008)は台湾の出版社である獨歩文化から出版された日本推理情報雑誌である。日本の推理小説の作家と作品群について紹介し、受賞作の紹介と記事、台湾に来訪して座談会を開かれた作家のインタビューについて収録されており、同誌には2008年8月9日に開かれた乙一の座談会のことと、台湾から見た乙一はホラー・ミステリ作家であり、作品に残酷性が顕著な「黒乙一」と優しい傾向の強い

「白乙一」という相反する二種の要素があるが、両者どちらも切なさの気持ちが読者に伝えられているという指摘が記述されている。乙一のインタビューの記事で乙一は小説を書く前に、まず物語の構造や設定などを先に整えてから執筆するタイプの作家である。また、『GOTH』など「黒乙一」に属する作品に描写されている残酷性と人間性の悪について、乙一ははっきりとはいえないが、「黒乙一」の作品にある暗黒の部分は動物や怪物などのものを想像し、一般の人間には理解し合えない、通じることもできないあるものとして描写するのであると述べたことを記述されている。

『ボイス 平成 23 年 6 月号』(2011)に、インターネットで募った投稿を乙一がリメイクする「オツイチ小説再生工場」という企画から生まれた『箱庭図書館』という連作短編集についての対談が収録されている。

以上のように、西尾作品は主人公が思春期の少年少女で「新青春エンタ」と称されるライトノベル小説で、新本格ミステリという要素と作り上げたキャラクターが評論と対談の主題になっている。また、乙一作品もライトノベルであるが、不条理なホラーとミステリの物語として評価されているのである。



第1章 ライトノベルとミステリの関係

第1節 ライトノベルの様々な定義

ライトノベルという名称の歴史については、新城カズマの『ライトノベル「超」入門』で具体的に述べられている。1970年代末に、かつて朝日新聞社の関連会社である朝日ソノラマのソノラマ文庫と集英社のコバルト文庫というレーベルはマンガやアニメ調のイラストを用いてキャラクターをカバーの絵にすることによって、若者年層の読者に注目された。そして、1988年に角川書店の角川スニーカー文庫と富士見書房の富士見ファンタジア文庫が成立し、意識的にマンガとアニメ調のイラストを使用したのが、現在のライトノベルがマンガとアニメ調のイラストを使用するという特徴のイメージを定着するきっかけになった。

ライトノベルという名称は最初からニフティサーブのSFフォーラムで読者側から若者年層向けの小説ジャンルは新しい名称が必要だと考えた上で、ライトノベルという名称が誕生することになったのである。しかし、どうして読者側が新しい名称が必要だという考えがあったのかということについて、名称を誕生する頃にシステムオペレータに就任した神北氏が次のように述べている。

元々なかったジャンルなので、何か言葉が必要だった。昔から「ジュブナイル小説」というものもあったものの、児童までを範囲に含める「ジュブナイル」という言葉は、恋愛やちょっとエッチめな描写も含むこのジャンルには向かなかった。また、ほぼ同時に「ヤング・アダルト小説」という言葉もあったものの、「ヤング・アダルト（思春期から青年）層をターゲットとした小説」というより、「ヤングのためのアダルト小説」に読めてしまう。もっと即物的に、主にそういう系統を出していたレーベル名をとって、「ソノラマ・コバルト系」とか「スニーカー系」とかという言い方もした。が、これも、ちょっと変だし、特定社名が出るとなると他の会社やレーベルから出た本では使い辛い。どうしようもない言葉だが「字マンガ」と呼ぶ人たちも居た。小説も漫画もどちらもバカにした言葉で、吐き気さえ憶える言い方だ。

で、結局、そういう言葉は世の中になかったので、「ライトノベル」という言葉を作った。当時シスオペをしていたニフティサーブのSFファンタジー・フォーラムで、ライトノベルを独立した会議

室として扱う事になった時に作った¹。

つまり、若年層向けの小説は時代によって変容し、総称としてはジュブナイルやヤングアダルトという既存した名称では捉えきれない状況が生じたため、ライトノベルという名称が誕生したというのである。そして、1990年にライトノベルという名称は読者側から普及し始めた。しかし、ライトノベルという名称が誕生したばかりの頃に、読者側と違って作者側は新しい名称が必要とすることなど考えていなかったそうである。

新城カズマは『ライトノベル「超」入門』の中に、「書き手も編集者も、単に「面白い小説を作って出そう」という意識がまずあったわけで、自分たちで新しいジャンルを創ろうとまず考えてから創る、なんてことではなかったのです²」と述べている。作者側は新しい名称を作ることを考えていなかった。創作する時に、単に書きたいものを書き、そして読者が面白いと思えば売れるものになり、逆になれば売れないものになる。つまり、ライトノベルの小説を書いた作者と読者は同じように面白いと思える世代が一緒だという。もし作者と読者の世代が違っていたら、作者が面白いと思う物語と読者が求めている面白い物語はズレが生じるかもしれないのである。児童小説のジュブナイル小説や青少年向けのヤングアダルト小説という既存の名称は大人が子供に向けて書くというニュアンスがある。しかし、ライトノベルは「同世代感、同時代感、ライブ感を重要視した小説³」と、新城カズマは述べている。また、すべてのライトノベルの小説は若い人向けの作品であるが、若い人だけ読んでいるというわけではない作品もある。例えば、小野不由美の『十二国記』シリーズである。十代の読者だけではなく、二十代、三十代の読者層もいる。つまり、ライトノベルは読者層の幅が広くて、子どもや青少年の読者層だけに限られていないという特徴がある。

若年層向けの小説が時代によって変わっていくことによって、既存の名称では捉えきれないという状況があり、読者側がライトノベルという名称を作り出した。1990年にライトノベルという名称が読者層から普及されていったといっても、正式に使われていなかったもので、一般に知られているのは2000年以降の頃であった。当時の乙一、有川浩、桜庭一樹、西尾維新や時雨沢恵一などの作者は、ライトノベル小説を書いているも

¹神北情報局『ブロック記事「名付け親だぞ」2004年5月28日06:57投稿』
http://kamikita.cocolog-nifty.com/kia/2004/05/post_30.html、2014年3月3日閲覧。

²新城カズマ(2006:27)『ライトノベル「超」入門』。

³新城カズマ(2006:200)『ライトノベル「超」入門』。

の、一般の読者にも注目され、一般的な文学賞を受賞したこともある。例えば、2003年に第3回の本格ミステリ大賞を受賞した乙一の『GOTH リストカット事件』、2007年に第60回の日本推理作家協会賞と第138回の直木賞を受賞した桜庭一樹の『赤朽葉家の伝説』と『私の男』などである。そして、ゼロ年代のライトノベル作家である彼らが若い人向けの小説に対してライトノベルという名称を違和感なく使ったことによって、ライトノベルという名称は急浮上し、一般に知られていくようになった。本論で論じる予定の乙一は、自分の読書体験の中で『スレイヤーズ!』や『ロードス島戦記』などという作品を読んだ経験がある。どちらもライトノベルが誕生した頃の作品である。つまり、ゼロ年代以降の作家である乙一がライトノベルという名称を違和感なく使ったというのはライトノベルと距離が近かった世代だからである⁴。さらに、70年代以降に生まれた世代が「ライトノベル世代」といわれている。

ところで、大塚英志(2006、初出は2003)に拠れば、乙一自身が読者だったとされる『ロードス島戦記』は、もともとTRPGすなわち「テーブルトーク・ロール・プレイング・ゲーム」であり、これが後のコンピュータ・ゲームでのRPGとなったという⁵。このTRPGについてはアメリカの推理小説『サディスティック・キラー』(新潮文庫)の中で作中人物が行う様子(アメリカ南北戦争ゲーム)が語られている⁶ので、参照してほしいのだが、要するに「自分が担当するキャラクターになりきって」、ゲームプレイヤー同士が協力して戦うゲームで、このゲームの一つを記録し、それを原型として『ロードス島戦記』が書き上げられたようである⁷。

さて、ライトノベルの作品には、ファンタジー、学園もの、ホラー、ミステリーやラブコメなど、各種のジャンルの影が見えるという特徴がある。つまり、各種のジャンルのものを取り上げて物語に組み込んで書かれているといえる。また、各種のジャンルのものが含まれているライトノベルは、「キャラクター小説」ともいわれている。ライトノベルにおけるキャラクターは、外見から登場人物の思考や行動などをある程度に決定されている。例えば、「メガネっ娘」というキャラクターにすると、

⁴山中智省(2010:62)『ライトノベルよ、どこへいく 一九八〇年代からゼロ年代まで』。

⁵大塚英志(2006:36)『キャラクター小説の作り方』。

⁶ジョン・サンドフォード著、山田久美子訳(1993:101、202 - 203、443、501)『サディスティック・キラー』。ここに示した頁で、7~8人が戦争ゲームをしている。おそらく、それがTRPGであると思われる。以上は指導教員の齋藤正志副教授の直話指導に拠る。

⁷大塚英志(2006:39)『キャラクター小説の作り方』。

メガネをかけるということによって真面目な性格で勉強もできるという委員長タイプを示すことになる。例えば、西尾維新の「物語シリーズ」の「羽川翼」のようなキャラクターである。また、元の作品から登場人物だけ取り出し、別のシチュエーションを与えて行動させる二次創作と呼ばれる作品もあった。そして、二次創作の世界観は元の作品と密接に関わっているわけでもない。例を挙げると、時雨沢恵一は自分のライトノベル作品の『キノの旅』を、キャラクターだけ取り出し、『キノの旅』とは無関係の『学園キノ』という二次創作を創造した。そして、読者は何の違和感もなく、『キノの旅』の二次創作である『学園キノ』を受け入れている。この現象を東浩紀は「キャラクターの自律化⁸」と述べている。二次創作でのキャラクターの自律化は、作者と読者の間に共有する「キャラクターのデータベース」がなければ機能しないというのである。つまり、作者と読者の間にある共通理解のいくつかの属性によって、キャラクターは創造されているといえるのである。したがって、仮に同じ属性を持つキャラクターであれば、どんな世界観の作品に登場しても違和感なく受け入れられる。だからライトノベルはキャラクター小説とも呼ばれているのである。

しかし、このようなキャラクター論は、実は既に漫画家の手塚治虫が言及しており、「キャラクターとはパターンの組み合わせである」という要約が大塚英志によって為されている⁹。また、「説教節」のような古典文学も同様だと指摘され¹⁰、さらに前述の東のような「今日のおたく表現はデータベースからの『萌え要素』のサンプリングによって作られていることがポストモダンの」だと即断すべきではない、とも述べている¹¹。というのは、そうしたキャラクター制作手法は80年代の漫画作品に既存の手法であって、特に新奇な手法ではなかったからである¹²。

その一方で、若い読者が作品に感情移入しやすくするため、語り手が一人称にされることが多く、しかも虚構世界を描いているのに、リアリティを醸し出しているのもキャラクター小説の特徴である。そのような特徴を最大限に生かしたのが「セカイ系」と呼ばれるライトノベルのジャンルである。「セカイ系」はゼロ年代に入ってオタク文化で普及していった作品のブームであった。

⁸東浩紀(2007:38-45)『ゲーム的リアリズムの誕生 動物化するポストモダン 2』。

⁹大塚英志(2006:65)『キャラクター小説の作り方』。

¹⁰大塚英志(2006:68-70)『キャラクター小説の作り方』。

¹¹大塚英志(2006:77)『キャラクター小説の作り方』。

¹²大塚英志(2006:78-81)『キャラクター小説の作り方』。

「セカイ系」が誕生したのは 1995 年の大ヒットアニメである『新世紀エヴァンゲリオン』の影響であり、これがオタク文化に大きな変化をもたらしたのである。2000 年代に入ると「セカイ系」の作品は、最初に思春期の問題に焦点を当て、一人語りの激しさがあり、語り手自身の理解で世界全体を語るというような定義がある。例を挙げれば、西尾維新の代表作である「戯言シリーズ」が「セカイ系」の定義に当て嵌る。2003 年以降になると、「セカイ系」は、主人公とヒロインの小さな関係が世界の運命に直結するというような変化を起こしていく。

また、「セカイ系」の後、現在に至るまで、「日常系」と呼ばれる作品群もある。「日常系」の作品群は、一人称で語り、主人公が少年少女であり、思春期の問題に作品の中に焦点を当てるのであるが、「セカイ系」と違って「日常系」は世界の運命とは直結していない。つまり、「セカイ系」の作品群の主人公とヒロインの存在は、世界に大きな改変を齎しうるといった特徴があるが、「日常系」作品群は世界を改変せずに、ただ虚構世界の中で淡々と日常の出来事を書かれているのである。例えば、葵せきな「生徒会シリーズ」や平坂読の『僕は友達が少ない』や渡航の『やはり俺の青春ラブコメはまちがっている』などの作品である。

第 2 節 ライトノベル・ミステリの過去と現在

ミステリの他のジャンル名称に、探偵小説と推理小説がある。探偵というのは探査や捜索、つまり情報を集めるという意味で、情報を探偵する職業が探偵と呼ばれている。推理とは、作品の謎を論理的に解明することである。ミステリという名称は、ジャンル名であるのみならず、「秘密・謎・不可解なもの・神秘」といった広義の意味を含む一般名詞でもある。したがって文学においても、ミステリーは、特定のジャンルにかぎらず、あらゆる作品に含まれる普遍的な要素・機能であるといえる¹³。ミステリ小説、探偵小説、推理小説という名称は、現在ほぼ同義語として使用されているのであり、謎や不可解なものであるミステリ、情報探査や捜索する探偵、謎を解明する推理、という三つの語彙によってこのジャンルの作品の構成を簡明に説明できるであろう。

日本においては、ミステリ、すなわち探偵小説という名称はイギリス由来である。推理小説という名称は戦後の名称である。このジャンルに関しては 1923 年に江戸川乱歩が『新青年』に発表した「二銭銅貨」でデ

¹³廣野由美子(2009:2)『ミステリーの人間学—英国古典探偵小説を読む』。

ビューすることによって、黎明期の日本探偵小説界の代表作家として、本格派ミステリ小説という固有名を用いることになったという。江戸川は探偵小説の作家であり、また評論家として活動していた。『幻影城』巻頭の「探偵小説の定義と類別」で、江戸川は自らの「探偵小説の定義」を高らかに掲げ、「探偵小説とは、主として犯罪に関する難解な秘密が、論理的に、徐々に解かれて行く経路の面白さを主眼とする文学である¹⁴」と説明した。しかし、松本清張を代表とする社会派ミステリ小説が台頭することによって、本格派ミステリ小説への関心が薄れていくことになったという。社会派ミステリ小説に関しては、主に汚職、政界の内幕や社会の歪みが生んだ悲劇などというリアリティーを重んじた作品群のことである。そして、1980年代から現在にかけては、綾辻行人のデビュー作『十角館の殺人』によって、主に名探偵による不可能な犯罪や難解な謎・トリックなどの解明を主眼とし、一時的に関心が薄れた本格派ミステリのブームが再来し、現在は新本格派ミステリと呼ばれている。

本格派ミステリ小説、社会派ミステリ小説、新本格派ミステリ小説のほかに、ユーモアミステリという作品群がある。ユーモアミステリの代表作家といえ、1976年に『幽霊列車』で「オール読書推理小説新人賞」を受賞してデビューした赤川次郎である。ユーモアミステリと呼ばれる作品は謎や犯罪、あるいは探偵や推理など目新しいところはほとんどなくても、ミステリ小説として楽しめるのかということも言われ、中には「バカミス」と言われる場合もあるが、ユーモアミステリ作品は登場人物の設定や会話、物語の展開などの面白さと可笑しさで読者を楽しませることを重点とするところによって、評価された。例えば、赤川次郎のベストセラー作である「三毛猫ホームズシリーズ」については、物語の主人公である警視庁刑事の片山義太郎が血とアルコールと女性という三つを苦手としていて、刑事としては大丈夫なのかと思わせるのだが、ホームズという三毛猫と一緒にいくつもの難事件を解決するという話である。しかし、ミステリ小説の構成というと、まず事件があってそして探偵役の主人公が捜索して推理することによって事件を解決するのだが、基本的に「三毛猫ホームズシリーズ」もそういう構成になっているのだが、主人公である片山刑事は事件が解決できるのは、いつもホームズという三毛猫が片山に真相の見える情報を提供するからなのである。つまり名前の通り、事件を解決する情報を提供する探偵役は三毛猫なの

¹⁴吉田司雄(2004:15)『探偵小説と日本近代』。

であり、三毛猫の情報によって事件の真相を知る片山がワトソン役になるといえるであろう。ユーモアミステリの作品である「三毛猫ホームズシリーズ」は探偵役は人間ではなく、いつも主人公である片山を助けて事件を解決するという面白さがあり、読者にも受け入れられている。そして、赤川次郎以来、西澤保彦や東川篤哉などユーモアミステリ作家が輩出した。また、本格派と新本格派のミステリ小説、そして社会派ミステリ小説やユーモアミステリ小説は、江戸川乱歩のいうように「主として犯罪に関する難解な謎を論理的に解決する」というお約束を守っているのである。ミステリ小説の作品に書かれる謎は犯罪とつながり、そして探偵が犯罪事件を解決するということは犯人の秘密を暴くということにもなる。とはいえ、ミステリ小説は犯罪の題材と接触するが、ミステリ小説は犯罪小説ではない。主として殺人事件をテーマとする謎を解決するとは言えるだろうが、犯罪に関する謎を解くミステリ小説のほかに、日常生活の中にあふれた謎を解明するという作品群もあり、それが日常ミステリ小説と呼ばれているのである。

日常ミステリ小説の作品群といえば、米澤穂信の「古典部シリーズ」や三上延の『ビブリア古書堂の事件手帖』や岡崎琢磨の『珈琲店タレーランの事件簿』などがある。それぞれ書かれている謎は犯罪とは関係なく、ただ身の回りにあるありふれた日常生活に存在する謎を解いていく作品である。つまり、謎というものは犯罪に限ったわけではなく、秘密であり、不可解なものであれば、どんなものも謎になるということである。ミステリ小説の犯罪に関する謎を解決するという構成は、日常ミステリ小説では、不可解な出来事に関する謎を解明するという構成になっている。そして、秘密を暴かれるのは犯人に限らず、人それぞれ抱える秘密にも探偵役の関心は惹きつけられるのである。

例えば、「古典部シリーズ」は、主人公であり探偵役である折木奉太郎と友人の福部里志、千反田えると伊原麻耶花という4人が学校の古典部部員である。そして文化祭や夏休みなど学校生活で生じた謎を解決するという物語である。

『ビブリア古書堂の事件手帖』は、探偵役である篠川葉子は北鎌倉にあるビブリア古書堂という古本屋を亡くなった父親から受け継いで経営している。そして、物語の主人公でありワトソン役である五浦大輔はビブリア古書堂に勤める店員である。古本屋店主の篠川葉子は古書に関する知識を使って客が持ち込む古書にまつわる謎を解いていき、そして五浦大輔は篠川葉子を手伝ううちに謎の真相が見えてくるという物語であ

る。

また、『珈琲店タレーランの事件簿』は主人公でありワトソン役であるアオヤマという青年が京都の小路の一角にあるタレーランという珈琲店でバリスタとして勤める探偵役の切間美星と出会い、そして店に持ち込まれる日常の謎を解き明かし、その一方で謎を解明する切間美星自身も秘められた謎を抱えている、という物語である。

「古典部シリーズ」、『ビブリア古書堂の事件手帖』と『珈琲店タレーランの事件簿』という三つの作品から見ると、日常ミステリ小説の日常というと、学生生活であったり、社会人であったりなど、そして持ち込まれてくる日常の謎を解いていく探偵役自身をも謎にできるようである。

以上のように、本格派と新本格派ミステリ小説、社会派ミステリ小説とユーモアミステリ小説の「犯罪に関する謎を解決する」作品群にせよ、日常ミステリ小説の「日常に関する謎を解明する」作品群にせよ、先に述べたように、秘密や不可解なものという意味のミステリは特定のジャンルに限らず、あらゆるジャンルに含まれる普遍的な要素である。しかし、ミステリという要素を特化し、高度に発達させることによって派生してきたジャンルが、ミステリ小説、あるいは探偵小説や推理小説と呼ばれるジャンルだといえる¹⁵。

そして、第一節で述べた通り、ライトノベルの作品群はミステリというジャンルだけではなく、学園や SF やラブコメなどいろいろなジャンルが含まれている特徴があり、作品の中の世界観を作り上げている。つまり、ミステリという要素は普遍的な要素として機能しているのではなく、ミステリ小説と呼ばれている作品の定義と特徴がライトノベルの作品の中で他のジャンルのものと一緒に含まれて機能しているのである。ミステリ小説は探偵役の登場人物が難解な謎を突き止めて解決するということを読者に楽しませる。

それでは、虚構の世界にいるキャラクターのことを書かれ、時には世界の運命と直結することがあり、あるいは虚構の世界に存在するキャラクターたちの日常生活を淡々と語っているキャラクター小説とも呼ばれるライトノベルは、謎の解決を主眼とするミステリ小説とはどのような相違があるのか。

ミステリ小説の定義と特徴が含まれているとすれば、難解な謎を解くことを主として機能していることは考えられる。しかし、ライトノベル

¹⁵廣野由美子(2009:5)『ミステリーの人間学—英国古典探偵小説を読む』。

であり、ミステリ小説でもあるライトノベル・ミステリの作品はどのような謎があり、犯罪や人物をどのように書かれているのかということについては後述することにする。

もともと、ライトノベルは面白ければ、どんな世界観や設定、会話など何でもありえる作品群である。本論で論じる予定の『クビキリサイクル』と『GOTH』の作者である西尾維新と乙一は同じゼロ年代の作家であり、読書体験も近い。

西尾維新は「戯言シリーズ」を書くときに、キャラクターを一人一人、確固として立たせていこう¹⁶と思ったというので、作品の登場人物は個性豊かであり、自意識過剰な特徴がある。また、キャラクターの装飾するアイテムは女性のほうが男性より多いので、登場人物は女性の数が圧倒的に多いという。荒唐無稽な設定で、「マジック・リアリズム」のような独自の世界観を持っており、2002年に西尾の『クビキリサイクル』は第23回メフィスト賞を受賞し、講談社ノベルスとして出版された。メフィスト賞については、応募制限は読んで面白いことだけ、つまりジャンルを問わず、面白さのある作品を求めているのである。面白さを追求するライトノベルと一致している。そして、面白さを求めるメフィスト賞を受賞した西尾維新の作品はライトノベル作品であると同時に、ミステリとしても評価されている。

一方の乙一は『GOTH』を書くときに、当初は妖怪小説のようなイメージを持っており、登場する妖怪同様の犯人と対決する主人公の少年も、敵と同等の力を持った妖怪であり、もう一人の主人公の少女もまた強い靈感がある所為で妖怪が近寄ってくるという特異体質の女の子である¹⁷というような意図を持って書いたという。

以上のような共通性と差異性とを前提にして、二作を分析することとする。

¹⁶ 『ユリイカ 9月臨時増刊号 総特集 西尾維新』(2004:92)。

¹⁷ 乙一(2002:187)『GOTH 夜の章』。

第2章 西尾維新のミステリ

第1節 西尾維新と「戯言シリーズ」について

西尾維新は1981年に生まれ、2002年に「東京の二十歳」として『クビキリサイクル 青色サヴァンと戯言遣い』にて、「第23回 メフィスト賞」を受賞してデビューし¹⁸、ミステリーとライトノベルで注目された。西尾の著作は2014年の現時点で全作品が講談社から出版されている。文芸雑誌『メフィスト』と、姉妹誌としての『ファウスト』に掲載されている。西尾は2006年に「戯言シリーズ」が『このライトノベルがすごい!2006』の1位¹⁹になる。そして、2007年に講談社BOX初の「大河ノベル」に参加し、1月から毎月1冊、12ヶ月連続刊行され、全12巻の『刀語』を書いた。西尾作品の中で最も挑戦的な時代小説²⁰であり、速筆として有名になった²¹といわれている。

メフィスト賞は講談社から発行された文芸雑誌『メフィスト』から生まれた賞である。まだ一度も発表していない作家に与える新人賞である。1994年に持ち込みによってデビューした京極夏彦に影響されて創設したという。メフィスト賞は応募期間がなく、『メフィスト』の編集長が読んだ上で選考を行うことで、持ち込みを制度化したような賞だという。そして、受賞した作品はほぼ講談社ノベルスから出版されている。また、応募作品に関しては、ジャンルを問わず、「読んで面白い」作品ならば応募できる²²のである。メフィスト賞を受賞した西尾作品は、キャラクターの設定、台詞回しと言葉遊びというところが高く評価され、その点が作品の面白さでもある。西尾は台詞こそがキャラクターという感覚を持ち、見た目の描写より喋る内容を重視していると述べている²³。また、「キャラクター」ニアリーイコール「名前プラス肩書き」が基本的な小説作法²⁴だと、西尾は述べている。西尾自身の説明によると、ライトノベルと少女マンガ的なものを作中に取り入れて作品を作るということである。もともとライトノベルは、イラストや挿絵などで装幀され、作品の面白

¹⁸西尾維新(2008)『クビキリサイクル 青色サヴァンと戯言遣い』、カバー袖の作家解説に依拠した。

¹⁹フルイチオンライン『このライトノベルがすごい! 歴代TOP10』

http://www.furu1online.net/site/sp/ln_award.html、2014年5月14日閲覧。

²⁰刀語ホームページ概要 <http://www.katanagatari.com/outline/>、2014年5月14日閲覧。

²¹あのひとの「ほぼ日手帳」、『小説家西尾維新さん(前、後篇)』

<http://help.1101.com/store/techo/collection/category/02>、2014年5月14日閲覧。

²²webメフィスト <http://bookclub.kodansha.co.jp/kodansha-novels/mephisto/award/>、2014年5月14日閲覧。

²³『ダ・ヴィンチ 4月号』(2011:20)。

²⁴『西尾維新クロニクル』(2006:55)。

さを重視するジャンルである。一方、少女マンガの多くは、主人公とヒロイン間の恋愛関係を中心とする「キミとボク」で構造化された物語である。デビュー作の「戯言シリーズ」も同様であり、西尾自身が一番重視するのは登場人物で、一人一人の作中人物の背景や自意識などを先に準備をしてから、物語を書く²⁵という。ミステリの場合は、本格ミステリ的なものを作中人物を動かすためのツールとして取り入れたということになる。

西尾が自分に影響を与えた作家として挙げたのは、笠井潔、京極夏彦、森博嗣、清涼院流水という4人のミステリ作家とともに、ライトノベル作家である上遠野浩平である。さらに、自分に一番影響を与えたジャンルはライトノベルだという。ミステリとライトノベルに影響を受けた西尾が書いた『クビキリサイクル 青色サヴァンと戯言遣い』は、ミステリやライトノベルなどジャンルを問わず、面白い作品を作ろうと言うことを主旨とするメフィスト賞を受賞してデビュー作となり、ライトノベルとしてだけではなく、ミステリ作としても評価されたのである。

第2節 「クビキリサイクル」の梗概と構成

「戯言シリーズ」の第1巻である『クビキリサイクル 青色サヴァンと戯言遣い』の主人公で一人称の語り手でもある「ぼく（作中、玖渚友からは「いーちゃん」と呼ばれているが、他の作中人物からは何と呼ばれているのか、ということをも明記されてはいない）」は、「玖渚友」という女の子の付き添いとして、「鴉の濡れ羽島」にやってきた。

鴉の濡れ羽島という孤島と屋敷の所有者である「赤神イリア」は、赤神財団の現当主の孫娘であり、もともと巨万の富と圧倒的な権力の後継ぎであったのに、作中では詳細に語られていないが、16歳の時に或る事情で勘当され本家から永久追放という形で鴉の濡れ羽島を与えられ、「千賀あかり」と「千賀ひかり」と「千賀てる子」という三つ子のメイド（以下、本論では、この三人についてだけ名前を使い、他はすべて名字を使う）と、メイド長を勤める「半田玲」との4人を連れて孤島に島流しという罰を受けた。そして、そこからの外出を禁じられ、5年間、娯楽の一切ない孤島で退屈になった赤神は、暇つぶしのために、有名無名を一切問わず確実に才能があり、天才と呼ばれている人物を次々と島へと招待することにしたのであった。

²⁵ 『ユリイカ 九月臨時増刊号 総特集西尾維新』（2004:91-92）。

ぼくの友人である玖渚の専門は機械工学と電子工学であり、彼女はエンジニアとしての天才である。そして、招待された天才は他に、画家である「伊吹かなみ」、料理人である「佐代野弥生」、数学者である「園山赤音」、占い師である「姫菜真姫」の4人であった。どの女性も各専門分野に突出した天才である。また、「逆木深夜」という男性が介護人として脚の悪い伊吹（天才画家）と一緒に島に来た。つまり、赤神と4人のメイド、5人の天才と付き添いとしてのぼくと介護人である逆木を含めて鴉の濡れ羽島に12人が集ったわけである。

玖渚とぼくは1週間、島に滞在することにした。しかし、地震が起きた3日目の夜に首切り殺人事件が起きた。赤神は自分の屋敷で起きた殺人事件に対して、丁度、1週間後に、何でもできる「天才」の「哀川潤」という人物を招待したので、彼女に事件を解決してもらうために、彼女が島に来る日まで全員が島から出ることを禁じると告げた。しかし、1週間後に本土に戻る予定だったぼくたちは、予定通りに行動するために事件を解決することを決意した。

さて、ぼくたちは、滞在3日目に夜食を食べようとして、メイドのひかりを探しにリビングへ向かった。その場には、ひかりのほかに、酒を飲んで雑談している姫菜と逆木もいた。そして、しばらくの間、ぼくたちは、ひかりと姫菜と逆木と一緒にリビングで会話している時に不意に地震が起こった。そこで逆木は独りでアトリエにいて絵を描いているという伊吹の安否を確認するために電話をした。そして、アトリエの棚に積んであったペンキの缶が倒れてこぼれただけで本人は無事だったということリビングの一堂に告げた。ぼくたちは部屋に戻ったが、しかし、翌朝、アトリエで首を切断されて殺された伊吹が発見された。アトリエの入り口には、飛び越えられないほどの幅のある川のようなペンキが広がっていた。このペンキの川を越えた所に根元から首を切られた死体があった。

首なし死体の服装によって被害者が伊吹だということを確認した。ペンキの川でできた密室なので、犯行時刻は地震の前であると赤神は推測し、消去法で地震前のアリバイを訊いたところ、犯行可能な人物は園山だということになるが、地震後に逆木は伊吹に電話をかけており、犯人は園山だと言い切れない。しかし、密室の謎が解けないまま、一番の容疑者は園山だということは認められ、ぼくが自分の部屋を提供して園山の監禁を提案した。ぼくの部屋はもともと倉庫であり、ドアは外からしか施錠できないし、窓も手の届かない高い位置にあるため自由に出入り

できないので、1週間後に哀川が来るまでは、園山をその部屋に閉じ込めておくことになった。

しかし、翌朝、倉庫で根元から首を切断された園山の死体が発見された。つまり2件目の殺人事件が発生したわけである。ドアの鍵はひかりが管理していたし、窓から入っても出ることもできないので、犯行現場は密室になった。今回の容疑者は、唯一の鍵を預かっていたひかりだった。そこで、ぼくは、単独行動は危険だと思い、チーム行動を提案した。ぼくと玖渚とひかりが3人1チームで、姫菜と逆木と佐代野は3人1チームであり、赤神と班田とあかりとてる子が4人1チームとなった。伊吹の死体を発見した4日目の昼食前に、ぼくたちは現場検証（捜査）をした。そして、全員のアリバイと検証情報をデジタルカメラとコンピュータ3台で記録しておいたが、翌日、チーム行動を決めた後で、ぼくたちの部屋のデジタルカメラとコンピュータ3台すべてが誰かに破壊されていた。

しかし、朝、ぼくたちは園山が殺された事件であかりに起こされて部屋を出た。また、最後に殺害現場の倉庫に駆けつけた人物はぼくたちである。全員が集まった後みんな一緒にダイニングで前日のようにアリバイ調査をした。つまり、犯行時間と全員の朝の行動の情報によると、玖渚のデジタルカメラと3台のコンピュータを破壊できる人物はいないということになった。4日目の朝、アトリエで伊吹の首切り死体が発見され、ダイニングで僕の部屋だった倉庫に園山を監禁することになって解散した後、ぼくたちはデジタルカメラを持って現場で捜査した。

その際にぼくが気になったのは、ぼくをモデルとして伊吹が描いた人物画に腕時計が描かれていたということであった。ぼくが聴いた伊吹の仕事のやり方は、絵を描く前にまず記憶し、記憶に頼って絵を描くということであった。しかし、3日目のぼくの行動によると、朝食前に散歩に行ったぼくは逆木と伊吹に会った。当時の伊吹は、島に植えられた唯一の桜の木を描くために、桜を見て記憶していたのであって、ぼくを見ていたのではなかった。傍らで逆木と会話していたぼくは、逆木に誘われて伊吹に肖像画を描いてもらうことになったことで、ぼくは昼食後にアトリエに行くことを約束した。そして、アトリエに行く前に、ぼくの腕時計が壊れたので、機械工学の専門家である玖渚に修理を頼んで腕時計を預けた。つまり、伊吹がぼくを観察して記憶しながら会話していた時には、腕時計を身につけていなかったのである。それなのに、ぼくをモデルとした肖像画には腕時計が描かれていた、ということがぼくは気

になった。

さて、ぼくたちがアトリエで捜査中、逆木が寝袋を持ってきて、3人で寝袋に包まれた伊吹の死体を森に埋葬するのを手伝った。だが、2件目の園山の首切り殺害事件のとき、記憶力が抜群な玖渚は園山の死体と指紋が同じであることに気づいた。

また、ぼくと玖渚とひかりは担架で死体を運んでいたのもあって、寝袋を使用せず、直接、死体を埋葬した後、3人は屋敷の外から倉庫の窓を捜査した。倉庫の中にある椅子を利用してジャンプしても届かない位置にある窓は、屋敷の倉庫の辺りの半分が山に埋まっている形なので、外での窓の位置は胸の高さぐらい低い位置になった。

また、ぼくたちの捜査情報によれば、窓には事件の痕跡はなかった。第一の殺人事件での飛び越えることができないペンキの川でできた密室に関して、ぼくたちはペンキが地震で棚から倒れてこぼれたのかもしれないが、幅は飛び越せないようにこぼれてはいない。ペンキの川は犯人が殺害後に作ったものなのでであると推理し、第二の事件に関しては、この犯人には共犯者がいて、首のない死体をリサイクルしたと推理し、共犯者はまず肩のところが平らになった第一の被害者の死体を倉庫の窓から入れて、犯人は死体を踏み台代わりに平らな部分でジャンプして倉庫の窓から外に出た。つまり、第一の殺人犯は園山で、逆木が共犯者であり、園山は全員が2件目の事件でダイニングに集められている時、玖渚の部屋に侵入して現場の捜査情報を記録した3台のコンピュータとデジタルカメラを完膚なきまでに破壊したのでであると推理した。

探偵役であるぼくは事件を解決したが、その解決は犯人は誰であるかということと、どのようにして犯行を行ったのかということだけであった。この時、ぼくは動機に関する謎を解決していなかった。

探偵役が犯罪を解決するということは、犯人の秘密を世間の前で暴くということだといえる。しかし、ぼくがいる犯罪現場は鴉の濡れ羽島という孤島であり、そして島の所有者である赤神は個人的理由で警察を嫌いなので、殺人事件が起こったのに警察への連絡を拒んだ。また、島に招待された人たちは天才であるが、事件が起きた時、その中に死亡時刻など死体の状況を詳しく調べられる人はいなかった。そして、島にいる人物に関しては、4人のメイドは主人である赤神以外の人に対して平気で嘘をつく人物である。そして天才たちは自分以外の人に対していつも無関心な態度で接している。赤神は何でもできる哀川を名探偵と呼び、島に来る日を楽しみにしていた。すなわち、ぼくが事件を解決すること

を赤神は全く期待などしていなかったのである。

また、1週間後にぼくの前に現れた哀川に、ぼくは「……潤さん。確かにぼくはそこんところが気に食わないけれど、だけど他に可能性がないんじゃないですか。絶対に不可能な可能性を全て消去して最後に残った可能性は、それがどんな不可能に思えたところで、真実なんですから²⁶」と語った。ぼくの言葉に関しては、ホームズの推理法のコットーとしては、『四つの署名』第一章に有名な発言があって、「ありえないことを除去せよ。残ったものが、ありそうになくても、真実である²⁷」という言葉である。しかし、残った可能性が真実であるということについては、捜査情報が隠蔽されておらず、証言にも虚偽が皆無だという確かな情報でなければならぬ。また、確かな情報を手に入れるために事件の関係者に信頼される必要があるともいえる。ぼくは倉庫に監禁されている園山と会話している時、この殺人事件は迷路のような事件だと語った。ぼくは「迷路なら簡単ですよ。片側の壁に手をついておけば、その内で出口にたどり着きますから²⁸」と語ったが、園山は「それは単連結迷路の場合だよ。多重連結迷路の場合はそうはいかない。私はこの事件は多重連結迷路的であると思うね」と語った。そして今回の事件は必勝法のないゲームというものであると園山はいった。ぼくは捜査をして知った情報によって、犯罪を犯した犯人は誰なのか、そしてどのように犯罪を行なったのかに関する謎を解いたが、何のために犯罪を犯したかという動機に関する謎はぼくは解いていなかった。事件の真実にたどり着くことができないし、犯人の秘密を暴くこともなかった。そして、犯人はぼくの推理によって捕まったが、ぼくが犯罪の動機を解明できなかったことで、警察が干渉できない孤島で本物の園山を殺害することによって彼女と入れ替わるという殺人計画が成功したのである。要するに、探偵役のぼくは、多重連結迷路であるにもかかわらず、ただ片側の壁に手をついただけで出口にたどり着こうとしたのである。そして、孤島で多重連結迷路のような事件を計画した犯人は、ぼくに真実を知られることがないまま、事件を終了したのである。結末で、多重連結迷路に参加しないで、事件が終わった後に登場した哀川は、まるで探偵と犯人が事件で行動している間中、上空から俯瞰しているように、すべて傍観していたかのように、鴉の濡れ羽島という孤島での殺人事件

²⁶西尾維新(2008: 521-522)『クビキリサイクル 青色サヴァンと戯言遣い』。

²⁷小森健太郎(2007:67)『探偵小説の論理学』。

²⁸西尾維新(2008:269)『クビキリサイクル 青色サヴァンと戯言遣い』。

の動機（犯行の真意）を語った。

それは赤神の招待を受けた伊吹は鴉の濡れ羽島へ行く前に、同じく招待されていた園山（天才数学者）と接触し、島にいる間、お互いの立場を入れ替えることを提案した。園山は遊び心で伊吹の提案に乗ったのだが、伊吹の真意は彼女の人生を乗っ取るためだったのである。島へ行く前に彼女と入れ替わり、島にいる間に伊吹として島に来ている本物の彼女を殺し、入れ替わった別人、すなわち園山として生きようとしていたのである、ということであった。

第3節 「クビキリサイクル」の犯罪と人物

鴉の濡れ羽島で起きた密室殺人事件を解決する探偵役を担当するぼくという人物は、本名は一度も物語に語られておらず、玖渚にいつも「いーちゃん」と呼ばれている。また、3日目の朝食の前に僕は散歩している途中で逆木と出会って会話している時、逆木はぼくの名前を聞いたが、「まだ名乗ってないんじゃないですかね？」ぼくは肩をすくめて、深夜さんの質問に答える。「ぼくはあくまで玖渚友の付属品ですから、オマケに名前なんかいらないでしょう？」²⁹とぼくは語った。ぼくは島で他人に自分のことを自己紹介しないし、訊かれても玖渚がいなければ自分はどうしてもいい人間のように紹介した。ぼくの発言はまるで他人と関わりたくないようである。また、ぼくは、よく何か不可解なことを悩んだ挙句に「戯言だ」と発言した。

密室殺人事件を解決してから1週間後に、ぼくはまだ事件について悩んでいる。「ただぼくは疑問なのだ。深夜さんと赤音さんの連続殺人計画は、至極周到な計画であるように見えて、かなり偶然に頼っているところがある。イリアさんの前で推理過程を披露するとき、その辺りのことを誤魔化すのにひどく苦労した。杜撰な計画だった、というのではない。そうではなく、ぶっつけ本番的でありながら、事前に準備は完成していたような感慨。と言うより、かなり運が味方についていたようにも思えるのだ。……そう、偶然を計算して利用している。運を味方につけている、というのか。まるであの島の間取りから調度からの全てが、彼らの味方だったかのように。「……戯言だ」勿論それこそが偶然なのだろうし、ただの大数の法則の一例に過ぎないのだろうし、単純に言えば、彼らはただ、賭けに勝った、それだけなのだろう。選択的思考による観点から

²⁹西尾維新(2008:27)『クビキリサイクル 青色サヴァンと戯言遣い』。

結果だけ見れば何でも、どこかがご都合主義なものだ³⁰」とぼくは語った。

ぼくにとっては島で起こった密室殺人事件は解決した。たとえまだ気に食わないところがあっても、事件はすでに解決したし、間違っただけで犯人ではない人物を犯人扱いして冤罪になってしまったこともない以上、悩んでも結果が変わらないならば、ぼくはまだ気になっているところをどうでもいいことだと思えるように、「戯言だ」という一言で悩むのを途中で放棄した。探偵役を担当する人物は、事件が起こってしまったから、被害者の死体の状況や殺害現場を捜査したり、事件の関係者に取調べをしたりして事件に関する情報を集めることによって、謎を解き、犯人はどのようにして犯罪を行ったか、また何のために犯罪を犯したかということから推理することによって、事件の真相が判明する。そして事件の関係者全員を一箇所に集め、犯人の秘密を暴いて犯した罪を裁くのである。しかし、探偵役を担当するぼくは、事件の犯人を推理して捕まえたが、謎を解く情報を集めるとき、ぼくは自ら他の人に事件についてのことを取り調べるのがなかった。招待された天才たちの中に、姫菜という占いの天才がいる。事件が起こる前に姫菜は犯人は誰か、犯罪を犯す動機は何かということなど、調べる必要はなく、全ての真相を見通すことができるのである。姫菜真姫が天才だと称される才能のことについて、ぼくは「人の気持ちなんか、分かったら分かった分だけ鬱陶しい。パンドラの箱を全開にしたままの生活なんて、ぼくは真っ平だ。そんなものに耐えられるだけの、丈夫な神経は所有していない。「戯言なんだよ、全く……」³¹」と語っていた。そして、事件を解決して終了した1週間後に、まだ解いていない犯罪の動機についての謎に関してぼくは動機というのは結局本人たちの問題であり、赤の他人である自分にとっては手に負えるところではないといった。また、ぼくは自分の欠点といえば、一目で見て全て憶える玖渚と違ってぼくの記憶力は弱い。人の名前や顔など紹介してもすぐに忘れられるものだというのである。つまり、ぼくという人物は、自分以外の人とかかわりたくないというほどに、自分のことは他の人に詮索されたくないということといえる。また、自分以外の人とは所詮無関係の他人であり、他人が何かあっても結局自分にとってどうでもいいことになるということによると、ぼくは人間が一人で生きるべきであると思っている人物である。しかし、このようなぼくにとっては玖

³⁰西尾維新(2008: 491-492)『クビキリサイクル 青色サヴァンと戯言遣い』。

³¹西尾維新(2008:165)『クビキリサイクル 青色サヴァンと戯言遣い』。

渚だけに関心を持っている。ぼくは以前玖渚と半年ほど暮らしたことがあった。しかし、物語で詳しく語っていなかったが、ぼくは或る事情で玖渚機関ともめた上、玖渚を完膚なきまでに壊して別れた。そしてぼくは中学2年の頃、玖渚の兄である直の手引きでヒューストンに渡り、ERプログラムに参加した。「戯言シリーズ」の作中にはアメリカのテキサス州ヒューストンにERシステムという研究施設があり、世界中の学者が集結し、あらゆる学問と名のつくもの全てに手を出している学術の最果てと呼ばれていると設定されている。ERシステムは大統合全一学研究所という二つ名がつけられ、名誉など関係なくただ知識欲のままに世界の解答を求めているERシステムは、若手育成にも力を入れていてERプログラムという留学制度を設けている。ぼくはERプログラムの留学試験に合格したが、10年の課程を6年で中退した。そして、日本の高校卒業資格を得ているため京都の鹿鳴館大学に帰国子女入学をした。そして、本家から絶縁され、城崎のマンションで一人暮らししてほぼ引き籠りの生活をしている玖渚と再会し、面倒を見ている。ぼくは赤神に「天才をどう定義しますか」という質問をされた時、ぼくは「遠い人」と答えた。また、ぼくは自分と玖渚との関係に関して姫菜に質問された三種から一つ選んだ時、ぼくは「対象を本当にすごいと思い、自分よりもそちら側を優先できる人」と選んだ。また、過去のことはともかく、ぼくに惚れている玖渚には「僕様ちゃんの隣は、いーちゃんの席」という名言がある。ぼくを愛している玖渚はぼくに願うことはただひとつ、「変わらない³²」ということである。ぼくが誰ともかかわりたくないし、自分は一人でいいと思っているのは、玖渚の「変わらない」という願いを叶えるためであろう、ということによると、玖渚という人物はぼくにとっても大切な存在だということである。

そして、ぼくは、逆木と会話した後、もともと伊吹に絵を描くのを教える先生であったが、彼女が天才だと呼ばれて有名になってから絵を描くのをやめて介護人としてずっと伊吹のそばにいて面倒を見ている逆木のことを、ぼくは玖渚のそばにいる自分と似ていると思っている。しかし、伊吹のことを大切な人だと思い、そして彼女はかけがえのない存在だとぼくに語ったことがある逆木は、園山と共謀して伊吹を殺した。動機というのは結局犯人自身の問題であり、ぼくにとっては手に負えない謎なのであるが、何のために園山と手を組んだのか、何のためにかけが

³² 『西尾維新クロニクル』(2006: 16-17)。

えのない存在であったはずの伊吹を殺したか、ということについてぼくは事件を解決しても気に食わなかった謎である。

1 件目の事件が起きた 4 日目に、ぼくは一度だけ玖渚を部屋で一人にしたことがある。このことに関して姫菜はぼくに「もしも大切にしたいと願うものがあるのなら本当はそれから一瞬たりとも目を離すべきじゃないんだよ³³」と忠告した。また、姫菜は僕に忠告するとき、尊敬している人について三種あるという話をした。「その人が本当に好きで、憧れて、尊敬して、そうなりたいそうありたいっておもう人。純粹だね。二つ目は一つ目と似てるけれど、自分は完全に切り離して、対象を本当にすごいと思い、自分よりもそちら側を優先できる人。そして、もう一種がその《すごい人》を好きになることで、その人のすごさに乗っかることによって、自分の価値をあげようって連中さ。他人を生きがいにする、脳と腹が腐った連中だね³⁴」と姫菜は語った。犯人である伊吹は本物の園山を殺し、園山に入れ替わって事件後も大統合全一学者として名を馳せている犯人のそばに、逆木がいる。犯人は伊吹としての時も、そして園山に入れ替わった時もずっとそばにいて仕えていた、ということによって、逆木は自分よりそちら側を優先できるという種類を選んだぼくと似ている人物である。では、天才のほうはどうであろう。ぼくは天才と呼ばれる人は遠い人だと定義しているが、ぼくの前に現れた哀川は天才である人が遠い人に見えるのは、「人生における時間を、ひとつの方向に向けて全部発揮できる人間。人間にはいろんなことができる。だけどいろんなことをやらずに、たった一つだけにそれが集中したとき、それはとんでもねえ力を発揮できる。それこそ、遠くの人だと思えるくらいにな³⁵」と説明し、招待された天才たちのように、一つの専門に全ての時間を発揮できたのである。しかし犯人は異なり、伊吹は園山を騙して入れ替わり、孤島で園山を殺害することによって伊吹は園山になることを成功させた。そして、生まれつき脚が悪いはずの伊吹が園山と入れ替わった後、脚は何事もないように元気で歩いているのだと、哀川はぼくに説明した。だが、伊吹と園山はそれぞれに画家と数学者の天才であり、入れ替わっても天才と称されるほどの技術は劣ることはなかった。つまり、伊吹や園山は人生における時間を一つの専門に使わなくても、それぞれの専門で天才の領域に達することができる人物である。しかし、だ

³³西尾維新(2008:246)『クビキリサイクル 青色サヴァンと戯言遣い』。

³⁴西尾維新(2008:246)『クビキリサイクル 青色サヴァンと戯言遣い』。

³⁵西尾維新(2008:539)『クビキリサイクル 青色サヴァンと戯言遣い』。

としたら犯人は何のために人を殺して他人の人生に入れ替わろうとしたのであろうか。倉庫に監禁された時、容疑者である園山＝真犯人の伊吹はぼくに天才について語った。

彼女は「子供は弱者と嘘つきを虐待し、異端を疎外するものだからね。しかし、きみのその気持ちはよく分かる。私も高校生の頃は、宇宙人と一緒にクラスにいる気分だったよ。試験を受けるときは満点ではなく平均点を基準にする連中。マラソンでは《一緒に走ろうね》などと吐かす。ペケをつけない試験採点。……平等主義なんだよ。よくも悪くも。そりゃあ円周率も三になるさ。七愚人の他の六人も大抵そんな気分を感じた経験があるらしい。0.14の悲劇だね。徹底的な平等主義であるがゆえに、そこにさえ入れなかったものは格段の疎外感を味わうことになる。天才は異端から生まれる。³⁶」と語った。

彼女が天才について語った時の立場は園山である。園山の高校は特に有名ではない県立高校で、部活は女子空手部、数学と英語は得意であるが、総合成績ではあまりよくなかった。そして、家族に反対されても高校卒業後に ER システムに入ることに決めて、努力してやっと世界の解答に近いと称される 7 愚人のひとりとなって天才学者として世界中に名を馳せた。しかし、園山が努力して天才と称された話はあくまでも高校卒業後の話であり、高校の時の園山は異端で周りの人々に疎外されてはいなかったのであろう。ということは、犯人が語った天才は異端から生まれたという発言は彼女自身の本音だといえよう。また、犯人は「日本にはよくいるじゃないか、努力したことそれ自体を誇りに思う人間が。これだけ苦労したんだから結果なんて関係ない、とね。努力はそれだけで価値がある、とか。私はああいうの認めてもよいと思う。《努力をした》というのはそれで立派な結果だからね³⁷」と語った。犯人は園山に入れ替わる前に伊吹として過ごしている。伊吹は生まれつき脚が悪く、一生車椅子に乗って生活しなければならない身体であり、数年前までは盲目でもあった。しかし、詳しく語られていなかったが、目が見えるようになって、スタイルというものを一切持たない若き女流画家として名前を馳せられた。世間から見ると、伊吹は脚や目が悪くても、努力して天才と称されるほどの輝く人生を生きていたといえる。つまり、二人は天才と称され、名を馳せる前に苦労して努力した時期があった。要するに、犯人は苦労や努力などしなくても、いろんなことを簡単にできる天才で

³⁶西尾維新(2008:267)『クビキリサイクル 青色サヴァンと戯言遣い』。

³⁷西尾維新(2008:56)『クビキリサイクル 青色サヴァンと戯言遣い』。

あり、そして周りの人々に異端と見られて疎外されたということによると、逆木以外の人に疎外された犯人は、苦勞して努力してから結果を出して周りの人々に受け入れられた天才となりたかったのであろう。何かになりたいことや何者かになりたいと思ったことはない、人間は一人で生きるべきだと思っているぼくは、仲間外れされた犯人の人を殺して入れ替わるというやり方で仲間に入りたいという気持ちが分かるはずはないので、ぼくは犯人の動機に関する謎が解けないのである。哀川が登場して僕が解けなかった謎を解くことができたのは何でもできる天才だと赤神に紹介され、何でもできる彼女は苦勞や努力もなく、色々なことが簡単にできる犯人と似ているところがあり、だからこそ僕の前に現れて動機の謎を解くこととなったのである。

第4節 「クビキリサイクル」の陥穽と叙述

ぼくは一人称の語り手であり、主人公であると同時に、探偵役でもある。第2節で述べたように、ぼくは赤神に招待された玖渚に連れられて鴉の濡れ羽島で1週間滞在することになった。島にいる1週間はもともとぼくが京都の鹿鳴館大学の入学し始まるはずだった大学生活から、突然、玖渚からの連絡によって思わぬ展開になったのだった。

赤神財団現当主の孫娘でありながら勘当され、日本海に浮かぶ孤島で暮らすことになってしまった赤神と、班田とあかりとひかりとてる子という4人のメイド、そして玖渚と同じく招待された伊吹と佐代野と姫菜と園山の4人の天才と、伊吹の介護人として来た、ぼくと似ている逆木、という人たちと、ぼくは出会った。そして、3日目の朝からぼくの視点で物語が始まる。そして3日目の夜に地震があり、4日目の朝にアトリエで伊吹かなみが首を切られて殺された死体を発見されたことで、全員がダイニングに集まってアリバイ調査を行なった。そして、アリバイ調査の結果は一番の容疑者になった人は園山である。しかし、犯行現場はペンキの川で密室状態になったので、犯行時刻は地震前であると赤神は考えたが、逆木は地震後に伊吹の安否を確認したので、犯人は園山であるとは言い切れない状態になった。そして、園山の犯行かどうかということでみんなが口論している中、ぼくは園山を倉庫に監禁することを提案した。ぼくの提案が全員に採用された後、ぼくと玖渚は部屋に戻って事件を解決しようとした。二人は、デジタルカメラを持って殺害現場であるアトリエに行って現場捜査をした。しかし、5日目の朝、唯一の鍵を使わないと誰も入れるはずがなく、倉庫の窓から入っても出ることも

できない空間の中で、園山の死体が発見された。そして、前日のように、殺された伊吹と園山を除いて、屋敷にいる全員がダイニングに行って再びアリバイ調査を行なった。そして、倉庫から出る方法がわからないということによって、2件目の事件の容疑者になった人物は倉庫の唯一の鍵を管理しているひかりであると、赤神は考えた。しかし、1件目の事件の時のような方法で犯人を探すのはよくないと思って、ぼくは赤神の考えは賛成できないので、今回はチームで行動するということを提案し、全員に採用された。そして、ぼくと玖渚と2件目の事件の容疑者になってしまったひかりの3人チームが玖渚の部屋に戻ったら、玖渚が島まで持ってきた3台のコンピュータとデジタルカメラは、みんながダイニングで集まってアリバイ調査をしている時に、何ものかによって完膚なきまで破壊されてしまった。そして、今回はデジタルカメラがない僕の3人チームがまず殺害された園山の死体を埋葬した後、外で倉庫の窓の状況について現場捜査をした。ぼくは1件目と2件目の事件の時、2回一人で赤神の部屋を訪ねた。しかし、ぼくは訪ねる理由は事件のことについて何かを聞きたいのではなく、警察が嫌いという個人の理由で自分の所有地である島まで警察を呼んでくるのを拒んだ赤神に、ぼくは警察を呼ぶのを説得しようとするのである。しかし、ぼくは2回も赤神を説得することに失敗した。結局ぼくは玖渚の力を借りて事件を解決することしかできない。そして、ぼくの3人チームは玖渚の部屋で1件目と2件目の事件に関する情報で事件のことを推理する時、逆木と姫菜とチームを組んでいるはずの佐代野が玖渚のところに訪ねてきた。

また、1件目の事件の時アリバイがないのは園山一人だけではない、メイド長の班田にもアリバイがないという事実を話した。1件目の事件のアリバイ調査をする時、伊吹が殺された3日目の夜に、赤神と班田と佐代野の3人は赤神の部屋で料理について会話をしているとみんなに証言したが、実は、その夜、班田は赤神と佐代野と一緒にではなかった。そして、ぼくが事件を解決すること以外で、佐代野から知った情報は最初に赤神の部屋を訪ねた時に、赤神と班田の行動で二人が入れ替わったという事実を知った。班田のアリバイ以外に、佐代野の話の中で肩のところに平らになったという謎を解くヒントを得た。そして、ぼくは佐代野に犯人を捕まえるための計画に協力するよう要請した。そして夕食の席で、僕の計画通りに、犯人である園山を捕まえることができた後、島にいる全員がダイニングに集まって、三つの事件についてぼくはみんなに説明して事件を解決した。

伊吹の犯罪は園山を殺して、彼女の人生を乗っ取ることである。赤神の招待を受けて島に行く前に伊吹は園山に面白そうなことを提案し、園山は伊吹に、伊吹は園山に入れ替わった。そして、伊吹と園山は入れ替わりを他の人たちに気づかれないよう、島にいる時よく喧嘩して仲が悪いように演じたのである。しかし、地震があった3日目の夜に、園山と入れ替わった伊吹はアトリエで本物の園山の首を切断して殺害し、棚に置いたペンキで入り口に飛び越えることができない川を作ることによって密室を作った。そして、首のない死体をリサイクルして、犯人は死体の服装を伊吹から園山に変えた。そして、死体を踏み台代わりに高い位置にあった倉庫の窓から脱出した。死んだふりをした犯人はみんなが2件目の事件のことでダイニングにいる時、玖渚の部屋に侵入して事件に関する情報を記録した3台のコンピューターとデジタルカメラを完膚なきまで破壊した。そして、探偵役のぼくは犯人が仕掛けた密室の謎を解くことによって、伊吹であったはずの犯人は、園山として捕まって事件は解決した。

つまり、「クビキリサイクル」では、犯行以前の立場交換という陥穽が第一に存在しているのである。犯人は自分と外見が似た被害者と入れ替わって島に行き、肩と水平になるように首を切断して殺害した被害者の死体をリサイクルして2件目の密室のトリックとして利用した。続いて、犯人が探偵役のぼくにヒントをあげようとするように、全員一箇所に集めた時、つまり誰も犯行ができない時に3件目の事件（＝デジカメと3台のコンピュータの徹底的な破壊）を行なった。

しかし、ぼくは3件目の密室破壊事件によって、却って犯人がダイニングに集められた人たち以外の人物であると推理し、死体がリサイクルされたトリックを推理して2件目の事件の密室の謎を解くことによって、園山が活着ていることを推理した。

ただし、警察嫌いの赤神を事前に調べ、たとえ自分が招待した天才が自分の所有地内で犯罪を起こしても、ただ面白いと思うだけだと犯人は推測していた。だから、ぼくが事件を解決しても、犯人は警察に逮捕されず、ただ島から追放されて本土に戻ってから園山として生きるということで、犯行の真意が達成されることとなった。これが「クビキリサイクル」における第二の陥穽である。

そもそも密室殺人事件とは、現場となった空間の中に、犯人がまるで蒸発したように出入りした痕跡や証拠などが発見できないという不可能な犯罪事件のことである。つまり、犯人は誰であるかという謎の前に、

まずどのように犯行を行ったかという謎を中心にして推理するのである。そして、密室事件は密室の謎が解ければ犯人は誰であるかということを知ることができるという特徴がある。「クビキリサイクル」での犯人は密室事件にある特徴を利用したといえるのであろう。犯行前に、被害者と入れ替わっておく。そして、犯人は園山として犯罪を行い、三つの密室を作ったあと、誰かが密室の謎を解き、犯人は園山であると判明させてくれる推理をすれば、計画した犯罪は完成するのである。

要するに、犯人と被害者が鴉の濡れ羽島に到着する前にすでにお互い入れ替わったことを探偵役の人物に気づかれなければ、犯罪は失敗することもないのである。ぼくは語り手であり、最初から最後まで一人称で僕の視点によって語られ、推理する探偵役も担当している。しかし、一人称で語っているということは、語り手を担当する人物の目で見たり考えていることなどしか語られていないということである。

ぼくは電子工学と機械工学のプロフェッショナルである玖渚の力を借りて、玖渚とぼく以外の鴉の濡れ羽島にいる全員の関係に関する情報を調査をした結果、伊吹と園山がシカゴの喫茶店で一緒に食事をしたという情報を得た。一緒にいるといつも喧嘩をしている二人が食事をするなど想像もできないことであった。また、ぼくは玖渚と一緒に1件目の事件の殺害現場であるアトリエを捜査した時、ぼくをモデルとした遺作となった肖像画に腕時計が描かれていることをぼくは気にしていた。伊吹は画家として記憶に頼って絵を描くタイプであると、ぼくは伊吹から聞いた。しかし当時、伊吹がぼくを観察して記憶している時、腕時計が壊れたので付けていなかったのに、どうして伊吹のぼくの肖像画に腕時計が描いたか、ということがぼくは気になった。また、伊吹がかけがえのない存在であるとぼくに語った逆木が何故、園山と共犯して伊吹を殺害をしたか、などの謎もまた、ぼくは気になったのに解いていなかった。

ミステリで探偵役を担当する人物には解かなければならない三つの謎がある。犯人は誰であるか、どのように犯行を行なったか、そして犯人は何のために犯罪を犯したか、という三つの謎を解くことによって、事件の真相が見えるようになるのである。しかし、ぼくは鴉の濡れ羽島での密室殺人事件の二つの謎を解いたが、最後の謎である犯人の動機に関して、ぼくはいくつかの情報を知って気になっていても、解くことを放棄した。

事件の犯人は鴉の濡れ羽島という警察が干渉できないところで、死体をリサイクルするというトリックと謎を解けば、すぐ犯人は誰なのか判

明できる密室で陥穽を作った。そして、ぼくはもともと探偵役として、犯人は誰、どのように犯罪を行ったか、そして何のために犯罪を犯したかという三つの謎を解いて事件の真相を見通せるはずでありながら、途中で放棄した無責任な探偵役だった。しかし、ぼくがまだ島にいた時、事件の真相が見えるということに関する情報をぼくの視点で語られているというのは、物語の語り手という立場からは役立っているといえる。



第3章 乙一のミステリ

第1節 乙一と連作短編集『GOTH』について

乙一の本名は安達寛高といい、昭和53(1978)年10月21日に福岡県生まれである。彼自身によれば、「小説を書き始めたのは16歳の初夏」だという³⁸。そして、平成8(1996)年に17歳の時、短篇小説「夏と花火と私の死体」で、「第6回集英社ジャンプ小説・ノンフィクション大賞」を受賞してデビューした³⁹。文庫版の『夏と花火と私の死体』に収録する解説を担当する小野不由美の話によると、当時、乙一は若い年齢で書かれたデビュー作で高い評価を得られた⁴⁰。また、2003年に『GOTH リストカット事件』で第3回本格ミステリ大賞を受賞した。本格ミステリ大賞は本格ミステリ作家クラブが本格ミステリというジャンルの発展のために設立した大賞である。毎年作家クラブ会員の投票によって最優勝作品を決めている⁴¹。乙一は本格ミステリ大賞を受賞し、ミステリ作家として評価された。そして、2003年に宝島社の「このミステリがすごい！」に入選し、2008年に映画化された。

乙一の作品には二つの傾向がある。「黒乙一」と呼ばれる残酷や凄惨を基調とする傾向と「白乙一」と呼ばれる切なさや繊細を基調とする傾向である。「黒乙一」の傾向に偏る作品は『夏と花火と私の死体』や『GOTH リストカット事件』などがある。「白乙一」の傾向に偏る作品は『きみにしか聞こえない CALLING YOU』や『さみしさの周波数』などがある。そして、最近の作品には、どちらの傾向に深く偏っていない「灰乙一」と呼ばれ、『銃とチョコレート』や『箱庭図書館』などの作品がある。また、乙一は2011年に自分のツイッター(Twitter)で、山白朝子と中田永一という別名義で何年間覆面作家として活動しているということを公表した⁴²。乙一は山白朝子という名義で、2005年からメディアファクトリーが発行する怪談専門誌「幽」でホラーの作品を執筆している⁴³。そして、中田永一という名義で、2005年に祥伝社の恋愛小説アンソロジー『I LOVE YOU』に発表した「百瀬、こっちを向いて」が話題して執筆活動を始め、ラブコメ・タッチの作風の青春小説で活躍している⁴⁴。また、

³⁸乙一(2005:253)『GOTH 僕の章』。

³⁹乙一(2005)『GOTH』、カバー袖の作家解説に依拠した。

⁴⁰乙一(2000:215-223)『夏と花火と私の死体』。

⁴¹本格ミステリ作家クラブ(<http://honkaku.com/>)、2014年5月30日閲覧。

⁴²中田永一@adachihirotaka(<https://twitter.com/adachihirotaka>)、2014年5月30日閲覧。

⁴³山白朝子(2011)『死者のための音楽』、カバー袖の作家解説に依拠した。

⁴⁴中田永一(2010)『百瀬、こっちを向いて』、カバー袖の作家解説に依拠した。

2012年に「くちびるに歌を」で「第61回 小学館児童出版文化賞」を受賞することになった⁴⁵。

乙一は自分の読書体験は、ライトノベルとミステリという二本の柱によって支えられている⁴⁶と述べていた。そして、乙一は大学時代に読書の範囲はライトノベルに限られている人々は、他のジャンルの作品を読んでいない傾向があることを知り、ライトノベルしか読んでいない読者にライトノベル以外の作品にも読んでもらうのを考えた。そしてライトノベルでミステリを書こうと思って『GOTH』を書いた⁴⁷のである。「ライトノベルは出版界において眉をひそめられるような存在であり、本としては認知されておらず子供の読む低俗なものなのだ」という意識がある⁴⁸」と乙一は述べていた。また、いろんなジャンルの作品を読んでいる読者にも、ライトノベルだけは読んでいないのである。つまり、乙一の話によると、出版界ではライトノベルはまともな本として受け入れていないということである。大賞を受賞することによってライトノベル以外の読者にも注目されていた乙一は、ライトノベルの状況に関心を持った。そして、「ジャンルの違いに捕らわれていい本を読まないのはもったいないから、ミステリもSFもライトノベルも無差別に読んでいます。そして書きたいように書いているだけ⁴⁹」と述べて、乙一はライトノベルを書き続けたのである。

では、作品の分析することについて、1冊に3篇の短篇を収録されている『GOTH 夜の章』と『GOTH 僕の章』を分析する際に、1節に3篇の短篇を分けて作品を論じていく予定である。

第2節 『GOTH 夜の章』3篇の梗概と構造

『GOTH 夜の章』の「暗黒系」のストーリーは次の通りである。主人公の僕と森野夜の住む町に、5月から少女をバラバラにして殺す殺人鬼がいる。悲惨な殺し方でマスコミも騒がせた。6月になると二人目の被害者が発見された。夏休み中のある夕立のあった日に、森野は自宅の近くにある、よく通う喫茶店で犯人が落としたりしい手帳を拾った。手

⁴⁵毎日新聞(2012年11月20日)「小説:「中田永一」も「山白朝子」もあの人気作家—別名義活動公式に認める」<http://mainichi.jp/enta/news/20121120mog00m200035000c.html>、2014年5月30日閲覧。

⁴⁶乙一(2005:246-247)『GOTH 僕の章』。

⁴⁷乙一(2005:247-248)『GOTH 僕の章』。

⁴⁸乙一(2005:246)『GOTH 僕の章』。

⁴⁹山中智省(2010:63)『ライトノベルよ、どこへいく—一九八〇年代からゼロ年代まで』。

帳の中には被害者のことや殺し方などが詳細に記されていた。森野は手帳を夏休みの出校日に僕に見せた。手帳の中には、マスコミに報道されていない三人目の被害者が記録されている。出校日の翌日に、僕と森野は手帳の真偽を確かめるために、手帳に記されている三人目の殺害現場を探しに行く。そして、山の奥で本当に三人目の被害者を発見した。手帳に記されているようにバラバラにされた少女の死体である。森野は現場にあった被害者の持ち物を拾って僕と一緒に帰った。僕と森野は手帳のことで三人目の被害者のことを警察に通報しないことにする。翌日、森野は三人目の被害者に似た格好をして僕と会った。森野は当分の間、三人目の被害者の格好をするつもりだという。しかし、森野は犯人に誘拐されてしまった。森野からの「助けて」という内容のメールを受けた僕は、その翌日、先に森野の自宅に手帳を取りに行く。そして、もう既に殺されたかもしれないと考え、手帳にある情報で森野の死体を捜しに行く。しかし、予想は外れ、僕は森野が多分殺されていないと考え、森野のよく通う喫茶店で犯人に会いに行った。僕は今まで手に入った情報を整理し、5月からの連続殺人事件の犯人は喫茶店の店長だと考えており、僕の予想通りだったことが判明する。僕は森野の居場所を聞き出し、手帳を返した。犯人の店長の言う通りに、店の二階にある自宅で誘拐されてまだ生きている森野を発見し、無事に救出することができた。

この作品は、森野が拾った手帳を僕に見せた夏休みの出校日から始まる。手帳を見た僕は、森野に手帳を拾った状況を詳しく聞き、二人は三人目の被害者を探しに行く。その翌日から被害者に似た格好をするようになった森野が犯人に誘拐され、森野に助けを求められた僕が彼女の死体を捜しに行くが、探し出せなかったので、僕は、森野の死体の居場所を聞き出すために情報を整理して犯人当てをした。

「暗黒系」では、町の事件について語り、犯人当てのヒントを語る。また、最後に、犯人は誰か、どうして喫茶店の店長は犯人なのか、ということについても語られている。しかし、結末になっても、犯人の少女バラバラ殺人の動機は語られなかった。

作中で探偵役に相当するのは僕であるが、「暗黒系」の僕が犯人を探す理由は、森野のバラバラ死体を見たくて、彼女の居場所を犯人自身に聞くしかないと考えたからである。犯人当てのヒントは、森野が手帳を拾った時の状況と僕の汗で手帳の字が滲んで読めなくなったという二点である。この二点のヒントを語る場面は、冒頭で森野が僕に手帳を見せた出校日の日と、僕が山で歩き回って森野の死体を結局見つけられず、バ

ス停で情報を整理する時という二つの場面である。この二つの場面の間で語られているのは、そもそも悲惨なことや殺人事件のことなどを鑑賞することを共通の趣味とする僕と森野が出会ったことであった。

彼らは手帳によって三人目の被害者を探しに行き、また被害者の格好をして犯人に誘拐された森野を僕は探しに行った。森野を探す前日の夜に、僕は休む前に犯人にバラバラ死体にされた森野の姿を想像し、森野が三人目の格好をしたとはいえ、町中に彼女の格好だけが特別とはいえないので標的になる可能性は低いと僕は考えたながらも、森野から助けを求めたメールを貰った時、僕が一番考えていたのは連続殺人事件の犯人にさらわれたということだった。僕は森野がまだ生きていることを考えずに、彼女の死体を捜すことにして、彼女の死体を見たくて犯人のところに行った、というのが僕の行動の理由と顛末である。

要するに、探偵役に相当する僕は犯人を探す前に、被害者であり、死体になった森野を探すほうを優先している。また、作中で犯人がどうして犯罪を犯したか、どうして少女だけを狙っているかという動機について語られていないのは、バラバラ殺人事件よりも殺人事件に関わってしまった森野誘拐事件のほうが物語の中心になっているからである。

犯人を捜す前に、どうして犯人を捜さなければならないのかということが僕の動機として、作中に語られている。つまり、作中の犯人当てを利用し、僕は「もしもすでに殺害しているのなら、森野夜の死体をどの辺りに捨てたのか聞き出す必要がある。なぜならそれを見たいからだ⁵⁰」という動機を語っている。その後、僕が犯人のところに行く場面は犯人は誰なのかということを推理しながら、森野の状態はどうなったのかということを考えるのがサスペンスだといえるだろう。

上述のように、僕が森野の死体を見たいという動機と連続殺人事件に関わってしまった森野誘拐事件が中心となった物語である。さらに、どうして探偵役の僕が犯人を捜すことにするのかについて語られている。

「犬」のストーリーについては以下の通りである。犯人である一人の少女は母親と一緒に暮らしている。片親家庭で育ち、小学校をずっと登校拒否してユカというゴールデンレトリバーの愛犬と一緒に家で生活している。ある日、いつものようにユカと散歩しながら遊んでいた少女は、橋の下で広場を見つけた。以来、少女は橋の下の広場を秘密の場所としてよくユカと一緒に遊びに行った。しかし、ある日から、少女の母親は

⁵⁰乙一(2002:36)『GOTH 夜の章』。

時々、一人の男性を家に連れて帰ってくるようになった。男性は犬嫌い
でよくユカを殴っていじめる。ユカを大事にしていた少女は男性のこ
とが怖くて、やがて耐え切れずに母親が男性を家に連れ帰った日の夜にユ
カを連れて外に出た。そして、こんな日々の繰り返しの中で少女はユカ
を連れて家を出た日の夜に、他の家の子犬を誘拐し、橋の下の広場で自
分のことを犬のように思い、誘拐してきた子犬を噛み殺すようになった。
少女が子犬を噛み殺すようになったのは、男性を殺すための練習であつ
た。

一方、僕は朝食の席で家族から最近、近所の家で飼われていた犬の誘
拐が多発しているという話を聞いた。マスコミに報道されるような事件
ではなかったが、身近で起きた事件が気になった僕は、ペット誘拐事件
を追うことにした。そして、家族と犬を誘拐された人々からの情報によ
ると、犯人は火曜日と金曜日に行動すること、子犬しか狙っていないこ
と、よく食べ物で子犬を誘拐すること、犯行時間帯が決まっていること
を僕は知った。そこで僕は犯人が誘拐を行う火曜日の夜に、子犬を飼わ
れていて犯人に狙われそうな家の近くの雑木林で、身を隠して犯人を待
った。しかし、犯人の少女は僕に見られる前に僕の存在に気付き、犯行
を行わずに帰った。結局、僕は十分後に収穫なしで家に帰った。金曜日
の放課後に、ペット誘拐事件の新しい情報を集めに行く途中、僕はわけ
ありで塾にいけなかった妹から、塾に行くためにいつも通る橋の下の広
場にある穴の中に、大量なペットの死体を発見した。妹の話聞いて現
場に行った僕は、穴とペット誘拐事件と関係があると思い、夜にデジタ
ルカメラを持って橋の下の雑草の中で身を隠して犯人を待つ。そして、
僕は一人の少女が愛犬を連れて誘拐してきた一匹の子犬を噛み殺す場面
を見た。また、僕は一度、森野と一緒に犬を連れて散歩する犯人の少女
とすれ違ったことがあるので、犯人は近所の子だと分かった。

犯行後、僕は少女の呟きから、明朝に少女が自宅で何をするのかとい
う話を盗み聞きしたので、少女が橋の下の広場を離れた後、僕は家に帰
って、以前に「暗黒系」の犯人の家から勝手に持ち出したナイフのセッ
トのうち的一本を持って少女の家に向かった。

僕は少女の家の近くに身を隠し、少女が男性を殺そうとする場面を見
た。そして、失敗した少女が怒りで狂った男性に殺されそうになった時、
僕は少女にナイフをこっそり渡した。少女は僕からもらったナイフで男
性を殺した後、ユカを連れて家を出た。犯人の少女が家を出た後、僕は
殺害現場の写真を撮り、自宅に帰って朝食をとった。また現場に戻った

僕は近所の人から少女の家庭事情のことを知った。少女について聞いた後、僕は橋の下に向かい、広場で少女からの動機などを書いた手紙をもらった。そして、手紙と一緒に残されたユカを友達の義父が犬嫌いで飼っている犬がいじめられたという理由で引き取った。事件の数時間後、行方不明だった少女は郊外で血だらけの姿でさまよっているところを保護された。

「犬」は近所で行われているペット誘拐事件を追う僕の視点と、犯人の少女の視点を交互に語られている。少女が愛犬のユカを連れて橋の下の広場で子犬を噛み殺すところから物語が始まる。最初に少女の視点で秘密の場所で犯行を語る時、少女の口が相手を殺す武器、そして「吠える」や「地を駆ける」など、まるで少女が犬のように語られ、いつも少女の犯行を見ているユカの方が飼い主であり、自分が飼っている犬に命じて夜の殺し合いを続けているように読める。また、少女は自分がユカの言葉が分かり、何を考えているのかも分かると述べている。いつも獲物を決めているのはユカだと語られている。しかし、僕の視点と交互に、次に少女の視点で物語を語る時、「家には、私とユカ、そして「ママ」が暮らしている⁵¹」と述べているところから、飼い主は視点人物の少女であり、そしてユカというのは犬だということが分かった。括弧とカタカナで表す「ママ」という単語は、少女とユカの飼い主とペットという関係を象徴するために物語の中で強調されている。

それでは、どうして少女がペット誘拐事件を行う時、自分のことを犬のように語っているのか？ そしてどうして獲物を決める時、ユカが決められているように語られているのか？

広場で犯行を行うことを語る少女の視点と交互に、次の話を語る僕の視点は、放課後に、僕が駅前広場で森野と合流し、森野に案内させて一軒の古本屋に行くところから語り始める。しかし、犬嫌いの森野がその古本屋に行くためにいつも通る道には犬がいるので、結局古本屋に行けなかったが、僕はユカと少女に出会った。すれ違った時、僕はユカについて「深い黒色の、知的な目をしていた。僕は吸い寄せられるようにその瞳を見つめる⁵²」と述べている。

また、少女が男性を殺そうとする時、少女は「言葉はいらない、彼女が何をしてほしいか、私にどうすることを望んでいるのか、目を見れば

⁵¹乙一(2002:63)『GOTH 夜の章』。

⁵²乙一(2002:61)『GOTH 夜の章』。

わかる⁵³」と述べている。

最後に、僕は「はたして少女が手紙に書いているほど、ユカが様々なことを考えているのかどうかはわからなかった。あの少女は、ユカの瞳に映った自分の顔と話をしていたのかもしれない⁵⁴」と述べている。

つまり、少女は自分が飼っている愛犬のユカの目を通じて、そこに映っていた自分の姿を「ユカ」と呼んで、会話していたのである。したがって、犯行を行う少女が自分のことを犬のように語っているのは、「ユカ」と呼ばれている自分なのである。少女は自分が男性にいじめられていた愛犬のユカに命じられ、犯行を行ったのだと述べたが、実は、少女はただ愛犬の目に存在しているユカの自分が男性にいじめられ、悲しくて許せなかったことで犯行を行うようになったといえる。しかし、少女は最後にユカのやり方ではなく、僕からもらったナイフで男性を殺した。

僕の視点で語る時、僕は自分の趣味について「異常な事件や、それを実行した者に対して、暗い魅力を感じる。心が切り裂かれるような、悲痛な人間の死。叫び出したくなるほどの不条理な死。それらの新聞記事を切り抜いて集め、その向こう側にある人間の心の、深く暗い底無しの穴を見つめるのが好きだった⁵⁵」と述べている。そして、事件を追う時、何か重要な情報を掴んだとしても警察に通報しないで、いつも第三者の立場で事件の全貌を見続けるというルールを暗黙に守っている。しかし、「犬」の事件で僕はルールを破り、犯人を助けた。

この事件の犯人には、二つの性格があるといえる。一つは愛犬がいじめられているのに、何もできない自分。そして、もう一つはユカと呼ばれ、獣のような自分である。何もできない自分がユカの自分に従って、子犬を誘拐して殺すことによって、犬のような殺し方を身につけるといふ少女の視点で犯罪について語られている。

その一方、僕の視点で僕の一般生活を送ることを語る時、僕は家族や学生生活に対し、常に一般人としての自分を演じていると述べている。しかし実際に僕は他人と本当の会話は何もしていないで、周囲に対して無関心ですごしていると述べている。犯罪者や異常な事件などだけに関心を持っている僕は、少女の愛犬のユカの目と自分の目が合った時、吸い込まれるように感じたと言われている。そして、僕は少女の手紙をもらう前に、一度も少女と話し合うことがなかった。その手紙の中には、

⁵³乙一(2002:108)『GOTH 夜の章』。

⁵⁴乙一(2002:120)『GOTH 夜の章』。

⁵⁵乙一(2002:62)『GOTH 夜の章』。

飼い犬を崇拜する書き方で、なぜ自分が子犬を誘拐して殺したのか、義父のこと、ナイフをくれたことへの感謝、そして犬をもらってほしいと書いていた。少女の手紙を読んだ僕は、最後に少女は犬の目に映った自分と会話をしていたという考えた。

要するに、少女が犬の目を通じて、もう一人の自分を見たように、吸い込まれるような黒色の目に僕もまた自分を見たと考えられる。たとえ二人は直接、接触しなくても、僕はある程度、犯人のことを理解し、犯人の少女が殺されそうになった時に、ついルールを破って助けたのである。つまり、『GOTH 夜の章』に収録された第2の短編の「犬」は、義父を殺すための練習として犯したペット誘拐事件について語る少女の視点とペット誘拐事件を調べる探偵役の僕の視点とを交互に語ることによって、どうして僕が犯罪者や異常な事件だけに興味を持っているのかについて語られ、さらに人間の暗く獣のような部分に僕が惹かれていることが物語の中心として語られているのである。

次に『GOTH 夜の章』に収録された第3短篇「記憶」は僕と同じ趣味を持っている森野夜に関する事件の物語である。

森野夜は幼い頃、田舎で暮らしていた。彼女には森野夕という双子の妹がいて、二人の外見は自分の家族にも見分けることができない程そっくりなために、姉の夜は黒い靴で、妹の夕は白い靴で見分けられていた。二人の姉妹の性格について、姉の夜は表情があまりない子であり、一方妹の夕はよく笑う子なので、話をすると、誰が誰かはすぐわかった。まだ小学生だった夜と夕が気に入っていた遊びは死体の真似だった。よく死体を真似して周りの人を驚かせていた。ある日、小学2年生の姉妹は、8歳の時にまた死体を真似して人を驚かせようと考えて、雨降る日に、夜は実家の納屋で首吊り死体を真似して人を驚かす役を担当する。夕は納屋の外で待ち、夜が準備を整えたら人を呼ぶ役である。しかし、吊り下げた紐の他に一本、胸に巻かれて夜の身体を支えていた縄が夜の体重に耐え切れずに切れるという事故が起きてしまった。

夕はすぐに夜を助けようとするが、結局、助けることができないで、夜は首吊りで死んでしまった。納屋の天井から漏れた雨の水滴で、僅かに柔らかくなった地面に、夕の靴跡が残っていたので、ショックを受けた夕は傍らにそろえて置いた夜の靴を履き、自分の靴を納屋に残して逃げた。

夕は事件の真相を誰にも言わずに、夜として生活し、高校生になった。ある日、何日も眠れなかった元は妹の夕だった、今の夜は、放課後に自

分は、不眠症になると紐を首に巻きつけて死体になった自分を想像したら不眠症が治るが、今回はなかなか自分の首に合う紐が見つけれなくて困っている、と、僕に述べた。そして、二人は首に合う紐を捜すために大型雑貨店に向かった。紐を選んでいる時、僕と夜は、僕の妹の桜に会った。桜がまだ用事があった先に帰った後、夜は自分も以前、夕という妹がいたが、夕は事故死した、と話した。結局、不眠症を解決できるような紐を見つけられなかった二人はバス停で話し、僕は夜に妹の事を聞いた。夜は田舎での生活、妹の夕との死体を真似た遊び、夕が一人で首吊り死体で人を驚かせようとしたのに事故が起こって本当の死体になってしまったこと、そして夜は、夕を探しに納屋を行って、死んだ夕を発見した、と、僕に述べた。普段は、死体を真似る遊びをしているのに、どうして一目ですぐに死んだと分かっていたのかという点について疑問を抱いた僕は、自分の疑問を明らかにせずに、夜に頼んで休日に彼らが住んでいた田舎の実家に赴いた。

そこで僕は、夜が実は夕の事故に深く関わっていること、実家にあった姉妹が別々に描いた首吊りの絵から実は今、生きている夜は夕であることなどを知った。姉の夜が描いた絵は靴を履いていなかったが、妹の夕が描いた絵は靴を履いている。つまり、首吊りをする時に靴を脱いで脇へ揃えた知識は夜が知っている知識であって、夕は知らなかったことが絵に反映していたのである。そして納屋で死んだ少女は靴を履いていなかったということから、僕はクラスメートの森野夜の正体を推測した。

月曜日の放課後に、僕は自分の推論を森野夜に伝えた。また、僕は、実は、夜は事故ではなく、夕に殺されたと推測した。夕はよく夜に命令され、危険な死体の真似をさせられたり、犬に漂白剤を食べさせたりさせられ、泣かされたことが動機である、と、僕は推測した。しかし、夜は、自分は確かに夕であるが、姉を殺していないし、縄が自然に切れて事故になってしまったのだと語った。また、夜は、事故後、自分の本当の名前を呼ぶのは、僕なんじゃないかと思っていたとも語った。その後、僕は夜に贈りたいものがあると言い、納屋から勝手に持ち出した犬用の紐を夜に与えて彼女の首に巻きつけることによって、彼女の不眠症を解決した、という物語である。

「記憶」は、まず、ある日の放課後に、僕と森野夜が夜の不眠症を解消するために、夜が自分の首に合う紐を探しに行き、夕という夜の妹のことについて語り始めたところから始まる。事故によって死んだ夕の事を聞いた僕は、死者の死んだ場所を巡りたいという理由で夜に頼み、彼

女が小学校の時に住んでいた田舎の実家に赴いた。そして、夕の事故について色々と調べ、今生きている夜が実は妹の夕であるという真相を突き止めた。さらに僕は、実は事故ではなく、夕は夜を憎んで殺した殺人事件だと推測した。休日を経て次の登校日の放課後に、僕は自分の推論を彼女に話した。僕の推論を聞いた夜は、自分は確かに夕であるが、姉の夜は殺していないし、本当に事故で死んだと語った。最後に僕は、納屋から勝手に持ち出した犬用の紐を夜に与えたので、不眠症を解決することができたという。

妹の夕は、事件後、姉の夜として生きることになってしまった。そして、自分が実は、妹の夕ということは、自分の家族にも話していないのに、たぶん一生話す気はないかもしれない事故の真相を、僕が妹のことを知りたいと聞き、彼女はあまり躊躇なく話した。そして夜の話聞いた僕は、おかしい点があると思って、事故が起こった現場に調べに行くと同時に、どうして夜は僕に話したのか、というところが作中の事件にもなっているのである。僕が事故のことを調べると、本当の夜に接触したことはないのであって、強いて言えば僕は妹の夕が演じた姉の夜しか知らないことになる。しかし、僕は実は夕である夜と彼女の祖父母からの情報で、姉妹が普段やっていた死体真似遊びを、家族がただの子どものいたずらだと思っているが、僕には、夕より死に関する知識を詳しく持っている夜がやっているのはただのいたずらではなく、死に対する観察でもあると考えた、というところが重要である。つまり、僕が事故について調べるだけではなく、僕を本当の夜と同じ本性を持つ人間として作中に位置づけたと考えられる。僕と夜を演じる夕が事故について話し合った後、夕は自分が初めて僕のことを知ったことについて話した。夕は中学の時に、人間の輪切りが展示された博物館で僕を見かけた。高校入学後、僕が図書館で死体解剖の医学書を読んでいるところを見かけたことで、僕が夜に似ていると思い、高校2年の時に、表情を作るのを教えてほしいという理由で、僕と接触した。

要するに、「記憶」は、どうして自分の家族や周囲の人たちに対して、いつも表情を作って対応している僕がクラスメートの森野夜だけに、ありのままの自分で対応しているのかということ、森野姉妹の事件に通じて語っているのである。

第3節 『GOTH 夜の章』3篇の犯罪と人物

まず「暗黒系」は、僕の住んでいる街で起きて騒がれた異常な手段で

少女を殺害してバラバラにする連続猟奇殺人事件の犯人が森野夜がよく通う喫茶店の店長だった、という作品で、犯人である店長が被害者の格好をした森野を誘拐し、彼女から救助メールを貰った僕が彼女のバラバラ死体を探そうとして行動しながら、期待通りにならなかったのも、死体が何処の山奥に放置されたのかということを知るという目的で、犯人を捜すことにした、という作品である。

通常のみステリでは、死体は置かれている場所で、ほとんど証拠を残さずに片付けられたり、死んだ場所と発見された場所が違ったりしていると語られていても、死体の状態やどのように死んだのかということによって犯人を突き止める証拠になるように語られているものが多い。

ところが、「暗黒系」の連続猟奇殺人事件の三人の被害者では、一人目は、このこの犯人の車に乗って山奥に連れられて殺害された。少女の身体は犯人によって解剖され、まるでクリスマスツリーの飾りのように木の上に放置された。続いて二人目の被害者は、犯人に騙されて別の山奥にある小屋に連れられて殺害された。この少女の身体は、百の小さな塊に分けられ、几帳面にそれぞれ十センチほどの間隔をあけて、10×10になるように小屋の床に放置された。そして三人目の被害者は、また別の山奥で殺害され、前の二人の被害者と同じくインスタレーションのように山奥に飾られて放置された。

「暗黒系」の三人の被害者の死体は犯人を突き止める証拠としてではなく、犯人の異常さを強調するために語られている。つまり、芸術品を創造するために三人の少女の身体を素材として分解して使ったという点に、殺人鬼である犯人の異常さが語られている。そのため僕は、誘拐された森野の身体が異常な殺人鬼の手で再利用され、インスタレーションになって山奥に飾られたのを見てみたいと述べたのである。

探偵役に相当する僕と、危うく連続猟奇殺人事件の四人目の被害者になりそうだった森野夜は、連続猟奇殺人事件のようなことを観察するのが趣味である。二人はよく世界中の拷問器具やさまざまな死刑の方法など、普通の人々が顔をしかめるような会話をした。

また、犯人が落とした犯罪経過について詳細に記録している手帳を彼女が拾ったので、僕と二人で、手帳に記されマスコミに報道されていない三人目の被害者を捜しに行き、発見しながらも、結局、彼らは一切通報しなかった。僕は「残念ながら僕たちは、手帳など拾わなかったことにして黙っていることに良心を痛めない、爬虫類のようなひどい高校生

だった⁵⁶」と述べている。森野夜も三人目の被害者を探しに行く途中で、何度も殺人鬼に対して畏敬の心を抱いている感じで手帳を眺め、指の先でなぞったと語られている。しかし、僕と彼女が手帳に記録されているように山奥でインスタレーションにされ、三人目の被害者になった少女を見つけた後、気にしたところは違っていた。

森野は現場に捨てられた被害者の個人の持ち物を拾い、少女の生前のような格好をして、外見だけではなく、話し方や仕草なども、まだ生きている少女と会ったらこんな感じだったのではないかというように、真似した。また、森野は僕と同じく被害者の家族に知らせるつもりはなかったのに、死んだ少女の家族のこと、彼氏はいたのかということ、学校での成績はどうだったのかなど、ということに関して気にしていた。というのは、彼女が異常な殺し方で死んだ少女の死体を見た時、衝撃を受けて、衝撃を受けたまま少女の持ち物を拾い、帰りの電車の中で何の言葉もなく、遠くを見つめていたからである。

一方、僕の一人称で語られていることによると、僕は森野夜と一緒に三人目の少女の死体を見つけた時の事情と、彼女の反応を詳しく語ったこととを比べて、僕は冷静だったと言えよう。

また、連続猟奇殺人事件の被害者になった三人の少女の外見は、それぞれ似ており、僕は三人目の少女の格好をした森野夜のことを思うと、嫌な予感がした。そこで、「助けて」という内容しか書かれていないメールを貰った僕は、同じような服装を着る少女は町中に大勢いるはずだから犯人に狙われる可能性は低いと思ったものの、殺されてインスタレーションにされた彼女の死体を見たくなくなったので、犯人の手帳を参照して彼女の死体を撒き散らしたかもしれない山奥に赴いた。しかし、結局、見つけられなかった僕は、もし彼女が殺されていたら死体は何処に放置されたかということ、犯人自身に聞くしかないと思い、今までの情報を整理して犯人は誰なのかということ、を推理することにしたのである。

僕と森野夜が連続猟奇殺人事件の三人目の被害者になった少女を見つけた時の反応と行動から見ると、同じ趣味を持っている者同士であっても惹かれた興味は異なっていた。警察と被害者の家族に知らせるつもりはなかったが、森野夜は少女の死体を見て、彼女のことを考え、少女の生前の格好を真似して当分の間、過ごした。つまり、森野は犯人のことより、殺されて死者になった被害者のことに対して、興味があるといえ

⁵⁶乙一(2002:20)『GOTH 夜の章』。

るだろう。一方、僕は冷静に少女の死体の状態を語り、推理によって犯人と会った時、彼女のことを聞く前に記念として、敬語で話し、犯人に握手を願った。そして、僕は喫茶店の二階にある犯人の自宅で森野夜を助けて部屋を出る時、記念としてナイフセットと、紙面に無数の小さな十字架を描いていたメモ用紙を勝手に貰ってきた。

連続猟奇殺人事件の犯人の正体が僕に知られてしまったことについて、僕は「おそらく二度とこの辺りには現れないだろう。僕はそのことをほとんど確信していた。口を封じるために僕や森野夜を殺しに来るかもしれないという可能性もあったが、そうはならないことがなぜかわかっていた。喫茶店のカウンターをはさんだ会話の中で、僕とあの異常者はどこか心を通じ合わせてしまった気がしたからだ⁵⁷」と語られている。法律を無視し、良心も痛まない僕は、異常な探偵だといえるだろう。

次の「犬」の事件の犯人である少女は、登校拒否でいつもユカというゴールデンレトリバーと一緒に遊んで日々を過ごしている。しかし、ある日、少女の母親が一人の男性を家に連れてきて、男性が犬嫌いによくユカをいじめたことによって、少女は悲しくて耐えきれずに、男性が家に来る日の夜にユカを連れて家を出た。そして、男性を殺すために練習として少女は家を出た日の夜に他の家の子犬を誘拐して殺害した。一方、僕はすぐ身近で起きているということが気になってペット誘拐事件を調べ、犯人が近隣に住んでいる少女だと知った。少女が男性を殺すつむりの日の朝、僕は身を隠して覗いてみた。そして、逆に少女が、怒り狂った男性に殺されそうになった時、僕はこっそりナイフを少女に渡し、そのナイフで男性を殺害した少女はユカを連れて家を飛び出し、僕への手紙と飼い犬のユカを橋の下にある広場に残して姿を消した。

小学生の少女が登校拒否をした理由は作中で語られていないが、嫌な思い出があったかもしれないということを想像することはできる。少女に関する個人情報や名前が語られていないこと、彼女の両親が離婚したため母親と一緒に片親生活だったこと、登校拒否の少女は母親が仕事で忙しいので、毎日ユカという犬と一緒に遊んで日々を過ごしていることがわかるだけである。しかし、物語は少女と僕の一人称で、交互に語られているが、少女の視点になると、彼女の登校拒否に対して母親や学校の教師から何か話されたかどうかは全く語られていない。また、少女は、家族との出来事について、母親の生活習慣と義父の暴行のことしか語っ

⁵⁷乙一(2002:45)『GOTH 夜の章』。

ていないし、家族と普段どんな会話をしたのかということも語られていない。その代わりに少女とユカとの出会い、普段ユカとどんな生活をしたのか、何の遊びをしたのかなどのことについては詳細に語られている。少女は「ユカの話す言葉が理解できるというわけではない。でも、何と言っているのか、漠然とわかる⁵⁸」と述べた。要するに、少女にとっては家族や周りの人間より、ユカという犬のほうを信頼しているといえる。しかし、少女とユカとの楽しい日々は、母親が義父を家に連れてきたことによって終わりを告げた。義父が犬嫌いである少女がいない時、いつもユカをいじめた。少女はユカがいじめられたことについて悲しいと感じた。そして男性が家にくる日の夜に家を出た。少女が仲間だと思ふユカが男性にいじめられたことを悲しいと感じたということについて、作中では語られていないが、少女は自分の学校での出来事に関して何かを共感していたかもしれないと考えられる。そして、男性が家にいる日の夜に、少女はユカを連れて家を出たということが少女は学校で何かがあつて学校を離れようとして登校拒否になつたということと一緒にとも考えられる。少女は自分とユカとの楽しい日々を終わらせた男性を殺そうと反抗し、練習として他人の家の子犬を誘拐して噛み殺すというペット誘拐事件を犯した。ここで少女はどうして子犬を練習相手にするのか。仲間だと思つているユカが犬であり、少女は犬を練習相手にし、人間の男性を殺そうとした。少女はユカとの間に言葉がいらないので、自分に何を伝えているのか漠然とわかるという、ユカの命令によって練習するターゲットを選んでいた。

しかし、少女が書いた一連の事件についての手紙を読んだ僕は、少女が多分、犬の深い黒色の目を通じて、もう一人の自分と会話していたと考えている。つまり、少女にとっては、自分が信頼して頼っているユカが犬の外見をしているだけで自分と同質の存在だと考えていたのであろう。だから少女は犬のような戦い方を身につけて敵だと思ふ相手を殺そうと考えたのである。

僕は、少女が失敗して男性に殺されそうになつた時、こっそりナイフを渡して彼女を助けた。僕が渡したナイフは「暗黒系」の犯人の家から勝手に持ち出し、おそらく凶器として使われていたらしいナイフセットの中の本で、それを抜き取って持ってきていたナイフである。僕は、この 23 本のナイフセットのことが「時々、刃に映つた自分の顔が、かつ

⁵⁸乙一(2002:51)『GOTH 夜の章』。

てそのナイフによって殺された女性の顔へと変化した。それは錯覚には違いないが、確かに苦痛と絶望の呼びが刃に染みこんでいるのを感じた⁵⁹」と語っている。少女は、僕から貰ったナイフで男性を殺害した後、ユカを連れて家を飛び出した。僕は、男性の身体に突き刺さったままのナイフを見て、そこはナイフがあるべき場所だと思ったという。23本のナイフの形に関して語られていないが、もともと調理器具として使われているものだと考えられるであろう。もともとナイフは食べ物を作るために調理器具であり、それを使って食べる場合もあるのだが、『犬』でのナイフは殺すための凶器として使われた。ナイフも少女が凶器とした口（歯）と同じものだと言える。それまでの第3者として事件を傍観するというルールを破った僕は、口を凶器にする少女に、ナイフを渡した原因について、もともと調理器具として使われるはずのナイフが苦痛と絶望に満ちた凶器になってしまったので、少女に相応しいと思っている。僕は家族と世間話をするとき、自分のことについて「ときどき、家族に何を話していたのか、なぜ母や妹が笑っているのか、何もかもわからなくなる。なぜなら、家族へ聞かせる話のほとんどは、無意識的な反射であり、咄嗟に考えた作り話であり、まったく意味をもたない感想だったからだ」と述べた。そして、自分の家族だけではなく、クラスメートの前にもそういう自分を演じている。つまり、僕は普段は周りの人々に無関心である人である。犯罪者や殺人事件だけに興味も持っている。しかし、事件のことに手を出さない、ただの傍観者でいることを暗黙に守っていて、要するに、『犬』での事件が仮に少女が逆に男性に殺されたという結末になったとしても、僕にとっては無関係なことであった。しかし、僕はルールを破って手を出した、ということから見ると、怒りで狂った殺人より、少女のほうが僕に関心を持たせたと考えられよう。

少女が子犬を誘拐するのは男性を殺害するための練習だと知った僕は、「焼けた砂漠の砂のように、渇きを訴えている⁶⁰」と訴えているようなナイフを、殺人のために大量に練習してきた少女に渡したと考えられる。つまり、少女が殺されそうになったからナイフを渡したのではなく、少女の今までの努力を無駄にしないようにするために、渡したのである。少女は殺しを繰り返す中で自分がやっていることが道徳としてどうなのか、正しいのかを全く語っていない。また少女は、自分が勝ったらユカは喜んでくれるので正しい行為だと思っている。つまり、犯人である少

⁵⁹乙一(2002:77)『GOTH 夜の章』。

⁶⁰乙一(2002:105)『GOTH 夜の章』。

女は日常から一線を越えた犯罪者なので、少女のそういう部分に僕は関心を持ったのであろう。

最後に「記憶」の犯罪と人物について論じたい。「記憶」での犯罪は、僕と同じ趣味を持つクラスメートの森野夜が9年間ずっと隠していた秘密と関わる。森野夜の本名は、森野夕だった。本物の夜は、実は9年前に首吊りの死体を真似して人を驚かそうとした際に、不測の事故が起こって死亡した。当時、双子の夕は取り返しのつかないことが目の前に起こってしまったことから逃げるために、湿った土の地面に夜の靴跡が残っていないということを利用し、夜に成りすまして自分が事故のことについて何も知らない振りをした。そして9年を経て家族にも知られていないままに森野夜として高校生になった。

森野夜と森野夕はそっくりな双子であるが、性格には少々違っている。夜はあまり感情を出さない子で、家族と話す時もいつも無表情だったが、死体を真似するという悪戯をするときだけ、微笑を浮かべていた。また死に関する知識が夕より豊富で残酷な少女であった。しかし夕は夜と違って感情を表しやすい子で、両親と話をするとき、いつもにこにこ微笑を返していた。よく夜とともに死体を真似して人を驚かす悪戯をしていた。夜のような死に関する知識は豊富ではなかったが、死体を真似するのは夜より上手であった。しかし、時折、夕は夜の言うように危険な死体の真似をさせられ、ひどいと思うことがあった。それでも危険があったらすぐ知らせるといって近くに隠れて通りかかった人々の反応を見ていた夜は危険を知らせもしないで、罪悪感も感じないままに夕が危険になる寸前までの出来事を見ていたことがあった。また、犬嫌いの夜は夕に命令して実家で飼っている犬にこっそり漂白剤を食べさせ、夕は怖くて嫌だったが、夜は夕の懇願を聞かない振りをし、夕の手で餌に入れさせ、結局、犬は死ななかったが、二日間苦しんでいた。犬が苦しんでいる間、夕は泣いた。つまり、夕は夜ほどに残酷な子ではなく、良心のある普通の子だったのである。夕は夜の理不尽に対して訴えないで、いつも自分の姉の罵りを黙って受け止めた。しかしながら、姉妹の関係は良くいつも遊んでいたのに、小学2年の夏休みの時に事故が起こり、夕は夜をおいて逃げたのである。

事故のとき、森野夕は、すぐに助けに入って両腕で吊り下がった姉の夜の身体を抱きしめて支えたが、子どもの夕は力が足りず、夜は喚き声を上げているばかりであった。夕が力を抜くと、夜は苦しんで夕を罵った。その言葉を聞いた夕は腕から力を抜き、夜は首吊り自殺のように死

亡した。夕は懸命に逃げる道を考え、忘れられずに誰にも言えない秘密を抱えた夕は、かつて自分の手首にリストカットしたこともあり、彼女は9年間ずっと罪悪感を感じてきた。

「記憶」の冒頭で僕はクラスメートの森野夜に似た雰囲気の映画のヒロインのことについて語っている。映画のヒロインには死者が見える能力がある。そして、どうして死者が見えるのかという主人公たちに質問されたヒロインは「私は半分、死んでいるようなものだから……。私の心は暗黒なの⁶¹」と答えた。「暗黒系」で、森野夜は3人目の被害者の死体を見た時、自分が犯人の情報と新たな被害者のことを警察と被害者の家族に知らせるつもりのない良心のない人だと思っていると同時に、死体を見てショックを受けて被害者になった少女のことや彼女の家族が失踪した娘を今でも探しているのかということなどを考えている。そして3人目の被害者の格好をして、自分の名前で埋葬された姉の夜のこと、そして死者になった夜に成りすまして過ごしている自分のことを考えるうちに、犯罪者や殺人事件より被害者のことが気になるようになったと考えられる。

森野夜は僕に「最初に私の名前を呼ぶのは、あなたなんじゃないかと思っていたの⁶²」と語った。僕は、自分の家族やクラスメートの前で、偽の自分を演じ、本当の自分は、実は無表情で、犯罪者や殺人事件だけに対して関心を持っている。だから森野夕は、僕に自分の姉と同じ雰囲気を感じて近付いたという。つまり、「記憶」で、僕が残酷な少女と同じタイプの人間だということから見ると、探偵役の僕が真相を突き止めることが出来るのは、僕自身が罪悪感を持たず良心もない残酷な人物だからだと言えよう。また「記憶」の結末でプレゼントとして彼女の実家の納屋から勝手に持ち出した犬用の紐を彼女に与えた。残酷な少女の雰囲気と似た僕は、紐を彼女の首に巻きつけて結んだ。そして、夜は緊張感が解け、静かに解き放たれていったと語られている。夜に成りすまして生きている夕は怖くて逃げたが、しかし夜として過ごすことは誰かに名前を呼ばれたら逃げ場はどこにもないということを意味した。また、自分のせいで夜は死んだという罪悪感で手首にリストカットし、あるいは時々首に合うと思う紐に巻き付けないと眠れないという不眠症になるという自傷行為があった。

⁶¹乙一(2002:125)『GOTH 夜の章』。

⁶²乙一(2002:125)『GOTH 夜の章』。

第4節 『GOTH 夜の章』3篇の陥穽と叙述

『GOTH 夜の章』に収録された3篇の短篇の犯人の名前について、「記憶」以外、「暗黒系」と「犬」の犯人は名前は語られなかった。そして、「暗黒系」の名前のない犯人が物語の陥穽だと考えている。

「暗黒系」は僕という一人称で語られている。そして、犯人が最初に物語に出てくる場面は森野夜が犯人の手帳を拾ったことについて、僕が森野の説明を聴いているところである。

そのとき、喫茶店の中には、彼女以外に五人の客がいた。

森野はトイレへ行くために席を立った。店内を歩いている途中、靴の裏におかしな感触があった。床は黒い木の板でできているが、そこにだれかの手帳が落ちており、踏んでしまっていた。彼女は手帳を拾い上げ、ポケットに入れた。持ち主を探して返そうとは考えなかったようだ。

トイレから戻ったときも、客は夕立の景色を窓から眺めているだけで、数は変わっていなかった。夕立の激しさは、用事のために短時間、外に出ていた店長の服装からわかった。全身が濡れていた⁶³。

上述のように、森野が犯人の手帳を拾った時の状況が語られている。そして、手帳の持ち主は喫茶店の店長である。店長のことについて、薄暗い静かな喫茶店を経営しているという情報の他に、森野を含めて喫茶店によく行く常連客がいて、そして店長はでしゃばらない人というだけの情報で紹介された。犯人について説明するのは森野であるが、彼女は僕以外に常に人を避けて行動していた。また、誰かが森野に声をかけても無表情しか返ってこない。結局、森野のそばには僕と家族しかいないし、人間関係を円滑しないし、一人でも大丈夫なような人物として書かれている。つまり、たとえ森野が気に入ってよく行く喫茶店があったとしても、店の店長に名前や雑談でも話をする客でもないことによって、森野の説明を聞いた僕は喫茶店を経営しているでしゃばらない店長というだけであり、見ればわかる表面上の情報しか語られていない。

また、森野が手帳を拾った状況に関して、彼女は二回トイレに行った。一回目は手帳はまだ落ちていなかった。席に戻る直後に夕立が降り始め、森野を除いて5人の客が夕立が止むまで席に固定された。そして二度目にトイレに行ったとき、今度は手帳が落ちていた。森野は手帳を拾って席に戻った。客の数は変わっていない。そのとき服装の全身が濡れてい

⁶³乙一(2002:13)『GOTH 夜の章』。

た店長が店に戻ってきた。森野が手帳を拾った状況の説明によって、手帳の持ち主が5人の客と店長に絞られているのはわかった。

その後の僕と森野の行動は、手帳によってまだ報道されていない誰にも見つけられていない3人目の被害者を捜しに行くことだった。発見した彼女は、3人目の被害者の少女のような格好をして、犯人に狙われて誘拐された。僕は連続猟奇殺人事件の犯人に殺されたかもしれないと思って、彼女の死体を捜しに行ったが、何も見つからなかったのもう一度情報を整理して犯人は誰なのか推理することにした。僕は森野が手帳を拾った時の状況の説明と彼女を探すために行った山の停留場にいるときに気付いた手帳の字が水溶性のインクで書かれたという情報で、手帳を落とした犯人について想像をめぐらせた。そして、僕は常に手帳を持ち歩くことによって、犯人は「手帳を頻繁に見たいからだ。頭の中の暗黒の思考が入り乱れるたびに、手帳を読み返して気を落ちつける。そうやって頻繁に手帳を手にして確認するほど、なくす時間や地域が狭まることにつながる⁶⁴」と考えていた。そして、僕は手帳の内容が水溶性のインクで書かれていたという情報で「手帳はだれかに拾われたが、内容は読めなかった。その結果、警察には通報されず、水口ナナミもまだ発見されていない⁶⁵」という仮説を立て、手帳を落とした日に夕立の合間に外に出たのは店長一人だけだったということによって、僕は作中で名前を語られていない喫茶店を営んでいる店長としか説明されていない人物が犯人であることが分かったのである。

最初に犯人のことを説明している時、普通に喫茶店を営み、店も常連客がいて、平凡な人だと連想されるような人物であり、猟奇的な事件を犯した犯人だと思えなかった。僕の推理によって店長が犯人であることが分かったことによって、事件に何の関係もない平凡な人という印象が覆された。第2節で述べたように、もともと平凡な印象があった店長がどうして全国を騒がせた連続猟奇殺人事件という犯罪を犯したのか、という動機は語られていなかった。その代わりに、どうして探偵役の僕が事件の犯人を探すより、死体になった森野夜を優先させたのか、という理由が語られ、そのために犯人を捜すことにしたことが語られていた。

つまり、どうして犯人が犯罪を犯したのかということの代わりに、どうして探偵役の僕が犯人を探さなければならないのかということのほうに語られていたわけである。とはいっても、犯人である店長が連続猟奇

⁶⁴乙一(2002:40)『GOTH 夜の章』。

⁶⁵乙一(2002:42)『GOTH 夜の章』。

殺人事件を犯した原因について、僕が「しかし、僕たちは手帳の持ち主が行なった事件の禍々しさの虜となっていた。犯人は日常生活のある瞬間に一線を踏み越えて、人間のもつ人格や尊厳を踏みにじり、人体を破壊しつくしたのだ。それが、悪夢のように惹きつけて止まない⁶⁶」と語っているのだから、僕は連続猟奇殺人事件に感動したということが分かる。また、その一方で、どんなに平凡で普通な一般人に見えるといっても、見えない暗黒のような部分もあるということも語られている。つまり、犯人が連続猟奇殺人事件を犯したのは動機も理由もなく、ただやりたいからやったということが考えられる。普段、暗黒な自分を抑えるために手帳に記録した自分が犯した猟奇的な事件の内容を読み返しているのだから。結末で僕が記念として犯人の家から勝手に持ち出した無数の十字架を描いたメモがあったが、十字架の数は回想した回数かもしれない、あるいは犯した犯罪の数かもしれないが、ただ3人目の被害者である少女のように誰にも見つかっていなかったのだといえるであろう。

「暗黒系」で最初に犯人が登場した時、犯人の位置から排除されるように犯人のことは詳細に記述されていなかったが、僕は唯一の手がかりの手帳によって、犯人が喫茶店の店長であることを知った。動機や性格などの語られていない普通の一般人の位置から異常者の位置に、犯人が移動することが物語に設置された陥穽だと言えるだろう。一人称語りである僕もまた、連続猟奇殺人事件に惹きつけられるのを語られると同時に、殺人衝動のような暗黒の内面も説明され、暗黒系というタイトルである意味も語られていたのである。

「犬」は少女の一人称と僕の一人称で交互に語られている。最初に少女の一人称から語られ始める。語られている内容は、少女がユカに従い、橋の下にある広場まで誘拐して連れてきた子犬を噛み殺す場面である。少女が子犬を噛み殺す場面を語るたびに、実行犯とユカはどちらが犬なのか人間なのかというような混沌とした文章で描写されている。

私はその動物の首筋を、上顎と下顎の間にはさんだ。口の中で、相手の首の骨が折れる。その音と感触が、顎から伝わってくる。その動物は脱力し、私の顎にぶら下がった。

容赦はしない。本当はこんなことしたくはないのだけど、ユカがこうすることを望むのだ。だから私は、相手を殺す。

上顎と下顎を開けると、口からその動物の体が落下する。地面に

⁶⁶乙一(2002:21)『GOTH 夜の章』。

力なく横たわる。瞳に光は無く、完全に沈黙している。

私は吠えた⁶⁷。

上述のように、子犬を噛み殺す場面は、少女の行為が犬だと思えるように描写されている。少女は自分とユカの間言葉が要らないし、何を考えているのかということがわかると述べている。続いて僕の一人称で語るとき、僕はゴールデンレトリバーを連れてくる一人の少女とすれ違った。語られた少女の外見と犬の深い黒くて知的な目ということによって、先に少女の一人称で語られた中に、ユカの望みで仕方なく子犬と戦って噛み殺したのはゴールデンレトリバーの犬であり、そしてユカというのは飼い主の少女だと錯覚が生じる。しかし、少女が家にいるときの出来事に関して語られているとき、「時々、知らない人間が家にくる。大きな、人間の男だ。「ママ」が外から帰ってきたとき、そいつをいっしょに連れてくる。そうすると、家の中の空気に、嫌な臭いが混じる。それまでの私とユカの楽しかった雰囲気、急にしぼむ。そいつは家にあがると、まず私の頭を撫でる。「ママ」に笑いかけながら、そうする。でも、決して私と目を合わせようとはしない。そいつの手の感触を頭で感じながら、私は噛みついてやるかといつも思う⁶⁸」と述べている一文から見ると、「人間」や「噛みつく」などの語彙で、少女自身の考え方はやはり犬のように思えるが、しかしなぜ男性が家にあがると、まず頭を撫でたのは子どもではなく、犬なのか、また、もしユカが本当に少女のほうだったら、どうして男性にいじめられたのに、少女の母親が何も気付いてなかったのか。前にも述べたように、少女の視点で自分と母親は普段どんな会話をしたのかということについて何も語られていない。ただ、自分の母親の仕事時間と、ある日からよく一人の男性を家に連れてきたということだけ。もしかしたら少女の母親は何も気づいていないというより、無関心だといえるであろう。しかし、少女の視点で語られている少女と母親のことについて片親家庭ということしか語られていない。つまり、無関心なのは母親ではなく、普段、母親とどんな会話をしたのか全然語られていない少女自身かもしれないといえる。要するに、家族より犬を信頼して頼っている少女の一人称は犬のように思えるのであって、だからこそ混沌とした語り手だといえ、これが物語の陥穽ともいえる。

少女は最後の練習の夜に「ユカが、頷いた。私が理解したことを、彼女は感じ取ったのだろう。彼女はこれまで、私が自分で気づくのを待つ

⁶⁷乙一(2002:50)『GOTH 夜の章』。

⁶⁸乙一(2002:64)『GOTH 夜の章』。

ていたのだ。もう、練習は必要ない。私はそのことを彼女に訴えた。男は今夜、うちに泊まっている。明日の朝、決着をつけようね。ユカはそう囁いた⁶⁹」という少女とユカの会話があったが、僕の一人称に代わると、叢の中に身を隠している僕が見たのは、子犬を噛み殺した後、橋の下で一人で「明日の朝に…」とつぶやいた少女の姿であった。そして、殺戮の後、ユカから「帰ろう」といっているように聞こえた少女は、実際に僕の一人称で少女は自分から犬に手を招いているところである。要するに、混沌とした語り手である少女の視点は僕の視点によって本当のことを伝えられていたのである。つまり、「犬」の中に少女の一人称で陥穽を設置し、そして僕の一人称で陥穽であることに気付かせたのである。しかし、僕の一人称が少女の混沌とした一人称を解釈する働きをしたが、探偵としての僕は少女の事件を解決したわけではなく、むしろ犯人である少女を助けた。つまり、僕という人物は、ただ事件の真相を読者に伝えただけなのである。

「記憶」では、僕の一人称で、森野夜が9年間、誰にも知らせたくなかった秘密の真相を突き止めたという物語が語られている。この物語の陥穽とは、森野夜が僕についた嘘であろう。森野は自分にも夕という双子の妹がいたが、9年前に田舎に住んでいる頃に、納屋で一人で死んでしまったと語った。森野の話聞いた僕は、森野の妹の死んだ事故現場に行ってみた。そして、自分が森野の話について思った疑問と姉妹である夜と夕が死に対する知識の豊富さについてのこと、双子でありそっくりな姉妹の性格と見分けるための靴の違いということによって、実は死んだのは妹の夕ではなく、姉の夜であることを推測した。事故が起こった当時に、普段のように悪戯をしようとする姉妹に不測の事故が起こり、夕の目の前で夜は亡くなってしまい、怖くて逃げたい夕がみんなの前で嘘をつくことにしたのだった。

最初に、僕に森野の妹の夕について話したのは森野夜自身である。僕は9年前に亡くなった森野の妹の話を知りたいといい、森野は少し沈黙の後に「いいわ」といった。しかし、犯罪者の話なら別だが、もともと僕は他人に対していつも関心を持っていない。つまり、もし森野は自分の9年前に死んだ妹がいるという話をしなければ、僕は森野がずっと嘘をついていることを知るはずがないことを知っており、真相を突き止められることもなかったはずである。だから「記憶」の結末で森野は僕に

⁶⁹乙一(2002:101)『GOTH 夜の章』。

自分が初めて会ったことについて話をした。

やがて、言うか言うまいかを躊躇うように彼女は口を開いた。

「……はじめてあなたと会ったのが、いつ、どこでだったか覚えている？」

高校二年の、この教室だと思っていた。そう答えると、彼女はわずかに残念そうな顔をした。

「中学のとき、人間の輪切りが展示してある博物館であなたを見かけたの。その次は、高校に入学した春。図書館で、死体解剖の医学書をあなたは読んでいた。あのときの人だと、私はすぐに気づいたのよ」

だから、教室で僕が演技しているとすぐにわかったのだ。僕は腑に落ちた。お互いに、周囲へ隠していた自分の正体を見つけあったことになる⁷⁰。

上述のように、森野夜（=夕）は中学のときに僕のことを知った。そして、高校に入学して図書館で僕ともう一度会ったとき、すぐ誰なのかを気づいた。つまり、はじめて僕と会ったときからずっと気にかけていたと考えられる。そして、高校2年になってクラスメートになり、普段、人を避けて行動するはずの森野は僕に声をかけた。森野は僕と初めて会った時のことを話したあとに、「最初に私の名前を呼ぶのは、あなたなんじゃないかと思っていたの……⁷¹」といった。つまり、初めて僕と会った時からずっと彼のことを気にかけていた森野は、僕に自分の本当の名前を呼ぶのを期待していたとっていいであろう。

僕は犯罪者や殺人事件のこと以外、自分の家族も含めて誰に対しても無関心である。そして、姉の夜は感情を表しやすい夕と違って常に無表情であった。死に関する話や死体を真似する悪戯をするときだけ微笑んだ。要するに、僕と姉の夜は、今の森野にとって同じ雰囲気を持つ人だったのである。だとすれば、どうして姉の死から逃げるために自分の人生を変えてしまう嘘をつくことにした森野夕が姉の夜と同じ雰囲気を持つ僕に近づこうとしたのか。

「暗黒系」の犯人は喫茶店を経営して一般人のような表があり、そして裏には殺人鬼である暗黒の部分もある。彼に殺された少女の死体は、もとの姿を壊して異常な雰囲気を現す形に変えた。つまり、喫茶店の店長である犯人は普段の正常な自分を持ちながら、また連続猟奇殺人事件

⁷⁰乙一(2002:181-182)『GOTH 夜の章』。

⁷¹乙一(2002:182)『GOTH 夜の章』。

を犯した異常な自分も保持していた。「犬」のずっと小学校を登校拒否していた少女は、唯一の家族である母親との会話のことを物語に語らずに、毎日犬と楽しく過ごしていた。母親が一人の男性を家に連れてきて犬をいじめた日から少女はよく犬を連れて家を出て町に彷徨った。少女は犬の目に映った深い黒色にいるユカという自分の話を聞いて、男性を殺すために獣のような戦い方を身につけた。つまり、「犬」の犯人である少女は被害を加えられたら逃げる自分がいる一方で、また、ユカと名付け、いじめられたら反撃をする深い黒色の目の中にいる自分もいる。要するに「暗黒系」と「犬」の犯人は、内面に表裏の両面を持つ人物として描かれていた。「記憶」では外見がそっくりは双子姉妹である夜と夕は、姉の夜は夕が危険になっても知らせもしないで、ただ近くで見ているだけの残酷な子であった。一方、夕はいつも夜と一緒に死に関する話をし、死体を真似する悪戯もするが、犬に漂白剤を食べさせて苦しませたことを恐怖に感じて夕は泣いた。また、不測な事故が起こった途端に夕はすぐ夜を助けようとして駆け付けた。つまり夜と比べて夕は残酷ではない子である。「暗黒系」と「犬」で、一人の人物の内面に相反する表裏の両面があることを、「記憶」では双子という形で表したと考えられる。

森野は夕という自分のことを弱い子であり、いつも姉の夜に頼っていたと述べた。また、「ねえ、私は姉さんを憎んでなんかいなかった……。ときどきひどいことをされたけど、それでも姉さんは、かけがえのない存在だったのよ⁷²」と僕に語った。作中冒頭で、僕の一人称語りでは、森野について、自分の心は暗黒であり、幽霊が見えるのは半分が死んでいるからと語っている或る映画のヒロインの雰囲気と似ていると語っている。だが、作中末尾では、僕は紐を森野の首に巻き付け、これで緊張が解け、内側にあるものが柔らかく静かに解き放たれた、と語られている。要するに、一人の人物の内面に相反する表裏の両面があるということ、双子という形で表し、一面の人物がいるからこそ、もう一面の人物がいるのだということによって、姉の夜を失った夕が半分を喪っているということになるのである。また、姉と同じ雰囲気をした僕に引きつけられたのも、失ったものを求めているのであろう。そして、妹の夕が姉の夜に頼っていたように、誘拐されて僕に助けを求めた森野は、僕を信頼して頼っていたのであろう。

「記憶」で森野夜として過ごす森野夕の嘘を物語の陥穽として設け、

⁷²乙一(2002:184)『GOTH 夜の章』。

真相を突き止めた僕にクラスメートの森野は死んだはずの夕だという事実を告げて驚きを与えると同時に、どうして森野は死んだ姉妹のことを自ら僕に話したのかという疑問に導かれたといえよう。

第5節 『GOTH 僕の章』3篇の梗概と構造

『GOTH 僕の章』に収録された3篇の短篇、「リストカット事件」と「土」と「声」の事件は、『GOTH 夜の章』に収録された「暗黒系」と「犬」の事件と同じく、主人公の僕が住んでいる町で起きている。「リストカット事件」は春に起きた、老若男女や動物も問わず、手首や前脚を切り落として持ち去るという連続手首切断事件であり、僕はマスコミを賑やかにさせていた連続手首切断事件とひそかに関わっていたのである。

連続手首切断事件の犯人は篠原という僕が通っている高校で化学教師を勤めている。篠原は子供の頃から手が好きで、人体の一部として手がとても魅力があり、篠原の目から見ると、人間はただ二つの手をぶら下げた生物であった。小学生の頃に、篠原は自分の姉の捨てた着せ替え人形の手を誰も気づかれないように切り落として持ち去った。そして、篠原にとっては人形の手をなぞった感触は母や先生から言葉よりやさしくて充実した感じがあった。以来、人形の手だけではなく、猫や犬の動物の前脚の先端を剪定ばさみで切り落としたこともある。まるでコレクションを集めるように様々な手を切り落として収集している。この趣味は一般人に受け入れられないと承知しているので、篠原は普段、異常に手が好きな自分の本性を隠して過ごしている。そして、主人公である僕が高校2年になった春の季節に、篠原は初めて人の手を切り落とした。最初は乳児の手で、母親が赤ん坊から目を離した隙に剪定ばさみで小さな手を切り落としてポケットに入れた。また、乳児の手だけではなく、学生や社会人などの手も、肉切り包丁で気絶した人間の手首を切断した。篠原がやっていることはマスコミを賑やかにさせることになったが、手首が切断された被害者たちは誰も犯人の顔が見ていないというニュースを見て篠原は安堵した。しかし、自分が犯人扱いされたことに篠原は他人が勝手に価値観を押し付けるように、とても不愉快に思っている。一方、殺人犯や殺害事件に関して鑑賞するのは僕の趣味であり、リストカット事件というマスコミに名付けられた連続手首切断事件に関するニュースや新聞を日頃から集めていた。学校の間試験前のある日、高校で化学教師を勤めている篠原は午前中の授業で「昼休みに化学準備室を片付けをするので、ひまな者は来て欲しい」と告げた。僕は化学教師がい

つも化学準備室で試験の問題を作っているという噂を聞き、もしかしたら作成メモがあるかもしれないと考えて、僕は化学準備室を片付けるのを手伝うことにした。しかし、僕は篠原に気づかれないように化学準備室のゴミ箱を他の教室のゴミ箱を取替え、片づけを終わったあとに僕は隠した化学準備室のゴミ箱の中に試験の作成メモを探したが、見つけたのは作成メモではない、手を切り落とされた人形であった。僕は手のない人形を見てマスコミをにぎわせたリストカット事件のことを思いついた。もしかしたらリストカット事件の犯人は化学教師の篠原なのではないかと考えた。そして、化学準備室のゴミ箱から手のない人形を発見して以来、学校の試験のことより僕はリストカット事件と篠原のことが気になりつつあった。そして、僕はクラスメートから、2年になって同じクラスになった森野が中学の時に自殺したことがあり、今は手首にリストカットした傷跡が残っているということを聞き、僕は篠原を誘導して利用し、森野のリストカットの傷跡のある手首を手に入れるという計画を立てて実行することにした。僕は篠原の家に侵入し、篠原が冷蔵庫に保存したすべての手を盗んだ。また、僕は篠原に手を盗んだ犯人が森野だと思わせようとするために、偽の証拠を残した。僕の計画は順調に進むが、最後に化学講義室の教壇の裏に隠れ、篠原が怒りで森野の手首を切り落とした場面を見届けようとするのだが、僕の予想外のことが起こった。森野は痴漢撃退用のスプレーで反撃して椅子で篠原を殴りつけた後に、外に出て人に助けを呼んだのだ。そして、結局、篠原はリストカット事件の犯人として逮捕されたわけではなく、痴漢として教師の職を追放されて町を離れた。夏休みが終わったある日に、放課後の教室内で森野と話していた僕は、今年の春のリストカット事件のことを思い出した。そして、僕は切断されなかった森野の手首を見て、もしかしたら篠原が違った箇所で切断したかもしれないという考えに思い至り、切り落とされていないことをよかったと思っていた。僕はリストカットの傷跡が残したままの手首がほしかったからである。

以上が「リストカット事件」の粗筋である。物語のプロットは夏休みが終わったある日の放課後から始まる。森野は帰り支度をしている僕に近付いて映画の話をした。僕は森野の話聞きながら、彼女の白い肌をしている手首を見て、春の五月末に、自分はまだ森野と言葉を交わしていない頃に行っていた事件のことを思い出した。そして、篠原を視点人物としての三人称と僕に一人称を交互に五月末に行なわれたリストカット事件のことを語り始めた。篠原を視点人物としての三人称で、彼が連

続手首切断事件という犯罪を犯すことについて、そして手を盗まれて心の支えを失って悲しくなった篠原は、僕が残した偽証拠を見て悲しみを怒りに変えて森野の手首を悪質な思想のある彼女から解放するという理由で切り落とすために行動した。また手首を切り落とすだけではない、盗まれた手の居場所を聞きだした後彼女を殺害することも考えた。しかし、ただ僕の偽証拠に騙されて誘導された篠原は、森野に反撃されて痴漢として逮捕され、教師の職を失った結末になった。僕の一人称で、中間試験の問題内容を知りたいという理由で篠原に化学準備室を片づけを手伝うことにした。しかし、見つけたのは問題の作成メモではなく、手のない人形であった。以来、僕は篠原がリストカット事件の犯人ではないかということを考えをした。そして、森野が自殺で手首にリストカットの傷跡が残っているということ聞き、もし篠原が犯人であったら、彼を利用して森野のリストカットの傷跡のある美しい手首を手に入るという計画をした。そして、篠原の家に侵入し、今まで篠原が集めた手をすべて盗んで偽証拠を残して家に帰った。しかし、篠原の行動は僕の予想通りだが、森野の反撃は予想していなかったので、計画は失敗になった。ここまで、春の五月末に行なわれた事件についての話が終わり、僕と森野が映画について話をしている場面に戻った。そして、僕は話題を変えて森野に今年の春に行なわれたリストカット事件の話をした。またもし篠原が間違っただけで切断されたと考え、僕は森野の美しいリストカットの傷跡のある手首が篠原に切り落とされなくてよかったと思っていた。

篠原は僕の住んでいる町で連続手首切断事件という犯罪を犯し、マスコミにリストカット事件という名前と呼ばれた事件の犯人であるが、最初に篠原を視点人物としての三人称で語られる時、篠原がどうして手を切り落とす犯罪を犯したのかということを語られていた。そして次に僕は自分の私欲で篠原をどのように誘導するという話を語られている。そして、「リストカット事件」は僕が春の五月末の事件を思い出したということから始まり、そして篠原の視点と僕の視点を交互にして僕が森野の手首を入れるために計画した誘導作戦について語った。そして僕の五月末に行なわれたリストカット事件についての思い出が終わり、計画が失敗したが、結果として切断されなかったことはよかったと思っていた。つまり、「リストカット事件」という物語はリストカット事件の犯人である篠原に仕掛けた誘導作戦という僕の計画である。また、「リストカット事件」のプロットは僕が春の五月末に行なわれている事件のことを回想

するようになっていくということによると、リストカット事件というのは篠原の連続手首切断事件という犯罪ではなく、僕が篠原を利用して森野の手首を切断しようとするということである。『GOTH 夜の章』に収録する「暗黒系」と「犬」と「記憶」での僕は、事件を解決していないが、真相を突き止めたという探偵役として動いているが、「リストカット事件」での僕は探偵役というより、自分の私欲犯人である篠原を利用し、社会には認められない行動をする犯人役だといえる。

「土」での犯罪の被害者は世間にはただの失踪人口として一時的に町で騒がした。犯人は佐伯という人物であり、主人公の僕が住んでいる町で警察の仕事を勤めている。佐伯は子供のころから、今の家で住んでいる。家族は両親と祖母がいる。佐伯の両親は共働きなので、いつもよく一緒にいるのは祖母であった。そして佐伯の造園の趣味も祖母からの影響である。子供の佐伯は趣味でよく女の子と間違われることが多いという外見で当時にいつもクラスメイトに馬鹿にされて傷ついたが、植物に水をあげる自分は祖母に優しい子だねといわれ、佐伯は落ち込むたびに、祖母の言葉を思い出すと祖母の気持ちを裏切らないよう正しく生きようとした。しかし、佐伯は時には祖母を箱に閉じ込めて地面に埋めることを考えることがあったが、一瞬そんな自分を許せないという気持ちで当時にはただ考えるということだけで実行することはなかった。それから時を経て佐伯は成人して自分が生まれ育った町で警察の仕事を勤めることにした。そしてある日、両親と祖母が交通事故でなくなってしまった。佐伯は就職先でそのことを知らされた。家族がまだいたころ、佐伯の趣味はただ鉢で植物の栽培したり、庭木の手入れしたりだけの程度であった。しかし、一人になった以来、佐伯は庭の土質の改良や塀の内側に庭木を少しずつ増やしていった。まるで家族がいなくなった以来、誰かを箱に閉じ込めて地面の埋めるという悪魔のような想像をしている自分を止めるために、造園の趣味に熱をこもった。やがて、縁側の前の季節ごとに違う花を栽培している花壇を作った空間を除き、塀の内側に余分あった敷地は林のようになっていた。木を栽培する空間がないため、佐伯は時折ただコップで穴を掘り、そしてまだ土を戻すという行動で妄想から目を背けるための作業を続けていた。こんな日が続いた二年後に、コウスケという幼稚園に入ったばかりの男の子が自分の林の庭に迷い込んできたというきっかけで、仲良くなった。時々コウスケの家族と一緒に出かけることもあった。そして、一瞬に佐伯はコウスケを土に埋めるということを考え始めた。最初はこんなことは考えでもだめだと思ってい

るのだが、佐伯はコウスケを閉じ込めるサイズはちょうど良い棺桶を作った。そして、ある日にコウスケは自分の父親が大切にしていた骨董品を落として壊してしまった。日ごろから骨董品を触ってはいけないといわれたのに、父親に言われたことを守らなくて取り返しがいいことをしてしまったコウスケは、助けを求めて佐伯の家に行った。しかし、佐伯にとってはこれはチャンスだと思っている。コウスケを騙して棺桶の中に閉じ込め、縁側の前の花壇に穴を掘って棺桶を埋めた。そして、翌日の夕方に少し地面に埋めたまだ佐伯の意図を気づいていないコウスケと話をして空気穴として棺桶の上に開いた穴から水をいれ、コウスケを溺死して殺した。コウスケの両親はコウスケを探すために佐伯のところに尋ねに来たことがある。しかし当然のように佐伯は知らないふりをし、そして悲しい顔をしてコウスケの両親と一緒に行方不明になったコウスケを探し回っていた。しかし結局誰も行方を見つからないまま、コウスケは失踪人口になってしまった。コウスケの両親は悲しくて引越しをすることになった。コウスケを誘拐して殺した犯人である佐伯は怖くてコウスケを埋めたところの植物の手入れもしない、近寄らないようにした。そして3年間を経て、コウスケが住んでいる家は新たな家族が引っ越してきた。佐伯もこの3年間にいつも通りにだれにも自分はコウスケを誘拐した犯人だと気づいていない、日常生活を過ごしていた。しかし、すでに一人を地面に生き埋めした佐伯は時々また人を埋めたいということを考えた。そして気づくと佐伯はまた誰にも気づかないため、自分の家の中に棺桶を作る作業をした。そして外出すると時折獲物を見る目で周りの人を見ていた。そしてある日に車で家に帰る途中で、黒い制服を着て長い髪をした少女を見た佐伯は、彼女を殴って誘拐した。家に到着してから、彼女を作り上げた棺桶の中に入れた後、コウスケの隣の地面に埋めた。佐伯は自分がやったことに怯えて彼女の顔を見ていないので、少女の鞆の中から見つけた生徒手帳によって、少女の顔と森野夜という名前を確認した。そして、コウスケのときと同じ、棺桶の上に開いた空気穴を通じて佐伯は少女と話した。しかし、少女は自分の状況に対して怖くて怯えている態度を表していない、佐伯は心の強い少女のことに對してとても不愉快という気持ちを感じた。少女を誘拐した翌日に、佐伯は不愉快の気持ちを気分転換で朝ごはんを食べるために外出準備している時、自分の警察手帳をいなくなったことに気づいた。佐伯の警察手帳は足に怪我をした少女は佐伯が気づいていないときにとられてポケットに入れた。そして警察手帳は少女と一緒に埋められた。佐伯は何も知らなくて、

自分の正体を世間にばらすかもしれない警察手帳をなくしたことで、昨夜少女を誘拐した場所に落とした可能性があると考えて探しに行った。しかし、佐伯は警察手帳を見つけていない、そして僕と出会った。少女は森野夜ではない、少女はただ森野夜の家近くに住んでいる。そして生徒手帳を落とした森野夜に届けに行く彼女のクラスメートである。しかし生徒手帳を届けに行く途中で佐伯に誘拐されて地面に埋められた。佐伯は少女は森野夜ではないということを知らない、少女のクラスメートであり、彼女を一応探しに来た僕に声をかけられて話をしている時に、佐伯が少女の外見を間違っていることは僕が気づいた。そして佐伯は僕に目をつけられた。佐伯は僕に自分がやっていることを気づかれたかもしれないということを見ると、彼を殺すために体調を崩したという理由で家まで送ってもらった。しかし、結局佐伯は僕を殺すことをしなかった。逆に僕は佐伯の前で本物の森野夜を呼び出した。本物の森野夜を見た佐伯は動揺した。そして夜になると、佐伯は呼んでも返事のない少女を掘り返すことにした。しかし、棺桶を開けると、佐伯は見たのはすでに自殺した少女の死体であり、そして自分が地面に埋めた少女は森野夜ではないということである。ショックを受けた佐伯のところに僕は少女の彼氏を連れて来た。少女の彼氏は死体を抱いて泣いた。そして僕は佐伯の代わりに少女のポケットの中から警察手帳を見つけた。しばらくの間に佐伯はただ静かに泣いていた。そして、すべて自首しようと決断した。しかし佐伯は泣いている間に、僕は掘り返した少女を埋め直した。そして今度は少女だけではない、少女の彼も少女と一緒に生き埋めた。自首しようと決断をした佐伯の話聞き、僕は別に自首してもいいが、半年あるいは一月でもいい、今自首しないで欲しいといった。また、もし自首したら自分のことを話をしないで欲しいということをお願いした後、佐伯の家を出た。どうして僕は今自首しないでほしいと言ったのかをわからない佐伯は、縁側の前の庭の地中から、静かに泣いて少女の名前を呼び続けた声を聞こえた。

「土」のストーリーは上述のようになる。そして、物語のプロットはコウスケという男の子は父親が大切にしていた骨董品を触って壊してしまったので、怒られるのを怖くて仲がよい隣人の佐伯のところに助けを求めたことによって、これはいいチャンスだと思っている佐伯にコウスケは騙されて縁側の前の地面に生き埋められたというところから始まる。そして、佐伯は棺桶の上に空いた二つの空気穴へ通した竹筒の先端にゴムホースとつながって水を棺桶の中に入れることによって、狭い空間に

閉じ込められてだんだん怖くなって泣き出したコウスケを溺死して殺した。物語の始まりは佐伯はコウスケを殺す場面のほかに、コウスケと彼の家族と仲がよくなったことと、佐伯自身のことと何時から人を埋めたいのかということ語られている。そして、佐伯は子供の頃からずっと想像してあった。決してやってはいけないことを実行したことに対して、怯えて3年間コウスケを埋めた縁側の前の庭に近寄らないことにしたが、自分の暗い妄想は猛獣のように心の中に照らしていない部分に潜んでいて、気づいたら佐伯はまだ次の地中に埋めたい人を探すようになった。そしてある日に車で職場から家に帰る途中で佐伯はクラスメートが落とした生徒手帳を届けに行く少女を次の自分の庭に生き埋める人として選んだ。そして続いてストーリーとほぼ同じに物語を進んでいく。佐伯は少女をコウスケの隣に生き埋めをした。そして心が強い少女の話で佐伯は不愉快の気持ちを感じて、気分転換として何かを食べようとするのを考えているとき、自分の罪を世間にばらす危険のある警察手帳をなくなったことを気づき、少女を誘拐した場所に戻って探そうとするとき、僕と出会った。そして口封じするために僕を殺そうとして自分の家に招いたんだが、結局殺すことをしなかった佐伯は、僕の嘘に騙されて確認するために少女を閉じ込めた棺桶を掘り返した。そして、普段は周りの人々に信頼されている佐伯が犯した誰にも気づいていない犯罪は僕によって暴かされた。

「土」の物語のストーリーとプロットはほぼ同じように進んで行く。佐伯はどうして犯罪を犯したのか、そしてどのように犯罪を犯しているのかということ僕が事件に介入する前に語られていた。また、物語の謎のトリックとして、少女は森野夜ではないことと佐伯の職業は警察だということ物語の最後に語られていた。少女は森野夜ではないということ僕が事件の真相を突き止めた証拠として語られた。そして佐伯の職業は警察ということについては、物語は佐伯を視点人物としての三人称で語られ、物語の中に佐伯はどうして自分は人を埋めたいような思想があるのかということに悩んで、そして佐伯は犯罪を犯した自分と犯罪を認めたくない自分の間に揺らいでいることを語られた。そして佐伯の犯罪の真相は僕に突き止められてから、少女が着ている制服のポケットの中から佐伯の警察手帳を見つけたということ語られた。つまり、警察という職業を勤めている佐伯は、法律を守ることと犯罪や罪を犯してはいけないということを教えられていたはずなのに、正しくないことをやりたい自分がいた。物語の最初に語られたコウスケのように、日ごろ

に骨董品を触ってはいけないといわれたのに、触りたいという自分に負けて骨董品を触って壊してしまった。そして、日ごろに決してやってはいけないといわれたのにやってしまったことに怯えている佐伯の前に、彼を蔑みなどしない、やってもいいと考えている探偵役の僕と出会ったことを、「土」という物語で語られているといえる。

『GOTH 僕の章』に収録された最後の短篇である「声」の犯罪事件は北沢博子という被害者の家族である北沢夏海という人物の一人称で語られている。北沢博子と北沢夏海は2歳離れた、外見はよく似ている姉妹であり、普通の家庭で育てられた。姉である北沢博子の性格は明るい人である。妹である北沢夏海は北沢博子と違って静かな人であり、歴史小説を読むのは趣味である。そして、性格が正反対の二人は仲のいい姉妹であった。しかし、ある日から恋人ができた北沢博子は妹に対して不機嫌そうな態度で会話をするようになった。北沢夏海はどうして姉に嫌われたのかということがわからない、そして姉といると北沢夏海はいつも不安な気持ちを抱いていた。しかし、北沢博子を不機嫌な気持ちになった原因は妹である北沢夏海にあるのではない、赤木という彼女の恋人にあるのである。北沢博子は赤木と知り合ったのは、ある日赤木は街中で北沢博子に声をかけられたからである。そして二人が恋人関係になるきっかけになった。しかし、最初に赤木は気になったのは北沢博子ではなく、北沢夏海であった。赤木はよく街中で北沢夏海の姿を見た、そして気になってあるときに声をかけようとしたが、間違えて外見がよく似ている姉の北沢博子に声をかけた。自分の恋人が最初に好きになった人は自分の妹である北沢夏海であることを知った北沢博子は、例え赤木は今選んでいたのは自分だとしても不安の気持ちはおさまることができなかった。そして、北沢博子は不機嫌そうな顔で八つ当たりのような言葉を北沢夏海に向けた。赤木に対して不安の気持ちを抱いた北沢博子はある日に赤木と喧嘩をして外に飛び出した。そして、一人で悲しんでいる北沢博子は僕と同じ高校の学生である犯人と遭遇した。犯人は北沢博子の八重歯を気に入り、彼女を廃墟になった病院で体をバラバラにされて無惨に殺した後、北沢博子の歯を集めて樹脂で固めて保存した。それから、北沢博子の遺体は廃墟の病院に遊びに行った3人の小学生に発見された。北沢博子の遺体の損傷は身元を判別するのは困難のように激しく、遺体の発見した人である3人の小学生はカウンセリングを受けていた。そして、被害者のバックの中にあるもので身元を分かった警察からの連絡を受け、北沢夏海と両親は北沢博子の遺体を安置された病院に駆けつ

けた。そして両親だけ彼女の遺体を安置されていた部屋に通した。北沢夏海は外で両親を出るのを待っていたが、部屋中のあちこちに散らばった遺体を集められた娘の遺体の状態を見た両親はまるで表情をなくしてしまったようにひどくショックを受けた。北沢博子の葬式の時、僕は参加しに行った。ニュースで事件のことを知った僕は北沢博子の葬式に参加することにしたが、僕と北沢夏海は高校が違ったけど、同じ中学出身の先輩と後輩であり、そして同じバスケット部の部員でもあった。僕の名前は神山樹という、そして北沢夏海から事件に関する情報を聞きだすために葬式の時彼女を近付いた。しかし僕の目的を知らない北沢夏海は僕に向かって生前にあった姉との不仲などのことを泣きながら話した。それから7週間後、犯人は新たな行動を始めた。今回の殺害する候補者は二人がいる。一人は北沢博子の妹である北沢夏海である。そしてもう一人は同じ学校の同級生である森野夜である。犯人はどちらに選ぶのを考えるためにそれぞれに接触するようにした。森野夜はある日、市の図書館で北沢博子に関する新聞記事を切り抜いて集めているとき、犯人は森野夜に新聞やネットで公開されていない北沢博子の殺害現場の写真をあげた。それから犯人は時々森野夜に近付いて北沢博子に関するどこにも公開されていない情報を提供する。しかし、森野夜は自分に情報を提供する人は犯人だということを気づいていなかった。そして、森野夜は犯人からもらった写真を僕に見せたことによって、僕は森野夜に提供する人は犯人ではないかということ推測して行動した。一方、犯人は北沢夏海と接触することについて、北沢夏海は高校3年生で、進学すると決めたので本屋に参考書を買に行った。そして、犯人は彼女の前に現れた。犯人は自分の指紋を残さないように注意をして北沢夏海に姉の遺言を録音したテープを渡してから去って行った。北沢博子が死んでから雰囲気が一変した家に北沢夏海は帰った後、すぐに自分の部屋に行ってテープの内容を聞いた。遺言の内容は北沢夏海宛のものであり、全部の内容三つのテープに分けられて録音された。北沢夏海はひとつしかもらっていない。内容の続きを聞きたくて彼女は犯人が通っている学校に彼を探しに行った。僕は高校制服を着て北沢博子の葬式に参加しに行ったので、そして犯人は僕と同じ制服を着ていることで、彼はどこの学校の学生なのかということわかることができた。そして翌日に、北沢夏海は学校を休んで、放課後の時間に犯人が通っている学校に行き待ち伏せをし、彼は校門から出るのを待つことにした。しかし、犯人の先に僕は学校から出てきた。そして北沢夏海の姿を見かけて近付いてきた。そし

てしばらくの間犯人は森野夜と一緒に学校から出てきたが、僕と森野夜がいるので北沢夏海は犯人に声をかけなかった。そして僕と一緒にファミリーレストランに行って世間話をした。それから僕は先に家に帰り、レストランで北沢夏海は独りになったとき、犯人を彼女の目の前に現れた。北沢夏海を恐る恐る気持ちで彼に質問した。犯人はどうして北沢博子を殺したのかということの説明した後、2本目のテープを渡してから去って行った。今回もらったテープの内容は北沢博子の遺言のほかに、犯人からの伝言もあった。2日後に姉の死んだ場所に一人できてくださいという内容である。犯人は姉を失った妹である北沢夏海のことを気になって次の殺す人は彼女に選んだのである。そして、2日後に姉の最後の遺言の内容を求めて犯人の言うようにしたがった。一方、事件のことを調べている僕は、北沢夏海は犯人との約束の日の放課後に、彼は北沢夏海が家を留守している間に勝手に侵入して発見した二つのテープを持ち出した。僕の行動を知らなかった北沢夏海は家に帰って約束の時間になると家を出て北沢博子が死んだ場所、廃墟になった病院に向かった。そして、来る前に心の中で友達や家族と別れ話をした北沢夏海は、犯人の殺意を感じながら姉の最後の遺言の内容を聞いた。しかし、2本目のテープの内容にある犯人の伝言を聞いた僕は駆けつけて犯人の犯行を邪魔した。犯人は先に僕を始末しようとしたが、逆に僕に殺されて死体を病院の裏側にある叢の中に埋められた。北沢夏海は自分の姉の遺言に集中して聞いているので、横で僕と犯人の乱闘気づいていなかった。翌日の放課後に、北沢夏海は僕を探しに彼の学校に行った。そして昨夜、自分が姉の遺言を聞いているとき、何かあったのかということ僕に聞いた。僕は自分がやったことを少し嘘をついて大体の事情を話した。そして、事件に関わっていたのに何も気づいていない森野夜は、北沢夏海は最後に姉と和解したということに対してうらやましいと思っていた。

「声」は僕と北沢夏海の一人称で語られている。物語のプロローグとエピローグは僕の一人称で語られ、本文は被害者の家族である北沢夏海の一人称で語られている。そして、北沢博子の事件から7週間後に犯人から北沢博子の殺害写真をももらった森野夜はどこにも公開されていない写真を僕に見せたところから物語が始まる。本文に入る前、プロローグで僕は人間には殺す人間と殺される人間がいるという考えを述べた。そして、『GOTH 夜の章』に収録する3篇の短篇である「暗黒系」と「犬」と「記憶」と、『GOTH 僕の章』に収録する「リストカット事件」と「土」の犯罪や罪のことについて考えている人々のように、僕は

「人を殺す人間が、確かに存在している。どんな理由もなく、殺したくなるのだ。成長する過程でそうなるのか、生まれつきそうなのかはわからない。問題は、その性質を隠して、それらの人々は、普通の人間として生活しているということだ。この世界にまぎれこんで、見た目には普通の人間の人と何らか変わらない⁷³」と語っている。そして、犯罪者や犯罪事件を観察するのは趣味である僕は自分も殺す側の人間であると述べていた。そして、「声」の犯人は僕の同級生であり、いつも暗黒なことを考えているが、他人の前に問題ない人のように演じているので、自分の家族にも普通の子だと思わせている。つまり犯人は僕との共通点が多い人物である。そして、「暗黒系」で森野夜は殺された被害者の家族は今頃どうなっているのかと語っていたことによって、「声」の事件についてのことは北沢夏海という被害者の家族の視点から語られていた。殺される側の人間は社会の中に潜んで殺すということを人の本質だという人間に遭遇したらどうなるのか、そして罪を犯したのはあるものに対して執着があっただけで、ただ人間の社会には認められることができないから、僕のような人間は自分を守るために隠す必要がある。そして、殺さずに入られなくなるとき、社会的な生活から離れて思うままに行動するというのを「声」という短篇で語られているといえる。

第6節 『GOTH 僕の章』3篇の犯罪と人物

「リストカット事件」で、僕はマスコミをにぎわせた老若男女を問わず手を切り落として持ち去るというリストカット事件の犯人が学校の化学教師である篠原だと確信できたのは、彼の家に侵入して冷蔵庫の中にいままで集めてきた無数の手を発見したからである。僕は化学準備室のゴミ箱から手のない人形を見つけて以来、篠原はリストカット事件の犯人なのではないかということ推測した。しかし、ただ篠原は学校の化学教師としてよく使用する化学準備室のゴミ箱から手のない人形を発見しただけで、篠原はリストカット事件の犯人であることを考えるのは短絡的な考えだと、僕自身も思っているが、普段リストカット事件に関するニュースや新聞を集めて事件を調べている僕は学校の間試験より毎日リストカット事件のことを考えるようになった。そして、篠原を利用して森野のリストカットの傷跡のある手首を手に入るという計画を実行すると同時に、僕は篠原はリストカット事件の犯人なのかどうかを確か

⁷³乙一(2002:132)『GOTH 僕の章』。

めるということをもう一つの目的として、篠原の家に行くことにした。

僕は当時に行なわれた数々の事件の中では特に気に入っているものはリストカット事件なのである。犯人が手に対するおぞましい執着心を考えると僕は興味を引かれる⁷⁴と同時に、リストカット事件の犯人は自分と同種の間人だと思っている。リストカット事件の犯人である篠原は子供の頃から手が好きであり、そして手が人間の本質だと思っている。篠原は手は手相術という手のひらの筋にあらわれた形相を観察することにより、その人の性格や運勢を占うものである。すなわち手はその人間の過去と未来を映す鏡なのだ⁷⁵と思い、また手は指紋という個人を特定できる部分がある。そして、手は顔や口と違って手は揺るぎがたい真実が含まれていると思っている。つまり、篠原は手が嘘をつかない、真実のままで自分と向き合っていることによって、手は人間の本質だと思っているのであろう。そして、切り落とした手をなぞった時、篠原はその感触は母や学校の先生からの言葉よりやさしくて語られているように感じ取るのは、探りあうことはする必要はない、手からやさしい言葉を語りかけられてくるといのは自分を傷つけない、聞きたい言葉を語りかけてくるといことであらう。しかし、篠原は世界は頭や口の中身のない言葉で支配されているように気がしている。篠原は中身のない言葉が世界を支配していると思っているのは、手に対するおぞましい執着心を持っている自分は他人に受け入れられないと承知していることによって、隠さなければならないと思っているので世界は中身の無い言葉だと思っているのであらう。つまり、篠原は思っていることを隠すために表向きの言葉を作らなければならないことによって世界はそういうものだと考えているといえる。また、篠原は最初に人間の手を切り落とすようになったとき、手とそれ以外の部分と切り分ける瞬間、開放感が体に駆け巡る。それは、世界を支配する歪んだ価値観から手を解き放つという行為が我ながら英雄的だからだらう⁷⁶と篠原は思っている。つまり、真実しか含まれていない手を頭や口が支配した中身のない世界から切断することによって、篠原は自分がやっているのは救済のようなことだと思っている。要するに、篠原は罪の意識のない犯罪者であり、自己中心で物事を考えている人物である。そして、異常な犯罪者である篠原が犯した事件に対して僕は興味を引かれた。

⁷⁴乙一(2002:21)『GOTH 僕の章』。

⁷⁵乙一(2002:9)『GOTH 僕の章』。

⁷⁶乙一(2002:11)『GOTH 僕の章』。

僕は幼稚園のとき、人形の顔をマジックで黒く塗りつぶして四肢を切断しなければならないという強迫観念のもとにそれを実行し、周囲のものを心配がらせるといったことがある。当時、母親と幼稚園の先生が僕をちらちらと見て不安そうにしていた⁷⁷ということがあった。しかし、周りの人間が自分に対する不安そうな反応を気づいた以来、僕は世間で好かれるような価値観を知り、そしてそれを覚えることによって自分は問題のない人間という嘘を上手くついて生活することができるようになった。僕は篠原と同じ、世間の人に受け入れられない自分がいる。篠原は人を手を切り落とすということによって世間の人々に犯人扱いされて憎まれたことに対し、篠原はとても不愉快である。他人の価値観を自分の押し付けないでほしいと篠原は思っている。つまり、篠原は自分の考えが世間の人々に受け入れられないので生活するためには嘘をつかなければならない、さらに自分のしたことは人の社会には犯罪だといわれたことによって、篠原は自分のことは否定された気持ちになる。しかし、僕は篠原のように自分の考えは世間の人々に受け入れられないと気づいたが、篠原が違って自分の考えは人の社会にとって犯罪というものだとわかっている。そして、世間の人々に気づかれないように嘘をついて生活していく。しかし、僕は森野の前だけは嘘をついていない。僕は森野と一緒にいるときに「みんなにひた隠しにしていた僕の心の無表情さや非人間的な部分を、森野は心地よい無関心さで許したということだった⁷⁸」と語らえた。僕はたとえ自分の家族でも他人の前に演技をして接している。そして担任から自分についてのことを詮索されたくもないので、僕の誰ともつなぎたくない気持ちと森野の詮索しない無関心によって、お互いに話し相手でありながら友人と呼べない冷たい関係である。そして、僕は事件を調べるのは他人に興味があったというより、自分と近い存在だから興味を引かれたといえる。僕は篠原の家の冷蔵庫に保存されている手を見つけたとき、手を撫でることによって篠原の心を一端を垣間見た気がした。そして、篠原のいつも台所で一人で手を撫でて孤独を癒している姿を想像し、犯罪者としての篠原と会話したこともない僕は篠原は手を求めている異常な観念を理解することができたと語られていた。そしてリストカット事件の真相を突き止めたのである。しかし、例え僕は篠原のことを理解して真相を知ったとしても、事件を解決する気はなかった。そして篠原を止めるなど考えていない僕は、森野の手首を

⁷⁷乙一(2002:14)『GOTH 僕の章』。

⁷⁸乙一(2002:42-43)『GOTH 僕の章』。

手に入るために篠原を利用した。僕は犯罪事件に興味を惹きつけられ、時にコレクションを集めるように事件に関するものを収集する。犯人から勝手に取ったものは本来警察に渡すべきだと僕は常に知っているが、僕はしなかった。つまり、罪の意識のない篠原と較べて、僕は犯罪という罪について知り、それでも良心はぜんぜん痛めないまま事件を解決する気はない、犯罪の証拠になるものを勝手に取り去り、そして他人の手まで切り落とすような犯罪を躊躇なく計画する人物である。また、僕は時には犯罪や死に関するものを鑑賞するような目で見ている。篠原を利用して森野の手首を手に入りたいというのは、一度も日光に当たったことのない白い肌をしている、自殺しようとするということによってリストカットの傷跡を残っていた手首が美しいと思っているので、切り落とす手に入りたいのである。そして、森野の手首を切り落とされていなかったことによかったと思っているのは、美しいリストカットの傷跡のある手首は篠原に壊される可能性があるのである。要するに、僕は自分がしたことは犯罪だと知っていても、世間に暴かれなければ別に問題はないと思っている人物である。

「土」の佐伯という犯人は僕が住んでいる町で生まれ育った人であり、そして成人にしてから自分が子供から住んでいた町で警察という職業を勤めている。日ごろに罪を犯した犯罪者を裁け、法律の守るという環境の中に正しく過ごしてきた。また、佐伯は職場や周りの人から信頼されている。しかし、このような佐伯は心の中に人を地中に埋めたいという異常な妄想がある。

「土」の中に佐伯は最初に埋めたいと考えている人は自分の祖母だということを語られている。佐伯の両親は共働きなので、子供の頃からよく一緒にいてくれるのは祖母であった。そして、佐伯が落ち込むたびに、鉢植えに如雨露を使って丁寧に水をかける佐伯に祖母はやさしい子だねとってくれる言葉を思い出すと、祖母の気持ちを裏切らないように正しく生きようと決めた。そして、佐伯は「祖母が微笑んでいるのを見る瞬間、世界が明るく照らされているような、晴れ晴れとした気分になった⁷⁹」と語られていた。つまり、佐伯にとっては祖母は心の支えだといえる。そして、自分にとって心の支えである祖母を箱に閉じ込めて地面に埋めることを考えている光も照らされていない暗い部分が佐伯の中に存在している。しかし、暗い妄想を考えていることにおびえて佐伯はた

⁷⁹乙一(2002:52)『GOTH 僕の章』。

だかぶりを振ってそんな自分から目を逸らし、本当に考えているままに祖母を地中に埋めるということを実行しなかった。それから、佐伯は両親と祖母と触れ合うことによって、自分の社会的立場を振り返られることができたが、交通事故で佐伯は家族を失って独りになり、毎日職場を出て仕事をし、そして家に帰って一人で食事をする日々を送ってきた。そんな日が続けていく中に、佐伯は人を埋めたいという考えでもいけない妄想を想像するようになった。暗い妄想を抑えるために佐伯は庭の造園に熱がこもった。しかし、家族がまだ傍にいますときと違って、佐伯は仲がよくて幼稚園に入ったばかりのコウスケという男の子を自分が考えているままに縁側の前の庭で生き埋めにして、被害者のいる土中の棺桶の中に水を入れて溺死させて殺した。コウスケが危うく車にぶつかれそうになったことがあった。佐伯はコウスケが何もなかったことに対して安堵した。そして、自分に生き埋められたコウスケのことがとても可哀想だと佐伯は思っている。しかし、佐伯は手が止めていなかった。佐伯は確かにコウスケへ愛情を抱いていたはずであると語られている。つまり、佐伯にとっては、コウスケへ愛情を抱いていると同時に、彼を埋めたいという妄想も生み出したであろう。微笑みのひとつで自分は晴れ晴れの気持ちになれる祖母を箱に閉じ込めて地中に生き埋めたいということと同じ、佐伯は愛する人を埋めたいという衝動がある人物であろう。たとえば自分が行っていることを正しくない、良心を咎めていても、佐伯は愛する人を埋めたいと思っている。

佐伯は子供の頃に、クラスメートに女みたいに馬鹿にされ、仲間外れにされたことによって傷ついたことがある。そして、成人になった佐伯は結婚など自分には無理だと思っていた。恋人、親友、家族、それらはすべて遠い場所にあり、手は届かない。職場で人と差し障りのない会話をすることはできる。しかし、深いつながりを持ってるという自信がない⁸⁰と語られていた。そして自分が抱えている悩みを打ち明ける存在などいるわけがないと思っている。周りの人と接触するときいつも近づけさせないため壁を作っている。つまり、佐伯は正しく生きようとしていても、他人を信頼することなどできない、家族といるときと違って他人と近付くことが怖がっているのであろう。佐伯は自分の祖母とコウスケを地面に埋めたいという考えに怯えているのは正しく生きようとしていくことに反しているのである。それでも佐伯は埋めたいという衝動があ

⁸⁰乙一(2002:63-64)『GOTH 僕の章』。

ったのは彼らの存在を欲しがっていると思う自分がいる。では、佐伯はどうして誘拐する前に一度も接触していなかった少女を埋めたいという考えがあったのか。佐伯はコウスケを埋めてから、自分をしたことに怯えていながら、また誰かを地中に埋めるということを常に考えている。そして気づいたら家で新たな棺桶を作り始め、外出するとき品定めのような目で人を見ている。人を品定めするという佐伯の行動によると、コウスケを埋めた後、次に埋める人は誰でもいいというわけでもない。佐伯は一人一人の中に少女を見て、そして誘拐して地中に埋めた。少女は学校でクラスメートである恋人がいる。そして、佐伯に箱の中に閉じ込められて地面に埋められた状況の中に、少女は恋人がきっと自分を一人に死なせないと信じて佐伯に宣言した。つまり、少女は恋をした少年を信頼している。そして二人は相手のことを関心を持ってお互いに信頼関係を築いていたので、例えどんなことにあってもつながっているということを知っている。壁を作って誰かと繋がることを拒んでいる佐伯にとっては、絶体絶命の状況なのに、相手のことを信じて心が強くなった少女の言葉を聞いて不愉快の気持ちになる。佐伯は少女と会話をする前に、少女のことについて「たった今、自分の埋めた人間にも名前というものがあるのだ。そのような当たり前なのに、ようやく気づく。地中に埋めた少女にも親というものがあり、名前を授け、愛情をこめて娘を育てていたのにちがいない。その愛情の塊を、自分はついさきほど生き埋めにしてしまったのである⁸¹」と語られている。つまり、少女は埋めたいと思うのは少女から感じた愛情というものが欲しがっているのであろう。クラスメートの少年と恋をして何かあっても相手を信頼する心を持つ少女を佐伯は路上で見かけたとき、愛情のある環境で育てられたように見えると考えられる。そして、少女から感じた愛情は家族からのものだと思っている。佐伯は最初に少女を地面に埋めたとき、コウスケのときと同じに少女のことを可哀相と思う。しかし、後になると、佐伯は少女に対して「地中で何もできずに埋まったままの少女を確認し、佐伯は自分の優位を感じた。子犬や子猫を目にしたときのような、胸にこみあげてくるものを覚えた⁸²」という優越感を感じた。たとえ、少女は何を信じていても、常に手のひらの上にあるものだと佐伯は思っている。そして、佐伯は僕と出会った。僕という人物は家族や周りの人の前にいつも本当の自分を隠して偽の自分を演じている。僕に対して無関心の態度

⁸¹乙一(2002:68)『GOTH 僕の章』。

⁸²乙一(2002:70)『GOTH 僕の章』。

をとっている森野夜の前だけは内面の自分を表す。そして、僕は誰かと繋がっていることなど望んでいない、そして犯罪者に関心を持っているのは相手のことを同じ妄想のある仲間だと思っているのではなく、ただ自分と近い存在である同種の間人である。しかし、かつて正しく生きようと決めた佐伯は僕のように一目で相手は自分と同じ人間だとわかっていなかった。佐伯が罪を暴かれてしまったと思って泣いている間に、僕は掘り返した穴をまた埋め直して元通りにした。しかし、愛情の塊だという少女を埋めた佐伯と違って、僕は埋めたのは恋人を心から信頼してきつと一人に死なせないと信じていた少女と愛する少女を失って悲しすぎて相手の名前を呼び続けた少年である。つまり僕は二人の間にある愛し合う愛情を地面に埋めたといえる。佐伯が妄想した家族に囲まれて暖かい環境の中に育てられた愛情より、恋愛という関係から生み出した死に直面して相手のことを求めている二人のつながりを箱の中に閉じ込めて地面に埋めた。誰かの存在が欲するのは人との繋がりが求めているといえる。しかし、佐伯は壁を作って誰かと繋がるのは怯えている。やがて暗い妄想を考えるようになり、罪を犯した。佐伯に対して探偵役の僕が行っていた行動は罪を裁けることや正義のもとに行った救済のような行動ではない、世間から見れば自分がしたことは正しくない犯罪だというのが、欲すれば躊躇なく行動して自分の考えを認めて忠実するのをもひとつの過ごし方だといえる。

『GOTH 僕の章』に収録する最後の短編である「声」の最初に、僕は人間には殺すと殺されるという二種類に分けられていると語っている。そして、「声」のプロローグとエピローグは僕の一人称で語られているが、犯罪事件は北沢夏海という殺される側の人間の視点から語られている。犯人は北沢夏海との会話の中にどうして人を殺したいのかということについて語られていた。犯人は僕と同じ見た目はただどこにもいる普通の高校2年生である。家族構成は両親と妹がいる。そして彼らにとって自分は何の問題もない、どこにでもいる子供であると思っている。また、犯人である少年の家庭は暴力やかつて人殺しである先祖などがいない、ただ一般的な家庭で育てられた。しかし、小学校のときに少年は周りの人と比べたら自分は異常だということに気づいた。そして何かの原因があったわけではない、普通の子供が想像上の友達やペットと一緒に一人遊びしているということのように、少年は子供の頃から死体を想像して楽しんで過ごしていた。しかし、少年の考えは人の社会には認めるわけがないので、普段は本当の自分を隠すために演技をしなければいけない、

家族の前に細心の注意をはらって偽りの自分で過ごして行く。そして同時に、他人も自分のように偽りの自分で過ごしているのではないかという考えをしたことで、少年は本当の存在を感じるのは死だけだと述べた。死についてのことを考える自分を隠して生きていく少年は、時折人の死を欲することによって、社会的な生活で生きている偽りの自分から離れて罪を犯す。ある日、少年は恋人と喧嘩をした北沢博子と出会った。悲しくて自動販売機の前に座り込んでいた彼女に声をかけた。そして、少年は北沢博子の八重歯を気に入ったので、本当の存在を感じるのは死だけだと述べた彼は彼女を手に入るために殺すことにした。そして、少年は北沢夏海に述べた「僕は、死というものを、「失われること」だととらえています⁸³」という言葉のように、少年がした北沢博子を殺すということは北沢夏海にとって失われることになる。

北沢博子の恋人である赤木は最初に好きになったのは妹である北沢夏海である。しかし、姉妹の外見はとても似ているので、赤木は間違えて姉である北沢博子に声をかけたが、赤木が選んでいたのは北沢博子である。それでも、自分が声をかけられて告白された原因を知った北沢博子にとっては、たとえ今赤木の好きになった人が自分だとしても、不安を抑えることができない。やがて、不機嫌な気持ちで妹に向けた。そして、どうして姉は自分のことを嫌うようになった原因は何も知らない北沢夏海は、知りたくても聞く勇気もなかったことによって、ずっと不仲の雰囲気姉妹の間に続けてきた。そして、北沢博子が殺された後に、北沢夏海は聞けばよかったという後悔をした。しかし、北沢夏海は北沢博子を殺害した少年から遺言を録音したテープをもらった。そして、テープの内容は北沢夏海が聞きたくても聞くことができなくなったはずの答えなので、例えこのまま少年に殺害されることになるわかっているとしても、北沢夏海は失われたものを取り戻すことができるとき、心の中で周りの人たちと別れをして死の領域に踏み入れることにした。しかし、結局最後は僕の介入によって北沢夏海は少年に殺害されなかった、姉である北沢博子とも和解をした。少年は北沢博子を殺害した後、つぎの被害者の候補者として第一被害者の妹である北沢夏海と同級生の森野夜をそれぞれに接触した。そして、北沢夏海を選んで殺害しようとした。少年は北沢夏海を選んだのは森野夜より姉との関係を取り戻そうとするために次々と家族や友達との関係を断たれようとした北沢夏海に気になって

⁸³乙一(2002:202)『GOTH 僕の章』。

執着を生じたからである。そして、僕は森野夜に対する執着によって、事件を調べて少年を殺害することにした。

前の短篇と同じ、僕は犯人役である少年と同種の間人である。そして、僕と少年は暴力がない、かつて人殺しである先祖などもない一般的な家庭で育てられた。そして、僕は子供の頃から社会には認められない考えをしている自分を隠すために偽りの自分を演じて社会的な生活を過ごして行き、高校生になって森野夜と出会った。僕と森野夜は一般の人には受け入れることができない犯罪者や犯罪事件などを調べる趣味がある。しかし、僕は趣味があったのは少年と同じに今まで演じる生活をしている自分は本当の存在を感じるのは死だけ。一方、森野夜は僕と違って死んだ姉との関係を取り戻ろうとするために死に関するものをずっと見てきたといえる。『GOTH 夜の章』に収録する「記憶」の中に語られるように、森野夜の本当の名前は森野夕という。そして、森野夜という名前は死んだ姉の名前である。つまり、森野夜は姉を演じて生活し、本当の自分として周りの人たちと接触することはできないということによって、他人との関係を断たれている状態だといえる。そんな森野夜に対して僕は執着を生じた。そして、北沢博子を殺害した少年は森野夜を狙っていることを知ったとき、失われないうために僕は自分と同じに殺す側の間人であり、理解し合える少年を殺した。

僕は事件の真相を調べる探偵役を担当している。そして、少年は罪を犯した犯人役である。そして、僕と少年は社会には罪や犯罪などの事を常に考えている受け入れられない人物である。そして一般人と違って生活するためには偽りの自分を演じなければいけない、そして何かを欲したら、あるいは失わないためには僕と少年のような人間が選んだ手段は殺すということである。一般人から見るとそれは犯罪であり、犯してはいけないことである。しかし、僕と少年にとっては、罪を犯すということはただ自分の考えを忠実に欲を満たすための手段である。一般人のように彼らは罪悪感や良心など感じられない人物として描写されている。

第7節 『GOTH 僕の章』3篇の陥穽と叙述

『GOTH 僕の章』に収録する「リストカット事件」の語り手は僕が住んでいる町で老若男女を問わず手を切り落として持ち去るマスコミを賑わせた「リストカット事件」と呼ばれていた事件の犯人であり、僕が通っている高校で化学教師を務めている篠原を視点人物としての三人称と主人公である僕の一人称で交互に物語を語られている。そして、「リス

トカット事件」の中に、僕は森野のリストカットの傷跡を残っていた美しい手首を手に入るため、リストカット事件の犯人である篠原が手に対する執着を利用する計画を実行することによる叙述トリックで読者をミスリードしている。

犯罪事件の犯人に犯行の機会を与えて罍を仕掛けるというおとり調査を物語に用いるときには、探偵役の人物は事件の真相を見えていても、解決するには証拠が足りないとか、犯人を現行犯逮捕のように犯罪を犯した犯罪者が罪を認めざるを得ない状況に陥られ、法律に裁かれるために、犯人役の人物に罍を仕掛けて逃げられないように確実な証拠をつかむために物語に仕込まれているのである。つまり、探偵役の人物は犯人に罍を仕掛け、誘導することを計画するのは事件を解決するための手段であった。しかし、探偵役を担当する僕は、篠原がリストカット事件という犯罪を犯した真相を知ったとしても、事件を解決するなど考えていなかった。僕は犯人役である篠原に犯行の機会を与えてリストカットの傷跡のある森野の手首を手に入るためにおとり調査を手段として用いた。

僕は学校で知った篠原と森野との間の情報を用いて計画を実行した。森野はいつも昼休みの時間に誰もいない化学講義室で一人で静かに本を読んでいた。そして森野の習慣は化学教師であり化学準備室で作業をする篠原は当然知っている。また、篠原は森野のように染めていない黒くて長い髪の毛は最近では珍しいと思っている。僕は化学準備室の片付けを手伝っている時、篠原から聞いた。そして、ある日学校の廊下で篠原は森野に声をかけられ、当時に森野が読んでいる本は自分も持っている、そして続編もあるという話をしている場面を僕は見ていた。そして、僕は木曜日に学校の先生たちは職員室で会議をする時間を利用し、篠原の家の裏手にある庭に面した大きな窓を叩き割ってこっそり侵入した。そして、自分がここに来た形跡を何一つ残さないように注意し、台所にある冷蔵庫の中に発見した篠原がいままで集めてきた無数の手を、人間や動物や人形などの手をひとつ残さないようにすべて用意しておいた袋の中へ入れた。そして、化学準備室の片づけを手伝う時に知った篠原の几帳面な性格のことを利用し、二階の部屋にあるパソコンのキーボードの上に自分の妹から採取した森野と同じに染めていない黒くて長い髪の毛を置いた。そして、本棚の森野が読んでいる本の続編を少し位置をずらした。篠原に手を盗んだのは森野だと思わせる罍を仕掛けて整えた後、僕は家に帰って篠原の家から勝手に持ち出した無数の手を自分の家の庭に埋めた。そして、翌日に昼休みの時間に森野と篠原が来る前に、先に

化学講義室に駆けつけて篠原が森野の手首を切り落とすところを確認するために教壇の裏に身を隠した。しかし、不測の状況が起こって最後は僕の思い通りになれなかった。

僕は篠原の家に罌を仕掛けるところを、読者をミスリードするために僕はどのように罌を仕掛けているのかを語られていなかった。僕が篠原の家の二階に行く時、「二階へ行くと寝室があり、デスクトップのパソコンがあった。棚に本が並んでいる。大きさもそろえられ、定則で測ったように背表紙が連なっていた。埃なども見当たらない⁸⁴」という部屋の状況と几帳面に整理されているのを語られている。そして寝室を出て二階にあるほかの部屋も目を通した。ここでの僕の行動はリストカット事件の犯人である確実な証拠を見つけるためであると語られている。罌を仕掛けているのを語られていない。そして、交互にして篠原を視点人物としての三人称に替わると、「キーボードの隙間にある埃が気になった。かたわらにいつも置いている圧縮空気のスプレーに手を伸ばしかける。そこで動きを止めた。自分の目が、キーボードの上であるものを発見した。間違いない。それは犯人の落としていったものだった。それ以外には考えられない。小さなもので、見落としてしまうところだった。自分が気づいたのも奇跡に近いと篠原は思う⁸⁵」と篠原が手を盗んだ泥棒は誰なのかわかったということだけ語られていた。しかし、何を見つけたのかを語られていなかった。そして翌日に篠原は肉きりの包丁を鞆に潜ませて学校に行った。篠原を視点人物としての三人称と僕の一人称の語り手で、僕は罌を仕掛けるために何をしたのかということ語らないことによって、僕が森野と篠原の先に化学講義室の教壇の裏に身を隠している時、自分で気づいていないところで何かミスをしているかもしれないという考えのもとに生み出した緊張感で物語のサスペンスを作った。しかし実際に篠原は思っている手を盗んだ犯人は僕が計画した通りに森野であった。そして、寝室に仕掛けた髪の毛と本のほかに、化学準備室のゴミ箱で発見した切り落とされた人形の手はほかの手と一緒に冷蔵庫に置いていた。人形の手は五本の指の造型がない、切り落とされたらただの少しの綿を包む半球の布のように見える。それは手だとわかることができるのは化学準備室のゴミ箱に捨てた手のない人形を発見した人しかいないと篠原は考えている。そしてその人は森野だと思う。化学準備室の片づけを手伝ってくれた僕はその時間はないと篠原は考えた。しか

⁸⁴乙一(2002:25)『GOTH 僕の章』。

⁸⁵乙一(2002:32)『GOTH 僕の章』。

し、僕が当時に中間試験の作成メモを探すために、化学準備室のゴミ箱を他の教室のゴミ箱とすり替え、片付けの作業を終わった後、ゆっくりあさる時間があったことを篠原は知らなかった。僕は人形の手まで盗んだのは罠を仕掛けるためであった。そして、人形の手について気づくほど、篠原が頭がいい人間だとよかったと僕は思っている。つまり、僕が計画した通りに、篠原は完全に罠に陥って泥棒は森野だと思って誘導された。要するに、もし僕は森野の反撃まで予測していたら、森野の手首は篠原に切り落とされ、そして僕は再び篠原の家に侵入して手首を盗むという計画は順調に進んで行くかもしれないであろう。

篠原の行動は僕の予想通りに動いている。僕は一度もリストカット事件の犯人としての篠原と会話したことはない、しかし僕は篠原の家の冷蔵庫に保存されている手をなぞった時、篠原のことを垣間見ることが出来たと語られている。また、僕は「おそらく普通の人間には理解できないだろうし、先生も自分以外に理解者の存在など信じないだろう。それでも僕は、篠原先生がだれもいない台所で一人、手を撫でて孤独を癒している様が容易に思い浮かぶのだ⁸⁶」と語られている。要するに、篠原がリストカット事件の真相を突き止められるという探偵役としての僕は、犯人のことを理解できるのだといえる。しかし、犯人である篠原のことを理解していても、彼を止めるなど考えていない。さらに、篠原のことを理解した僕は篠原を利用し、事件を解決するという目的のために用いるはずのおとり調査は、自分の犯行のために僕は実行した。探偵役はずの僕は、犯人のことを理解してさらに利用したということによると、僕は一線を越えた人物だと考えられる。

「土」は犯人役である佐伯を視点人物とした三人称で語られている。そして、物語の最初から佐伯がどのように犯罪を犯したのか、またどうして犯罪を犯すようになったのかということと人間関係について語られた。そしてどのように少女を誘拐して閉じ込めて地面に埋めたのかということについても詳細に語られた。「土」の中に佐伯が犯した犯罪は二件があり、そして二件の犯罪は計画的な犯罪とはいえない。第一犯罪であるコウスケの件について、「昨日の夕方、コウスケがうちに来て、隠れさせてほしいと言ったとき、佐伯はすぐに彼を家の中に通した。道に顔を突き出し、誰にもその様子を見られていなかったか確認して玄関を閉めた。「コウくんは、お兄ちゃんのうちにくることを、本当にだれにも教え

⁸⁶乙一(2002:29)『GOTH 僕の章』。

ていないのですね？」念を押してたずねると、彼は涙を拭いながら小さな頭を縦に振った。子供の言うことを、どれだけ信じられるだろう。しかし、そのときの佐伯は、この機会を逃してはいけないと思った⁸⁷」と語られていた。そして、第二件の犯罪である少女のときのことについては、「家に近い場所までくると、車を左折させて人通りの少ない道に入る。そこで佐伯は少女を見た。彼女は道の端を歩いていた。ヘッドライトに照らさせて、後姿が浮かんだ。黒い制服を身にまとい、長い髪の毛が背中に垂れていた。少女の脇を通り過ぎ、佐伯は無意識にスピードを落とした。少女の髪が、目に焼き付いていた。体ごと吸い込まれてしまいそうな、黒色の髪の毛だった。フロントガラスの隅を見上げると、満月が夜空に浮かんでいた。雲はかかっておらず、周囲は静かに降ってくる白い月光で薄くて照らされていた。住宅地の中にある、公園のそばだった。並んでいる並木は半分以上、葉を落としている。十字路を右へ曲がってすぐのところに車を止めた。ヘッドライトを消してミラーを確認し、少女が来るのを待った。少女が十字路をまっすぐ進むか、左手に曲がるかしたら、車を発進させて帰宅しよう。明日は休暇である。ゆっくりと眠り、体を休めることにしよう。しかし、もし少女が自分のいる方へ曲がってきたら……。⁸⁸」と語られていた。佐伯はコウスケと少女を誘拐して犯行する前に、すでに彼らを閉じ込める箱を作り出したが、自分の人を箱に閉じ込めて地面に埋めたいという考えに怯えて、どのように犯行をすれば安全なのかということを佐伯は考えていなかった。佐伯はいつも気づいたらもう箱を作っている状態なのである。そして日ごろに考えだけでもいけないということを自分に言い聞かせ、やりたいなら今しかないという瞬間が来たら後先も考えずに犯罪を犯した。そして犯行後に、子供の頃から正しく生きようと決めて、そして警察の仕事をしている佐伯は自分の暗い妄想を抑えきれずに犯罪を犯し、後に怯えて毎日を過ごしていくということによると、佐伯が犯した二件の犯行は無計画な犯罪だといえる。そしてコウスケの件には誰にも知られないまま、コウスケは行方不明者になってだんだん人々の記憶から薄れていく。そして、一回目は誰にも気づかれない、いつものように過ごしてきた佐伯は、二回目の犯行はどこにミスをしてしまったのかということトリックとして物語に仕組まれた。

佐伯は少女を誘拐してから地面に埋めるまでの間に、自分のやっつい

⁸⁷乙一(2002:48)『GOTH 僕の章』。

⁸⁸乙一(2002:61-62)『GOTH 僕の章』。

ることを怖がっているのです。少女の顔を見ていなかった。少女の顔と名前は地面に埋めた後に彼女の鞆の中に見つけた生徒手帳で確認できた。そして、佐伯は生徒手帳にのっている情報は地面に埋められた少女のことだと疑うことなどなかった。警察手帳をなくなって自分の罪を世間に知らされるのを怖がって探し回っている佐伯に、僕は学校を無断欠席して失踪したクラスメートのことについて聞くとき、「髪が長い、細身の女子生徒ですよ」「はい、左目の下にほくろのある色白の子です」生徒手帳にあった写真を思い出しながら佐伯は答えた。しかし、このような会話をはたしていつまで続ければいいのだろうか。少年はやはり自分を疑っているのだ。まるでゆっくりと首をしめられていくような居心地の悪さを感じる⁸⁹」と語られていた。佐伯に誘拐されて失踪したクラスメートの顔は左目の下にほくろのないことを当然知っている僕は、佐伯は少女のことを森野夜だと勘違いしてしまったことをわかった。そして僕は佐伯に嘘をついて彼の前に本当の森野夜を呼び出して動揺させることによって、失踪したクラスメートの少女を見つけることができた。ずっと自分の罪から目をそむけて認めたくなかった佐伯は、「少年が森野夜という少女を電話で呼び出したのは、自分に見せて動揺させるためだったのだと気づいた。その結果、少年は庭に目星をつけて、自分を監視しておくことができたのだ。「あなたは……」佐伯は少年を見上げて口籠もる。目の前にいるこの少年は、いったい何者なのだろう。クラスメートの仇をとるため自分の前に現れたとしか思えなかった。しかし、それでいて自分に向ける彼の口調には、犯罪者に対するような蔑みや憤りを感じなかった。静かで、穏やかな声である。もしもこの少年に会わなければ、自分の罪は暴かれなかったかもしれない。なぜ自分は彼と関わってしまったのだろう⁹⁰」と語られていた。引用に語られているように、僕が佐伯の前に現れることによって、佐伯は罪を認めざるを得なかった状況になったので、自首するという決断をしたが、僕がやっていることは正義や世間の正しいことなど関係ない、佐伯の罪を世間に暴かれるつもりはなかった。

僕は「土」の中にどのようなきっかけで佐伯の犯行にかかわったのかということについて詳細に語られていなかった。『GOTH』の6篇の短篇は「土」だけは僕の一人称で物語を語られていないのである。しかし、他の5篇の短篇によると、僕と森野夜は同じの趣味でよく一緒に行動し

⁸⁹乙一(2002:93)『GOTH 僕の章』。

⁹⁰乙一(2002:112-113)『GOTH 僕の章』。

て会話をするのだが、僕と森野夜と話をしている時いつも無表情で周りの人から見ると仲がよいとは見えなかった。そして、学校でいつも一人の森野夜の落とした生徒手帳を彼女に届ける人は仲がいいクラスメートではない、住んでいる家が近いクラスメートの人に任された。また、僕は本当の自分をいつも隠して周りの人と仲がよいように振舞っている。そして、佐伯に誘拐された少女と少女の彼氏は僕のクラスメートなので、たぶん僕は少女の彼氏から連絡がつかない学校にも来ていない少女のことを知ることができ、そして「犬」の事件のときと同じ、身近に行なわれた事件なので興味があった僕は、少女は生徒手帳を届けに行くため森野夜の家に向かったことを知り、放課後に森野夜の住んでいる周辺に少女のことを調べに行ったのであろう。そして「土」は三人称の語り手で佐伯が行われた罪のことについて詳細に語られた後、罪を暴かれて自首しようとした犯人役である佐伯に対して探偵役の僕はどのような結末を与えるのを事件の真相を推理するというより際立たせていた。

僕は神山樹という名前であり、『GOTH 僕の章』に収録されている最後の短篇である「声」の中にはじめて語られた。前の5篇の短篇は僕は名前は語られていなかった。『GOTH 夜の章』に収録する「記憶」の中に僕は森野夜の子供の頃に住んでいた田舎を訪ねて行ったとき、森野夜の祖母は僕の名前を呼んだが、「**君」で表示されていた。そして、「声」の中に北沢夏海の一人称で語られているとき、そして高校の校門の前のコンビニエンスストアで犯人を待ち伏せをする北沢夏海の前に、僕が現れたとき彼女は神山樹という名前で僕を呼んだ。そして、北沢夏海とは中学時の先輩と後輩であり、同じバスケ部の部員である男子生徒。高校は違っていても北沢博子の葬式の時、神山樹は北沢夏海のそばにいて彼女の姉との不仲などの話を聞いてあげた。まるで神山樹という人物は今まで事件を調べて真相を突き止めた僕ではないように語られていた。かわりに北沢博子が無惨に殺害した犯人は今まで僕についての事で、共通点が多いことによって僕は犯人ではないのかということによって読者をミスリードしようとした。そして、僕の名前だけではない、ほかに僕は今回の事件の犯人であるということに読者をミスリードしようとする仕掛けをした。

僕の一人称で語られる「声」のプロローグで森野夜は犯人からもらった北沢博子の死体写真を僕に見せたとき、僕はすぐに状態が激しい死体は北沢博子であるとわかった。森野夜はどうして僕はそれが7週間前にあった事件の被害者であるかはわからない、そして北沢博子を殺害した

のは僕なのではないのかということをも疑った。しかし、僕は自分を疑っている森野夜に「パーマをあてたあとの顔写真も公開されているんだ。親族に無断で使用された写真だから、あまり出まわってないみたいだけど、そっちに見覚えがあっただけだよ⁹¹」という嘘をついた。しかし、写真に写っていた死体は北沢博子であることをわかったのは僕は7週間前に事件についてのことを調べるために北沢博子の葬式を出しに行った。北沢博子は赤木という恋人は最初に好きになったのは自分ではない、そして声をかけようとする人を間違えたということを知ってずっと不安な気持ちを抱えていた。そして北沢博子は妹と似た外見を嫌うようになって髪をパーマにして化粧もした。世間に公開された写真は北沢博子はまだ髪をパーマにしていない、化粧もない写真である。葬式と犯人からもらった森野夜の写真だけ違っていた。そして、僕は森野夜が見せてくれた写真は北沢博子であるとわかったのは、写真に映っていたパーマをした髪の毛は葬式の時に見た髪をパーマにした北沢博子の写真と同じだからである。そして、『声』の最初ミスリードするための仕掛けとして、僕はどうして森野夜が持っている写真にある誰なのか判別つかない死体は7週間前にあった事件の被害者である北沢博子だとわかった理由を語られていない。そして続いて、北沢夏海の一人称で語られる『声』の本文の中に、犯人の少年は北沢博子を殺害して7週間後に北沢夏海と接触して北沢博子の遺言を録音したテープを渡すとき、「これをお渡しします」少年はそう言って私に封筒を差し出した。わけもわからないまま受け取る。封筒の口は開いており、中を確認すると、透明なケースに入ったカセットテープらしいものが奥に見える。「すみませんが、今ここで中身だけ取り出して、封筒を返してください」私はそのようにした。テープを抜いて、空になった封筒を少年に渡す。彼はそれを折りたたんで、ポケットにしまった⁹²」を語られていた。『リストカット事件』の中に僕は自分の欲するもの手に入るために犯人の家に勝手に侵入するとき、僕は自分の形跡を残らないように注意をして行動するときのように、少年は自分が北沢夏海と接触してテープを渡すとき、指紋を残さないために注意をしていた。そして、翌日にファミリーレストランで北沢夏海に自分はどうして人を殺したくなるのかということについて、「人を殺す、という宿命についてのことです。僕にはそうとしか思えません。まるで、吸血鬼が人間の血を吸わなければいけないように、僕は人を殺さなけれ

⁹¹乙一(2002:133-134)『GOTH 僕の章』。

⁹²乙一(2002:150-151)『GOTH 僕の章』。

ばいけなかった。あらかじめそのような運命を定められて生まれてきたようです。両親のふるった暴力が精神に傷をつくってそうなったわけでも、祖先に人殺しがいたわけでもありません。ごく普通の家庭に育ちました。しかし、普通の子供が想像上の友達やペットと一人遊びしているとき、僕だけは想像上の死体を見つめて過ごしていました⁹³」と語られていた。そして少年は僕と同じ、家族構成は両親と妹がいる。また、自分の考えは周りの人と違うことを気づき、家族の前でも演技をしなければいけないと過ごしてきた。つまり、前の5篇短篇の中に語られていた僕についての情報を使って、「声」で僕と似た考えをして、育った環境も似ているように描写されたことによって、物語の陥穽を作り、探偵と犯罪者は紙一重の関係のように語られているといえる。そして、前の5篇の短篇での僕は犯人と同種の間人として、すぐに犯人役の人物のことを理解することができた。そして、「声」での僕は犯人と同種の間人というより、僕は探偵役を担当すると同時に犯人役でもあるというように描写されていると考えられる。



⁹³乙一(2002:175)『GOTH 僕の章』。

結論

第1節 対象二作における共通と差異

本論の第2章と第3章で、『クビキリサイクル』と『GOTH』という二作における「梗概と構造」、「犯罪と人物」、「陥穽と叙述」という三つの観点からそれぞれに分析して論じた。そこで、本節では、第2章と第3章で本論の研究対象とした二作の共通と差異についてまとめて分析する。

『クビキリサイクル』は、伊吹かなみがアトリエという密室で殺害された第1件目の事件が発生後、鴉の濡れ羽島の所有者である赤神イリアの個人的な理由で、名探偵と呼ばれる哀川潤という人物が孤島を訪れて事件を解決するまで誰も本土に戻ることを禁じられているというクロード・サークルの中で、作品の探偵役としての「ぼく」が事件を推理し、論理的に解決しようとした。

一方、『GOTH』の探偵役である「僕」は、死体を鑑賞したり、犯人のことを尊敬したりという個人的な趣味で事件を追っていた。『GOTH』での事件は異常な思想を持つ犯人による異様な殺害事件である。「記憶」という短篇を除いて他の5編の短篇で描かれた事件が起こった地域は「僕」と森野夜が住んでいる町で行なわれていた。また、その時期は「僕」が高校2年になった一年間で、最初の事件が5月末に「僕」が森野夜と言葉を交わすきっかけになった「リストカット事件」である。続いて夏休み中に起きた「暗黒系」であり、夏休みが終わった頃に「犬」があり、十月末には「土」が起き、最後に冬の頃が「声」となっている。五つの事件が起きた時期はすべて「僕」が住んでいる町の一年間であり、そうした五つの異常な事件が頻繁に起きているということになる。つまり、「梗概と構造」で二作に共通するのは、『クビキリサイクル』の鴉の濡れ羽島という孤島と同じく、『GOTH』の町が頻繁に異常な事件が起きるクロード・サークル的な異空間だという点である。

次に「梗概と構造」での二作の差異は、作中の語り手であり、探偵役として登場する『クビキリサイクル』の「ぼく」と『GOTH』の「僕」は、その異空間の中での立場が異なるという点である。『クビキリサイクル』の「ぼく」は、鴉の濡れ羽島での首切り密室事件を論理的に解決したが、犯行動機を理解しきれず、また知ろうともしていない探偵役だった。つまり、「ぼく」は本質的には傍観者であり、事件の当事者であろうとはしていないのである。それに対して、『GOTH』の「僕」は犯人の異常性を理解できる探偵役で、「僕」自身が異常犯罪の目撃や実行を期待していた。言わば虞犯性のある人物である「僕」は本質的には犯罪者であ

り、事件の当事者であろうとしており、それでいながら事件の当事者になりきれない人物なのである。

『クビキリサイクル』の「ぼく」は孤島での事件を解決したが、事件の真相を突き止めるには至らなかった。本論で述べたように、或る事件に関して探偵役が解決しなければならない謎は、犯人特定・犯行手段・犯罪動機という三つの謎である。特に犯罪動機は事件の被害者と加害者にとっての本質的な謎である。ところが、『クビキリサイクル』の「ぼく」は友人の玖渚友の力を借りて推理して解決しようとしてみたが、その理由は孤島というクローズド・サークルから開放されて予定通りに本土に戻るためである。「ぼく」は、人は一人で生きるべきだと思い、他人に無関心な態度をとっており、犯罪動機は犯人自身の問題だから推理して特定する必要はないと述べており、「ぼく」は三つの謎のうちの一つの謎、要するに本質的な謎を解くことを放棄した。事件を解決して真実を突き止めることによって秩序を守るという一般的な意味での探偵役とは異なり、「ぼく」は無責任な探偵役だと考えられる。そして、結末で「ぼく」が解けなかった動機という謎を解いたのは、「天才」である犯人を理解できる「天才」である哀川潤であり、本作の場合は本質的な意味での名探偵として彼女は最後に登場しなければならなかったのである。

一方、『GOTH』の「僕」は町での事件の真実を突き止めているが、事件を解決したのではなかった。犯人を特定しても警察に通報しようとしたわけではないし、むしろ犯人を援助し、犯行を達成させたこともあったのだから。そもそも「僕」は、森野夜以外の一般人の前では常に本性を隠し、偽の自分を演じており、異常犯罪に強く関心を抱き、以上犯罪者を尊敬し、自らの本性も隠さないという真犯性を持った異常者なのである。しかも『GOTH』の最後の短篇である「声」では、他の5篇で読者が知った「僕」の内面に基づく人物像を前提にした犯人が創造されている。つまり、『GOTH』の「僕」は（真犯的な）異常犯罪者であり、犯罪者自身を一般人より深く理解できる探偵役なのである。

さて、この二作の「犯罪と人物」における共通点について述べよう。一般的に探偵は真相を突き止めて事件を解決することによって犯人の罪を裁くという役割を持っているので、探偵役を担当する人物はヒーローだということになっているのであるが、『クビキリサイクル』の「ぼく」は無責任な探偵であり、そして、『GOTH』の「僕」は真犯的な探偵なので、二作の探偵役の人物は「アンチ・ヒーロー」だということになる。

一方、二作の「犯罪と人物」の差異については、『GOTH』の「僕」が

事件を追っているのは、自分と同じ世界にいる人間のことをもっと知りたいから真実を突き止めようとしているのであって、事件を解決するためではない。『クビキリサイクル』の「ぼく」の場合は、『GOTH』の「僕」と違って、ただ論理的に納得できるように事件を解決すればいいと考え、犯人には関心など持ってはいなかった。

「陥穽と叙述」に関しては、『クビキリサイクル』と『GOTH』は、どちらも探偵役に相当する人物の視点から述べる一人称叙述が共通点である。『クビキリサイクル』は、クローズド・サークルという孤島での密室トリック、被害者の身元を特定できないことを利用してリサイクルする死体損壊トリック、犯人と被害者が事件前に既に入れ替わっていたという入れ替わりトリック、という三つのトリックで作品の陥穽を創造した。作中に仕掛けたトリックを解くことによって、犯人特定・犯行手段・犯罪動機という三つの謎を解くことになるのであるが、「ぼく」は密室トリックと死体損壊トリックによる陥穽を見破ることができたが、入れ替わりトリックまでは想定せず、結果として本質的な謎である犯罪動機を解明できず、事件の真相を突き止めるには至らなかった。

しかし、「ぼく」は、玖渚の力を借りて事件関係者について詳しく調べている時に、孤島で「ぼく」が知った仲が悪いはずの伊吹と園山が実は島に行く前に一緒に食事をしたという事実を知るに至っていた。それにもかかわらず、「ぼく」は、入れ替わりトリックを想定していなかった。ここで重要な点は、『クビキリサイクル』はジャンルとしては「ライトノベル」の系統に属しているが、同時にメフィスト賞を受賞した「ミステリ」だという点である。作中での「ぼく」は入れ替わりの可能性を全く考えていなかったと語っており、その可能性さえ示そうとしていなかったわけだが、作者から読者に対する作中の情報としては、仲が悪いはずの伊吹と園山の会食の事実は述べられているので、犯罪動機という事件解決のための本質的な謎を突き止める情報が読者に開示されていた、ということである。つまり、「ライトノベル」であっても「ミステリ」になっているのだ、と言いたいのだ。こうした叙述方法は、「ストーリーとプロットの二重性に徹底して自覚的」で「出来事を起きた時間順に語るのではなく、語る順番を意図的に入れ替えることで、語りの効果を最大限に」して「限界まで先鋭化」したエドガー・アラン・ポウに始まったわけである⁹⁴。『クビキリサイクル』が鴉の濡れ羽島というクローズド・サ

⁹⁴ 笠井潔(2011:53)『探偵小説と叙述トリック—ミネルヴァの梟は黄昏に飛びたつか?』。

一クルの外で過去に起きた伊吹による入れ替わりの提案に園山が合意していたという事実を、少なくとも「会食」という現場でプロローグ、または、それ以前に語っていたとすれば、そもそも殺されて首を肩すれすれの位置で切断されたのが伊吹ではなく園山であり、その殺害を伊吹の介添人である逆木が援助したという、要するに共同正犯の犯罪である、という可能性は、もっと早く作中で想起され、哀川の登場を促すことはなかったかもしれない。だが、「会食」という事実が久渚の友人に拠る情報収集で「ぼく」と読者に開示されても、「ぼく」が無関心なので、その時点での作中では事件の解決に至らない。

尤も、極めて僅少の明敏な読者は、入れ替わりトリックを察知し、「ぼく」の凡庸な探偵ぶりに呆れ、早々に本を閉じてしまったかもしれないが、驚くほど数多くの凡庸な読者は、最後の哀川の推理によって本質的な謎を解かれることになる。実はこの点こそが本作の「陥穽」なのであり、すなわち叙述トリックなのである⁹⁵。

つまり、一人称叙述である以上、意図的な隠蔽もありうるわけだが、『クビキリサイクル』での情報を隠蔽してはいなかった一人称の語り手である「ぼく」は、探偵役としては無責任で些か頼りないが、物語の語り手としては信頼できる語り手であった。この信頼できる語り手の存在こそが本作の叙述トリックなのである。

ここで叙述トリックについて補足しておこう。叙述トリックの先駆者は前述したポウであり、それが『『お前が犯人だ』』での「犯人の内面を描きながら、しかも殺人の記憶や、それをめぐる思考や感情には口を閉ざし続けること」で「作者による読者への欺瞞は完璧」となって「一人称の語り手が他人の内面を覗きうるといふ、作者が選んだ『純小説的』叙述」以前の語りが、この欺瞞に大きく貢献し「結末の意外性を最大化する」ことが可能になったという⁹⁶。

この点を鑑みれば、『クビキリサイクル』の結末近くで初登場し、犯罪動機という本質的な謎を解明した「天才」探偵の述べた入れ替わりトリックの解明によって読者に生じる「結末の意外性」がようやく「ミステリ」らしい作品として本作を認めさせることとなり、さらに入れ替わりトリックを思いつかない「凡人」探偵の語り手による一人称叙述に「陥

⁹⁵ 齋藤正志先生による直話指導。

⁹⁶ 笠井潔(2011:53)『探偵小説と叙述トリック—ミネルヴァの梟は黄昏に飛びたつか?』。なお、この「結論」における笠井著書に基づく叙述トリックに関する本論文での論述は、審査委員の内田康先生(淡江大学)の御示唆に基づくものであり、それを受けた指導教員の齋藤先生による直話指導である。

弄」が仕掛けられていた、という点で「意外性は最大化」したことになるだろう。

ただし、叙述トリックは「探偵小説形式に内属する一要素」ではなく、「探偵小説空間の自足性と自律性を脅かし、マニア的読者が偏愛する謎と論理のユートピア空間に禍々しい亀裂を走らせる」とも言われ⁹⁷、前述と相前後するが、叙述トリックとは「ストーリーとプロットの二重化を極点まで推し進め」るのと「並行的に、部分的には近代小説にも散見される言い落としを意識的に技法化し、詭計的な語りにまで洗練」させた手法なのであり、また、「目的化されたディスコミュニケーション」における「積極的な欺瞞と隠蔽のため」の手段であって、「言い落としの技法化と詭計的な語りの精緻化」なのである⁹⁸。

一方、『GOTH』は6篇の短篇作品があり、現行の書籍としては、3篇ずつ『GOTH 夜の章』と『GOTH 僕の章』とに分けられている。

『GOTH 夜の章』に収録された「暗黒系」、「犬」、「記憶」という3篇では、まず「暗黒系」が「僕」の視点から一人称で、次の「犬」は犯人を焦点人物とする三人称と「僕」の一人称とが交互に、そして「記憶」は「暗黒系」と同じく「僕」の一人称で語られている。

一方、『GOTH 僕の章』に収録された「リストカット事件」、「土」、「声」という3篇では、第一に「リストカット事件」が「犬」と同じく犯人を焦点人物とした三人称と「僕」の一人称で、第二に「土」が犯人を焦点人物とする三人称だけで、第三に「声」は被害者を焦点人物とする三人称で語られている。

連作短篇小説である『GOTH』は「僕」の一人称、犯人と被害者を焦点人物とする三人称という三つの語り手で6篇の短篇が語られ、読者をミスリードするための叙述トリックを用いている。つまり、『GOTH』の語り手は『クビキリサイクル』と異なり、信頼できない語り手であり、これが二作の「陥弄と叙述」についての差異である。

⁹⁷ 笠井潔(2011:33)『探偵小説と叙述トリック—ミネルヴァの梟は黄昏に飛びたつか?』。

⁹⁸ 笠井潔(2011:37-38)『探偵小説と叙述トリック—ミネルヴァの梟は黄昏に飛びたつか?』。笠井(2011:39)では、黒岩涙香「妾の罪」、江戸川乱歩「二銭銅貨」、田山花袋「蒲団」などにも「言い落としの技法」が認められ、「一九世紀の探偵小説にさえ叙述トリックの発想が萌芽していた」とも述べている。なお、「言い落とし」のルビとして「レティサンス」と、「語り」のルビとして「ナラシオン」と、それぞれ振られているが、矢吹駆シリーズの処女作『バイバイ、エンジェル』をパリで書いたという笠井らしくフランス語を用いているに過ぎない。前者は修辞学でいう「黙説法」であり、後者は物語学で使う「語り」と同様と考えられる。以上も齋藤先生の直話。

第2節 対象二作のミステリとしての価値

本節では、本論で取り上げた『クビキリサイクル』と『GOTH』という二作のミステリとしての価値についてまとめて分析する。二作の作者である西尾維新と乙一は同じゼロ年代の作者であり、『クビキリサイクル』と『GOTH』という二作はライトノベルとして創作された。そして、二作はミステリという小説のジャンルで生じた設定を作品を構成する要素としてライトノベルとしての『クビキリサイクル』と『GOTH』という二作の中に取り入れた。

本論で述べたように、ライトノベルは、キャラクター小説とも呼ばれ、中高生を主な読者層としており、基本的に文庫本として出版されて、読みやすく、マンガ・アニメ調のイラストを用いるオタク文化での小説である。そして、「ライトノベルを、キャラクターを素早く伝える方法としてイラスト等を意識し、キャラクターを把握してもらうことに特化してきた、二十世紀～二十一世紀における小説の一手法であると定義する⁹⁹」と新城は記している。ライトノベルという小説ジャンルは物語を構成する前にキャラクター創造を優先し、キャラクターを中心に物語を構成するのである。キャラクター作りを重要視するのはライトノベルという小説の特徴である¹⁰⁰。

「「秘密・謎・不可解なもの・神秘」という意味のミステリーは、特定のジャンルにかぎらず、あらゆる作品に含まれる普遍的な要素・機能であると言える¹⁰¹」と廣野は記している。そして、「ミステリー」という要素・機能を最大限に用いられているジャンルが「ミステリ小説」や「探偵小説」や「推理小説」などと呼ばれている作品群である。また、ミステリ小説は、難解な謎を解くという面白さを主眼とする文学である。つまり、ミステリ小説というジャンルから生じたトリックや犯行手段を『クビキリサイクル』と『GOTH』二作の中に取り入れてキャラクターを中心にする物語を構成しているのである。

『クビキリサイクル』のサブテーマは「青色サヴァンと戯言遣い」で

⁹⁹ 新城カズマ(2006:203)『ライトノベル「超」入門』。

¹⁰⁰ ただし、大塚英志に拠れば、近代小説も「キャラクター」を重視していたのであり、角川書店のジュブナイル(筒井康隆『時をかける少女』など)や集英社のコバルト・シリーズ(氷室冴子ら)もまた先駆的なキャラクター小説だという(笠井潔 2006:18 『探偵小説と記号的人物(キャラ/キャラクター) —ミネルヴァの梟は黄昏に飛びたつか?』)。

¹⁰¹ 廣野由美子(2009:2)『ミステリー人間学 英国古典探偵小説を読む』。

あり、「青色サヴァン」は「ぼく」の友人である女性の玖渚友であり、「戯言遣い」は探偵役の男性の「ぼく」のことである。キャラクターの設定については、玖渚は「天才」であり、電子工学と機械工学のプロフェッショナルである。「戯言シリーズ」の世界を構築するのは「普通」、「政治力」、「財政力」、「戦闘能力」という四つの世界である。政治力の世界で権力を掌握しているのは玖渚機関という怪物のようなコミュニティである。そして、玖渚は玖渚機関の最上位である玖渚本家の直系である。本来、普通の世界で暮らしている「ぼく」にとっては、玖渚は雲の上の存在であり、一生関わることはないはずの関係である。「ぼく」と玖渚の出会いについては作中では詳細に語られていないが、「ぼく」はある日に玖渚機関に声をかけられ、玖渚と出会い、半年ほど共に過ごした。「ぼく」には妹が一人いたのだが、彼女は何らかの理由で玖渚機関に誘拐され、その後、飛行機事故で死亡した。失踪して亡くなった妹が玖渚機関と関係があることを知ってしまった「ぼく」は玖渚機関とトラブルを起こした上、本家で大切に育てられた玖渚を壊した。しかし、「ぼく」は玖渚に対する好きな気持ちのため罪悪感があり、玖渚の傍から逃げるために、玖渚の兄である直の手引きでヒューストンに渡り、天才養成課程であるERプログラムに参加することにした。しかし、「ぼく」は10年の課程を6年で中退して帰国し、玖渚本家から絶縁された玖渚と再会した。ここまでを作品の前史として設定して、『クビキリサイクル』は、「ぼく」と玖渚の再会から始まっているのである。「ぼく」にとって玖渚は掛け替えのない人だが、玖渚に対する罪悪感で彼女と向き合うことを避けている。

さて、『クビキリサイクル』の犯人と共犯者のキャラクター設定については、犯人は何でもできる「天才」女性であり、常に彼女の傍には必ず彼女のことを掛け替えのない人だと思える男性がいる。つまり、犯人と共犯者は、玖渚と「ぼく」との関係と、相似的に設定されている。「ぼく」は事件を追っている途中も玖渚とのことについて悩んでいる。

一方、『GOTH』で探偵役を担当する「僕」のキャラクター設定について、普通の家庭で育てられたが、本質的には真犯的異常者であり、趣味は死体鑑賞や殺害現場巡りで、犯罪者を偶像視している。「記憶」という短篇を除いて、『GOTH 夜の章』と『GOTH 僕の章』に収録されている他の5篇の短篇に登場する犯罪者キャラクターが起こした事件は、すべて異常な犯罪であり、犯人たちも殺人鬼と呼ばれる性質を持っている。「記憶」で語られた本物の森野夜というキャラクターについては、犯

人役ではなくて、事故の被害者として登場したが、この死んだ本物の森野夜もまた「僕」と同じく本質的には真犯的異常者だったと語られていた。「僕」は、出会った犯人の犯罪動機を論理的に推理しなくても、心から理解することができる。自分も犯人と同種の間人だと考えているので、「僕」と同じく残酷な森野夜も異常者だということになる。

そして、「暗黒系」、「犬」、「記憶」、「リストカット事件」、「土」という5篇の短篇は、「僕」が自分と同じ世界の人間と出会う作品なのだ。最後の短篇である「声」では、他の5篇から想定された「僕」の人物像を利用して、「僕」と相似的な殺人犯を創造し、他の短篇と異なる尋常な北沢夏海という被害者の視点から語られている。

「僕」は人間の暗黒面に興味があり、犯罪者と同種の間人として自らを語る。と同時に、第三者的な立場にとどまって、決して犯罪そのものとは関わらないようにするルールを遵守しているというが、「僕」は傍観しているのではなく、犯罪者を援助したり、犯罪者を殺害したりしている。つまり、本作6篇によって、もともとは犯罪と犯罪者を傍観する趣味人だった「僕」は、徐々に犯罪者の世界に近づいていき、遂に犯罪者そのものになっていったのである。その意味で『GOTH』は6篇の短篇集なのではなく、連作短篇に拠る長篇小説なのであり、「僕」というキャラクターを主人公とする成長を語る作品なのである。

第3節 ライトノベル・ミステリの可能性

『クビキリサイクル』と『GOTH』二作は第2節で述べたように、キャラクター作りを重要視するライトノベル作品として、ミステリというジャンルを要素としてキャラクター物語の中に取り入れた。

ミステリ小説というジャンルの流派については、本格派ミステリと社会派ミステリ、そして新本格派ミステリ、ユーモアミステリ、日常ミステリという五つがあることを第1章の第2節で述べた。本格派ミステリと新本格派ミステリに属する作品は主に犯罪手法やトリックの設定を重視されて難解な謎を創造するので、作品世界のリアリティが希薄な作風である。社会派ミステリに属するミステリ小説は、本格派ミステリと新本格派ミステリと異なり、社会性のある題材を用いて作品世界のリアリティを重んじた作風で事件の背景を丁寧に描いている特徴がある。また、ユーモアミステリに属するミステリ小説は、本格派ミステリと新本格派ミステリと同じく、作品世界のリアリティが希薄で難解な謎を創造するのを重んじた作風があるのだが、ユーモアミステリの作品は本格派ミス

テリと新本格派ミステリの作品と比べると登場人物の設定に関して違っている。ユーモアミステリの登場人物の設定、会話、仕草や物語の展開などの可笑しさで読者を楽しませる点を重んじた特徴がある。本格派ミステリと新本格派ミステリ、社会派ミステリ、ユーモアミステリに属するミステリ小説は殺人事件などの凶悪犯罪に基づく謎を創造されているという共通の特徴があるが、ミステリ小説のもう一つ流派である日常ミステリに属する作品は他の四つの流派と違って、凶悪犯罪がなくて、死人も出てこないミステリ小説で、日常生活の中に謎を創造されているところに日常ミステリと呼ばれている作品の特徴がある。

ミステリ小説というジャンルは謎を解いていくという面白さを主眼とする作品のことである。そして、以上、述べてきたように、ミステリ小説の謎は、凶悪犯罪や殺人事件、また、日常生活の中から創造されたのである。そして、作品世界が要求する登場人物の設定、事件やトリックなどで構成されているのである。

それでは、本論文で論じているライトノベル・ミステリに関して、取り上げた『クビキリサイクル』と『GOTH』という二作を見てみると、『クビキリサイクル』は事件を推理して解いていくと同時に、探偵役としての「ぼく」が解いていくだけでなく、「ぼく」と友人である玖渚友との関係も丁寧に語られていく。一方の『GOTH』は異常な犯罪事件を「僕」が推理して解いていくうちに、犯罪者と同種の間人だと語られている「僕」のことも語られていくといえるのである。つまり、『クビキリサイクル』と『GOTH』はキャラクター小説をミステリ的手法で構造化したのだ。ライトノベル・ミステリはキャラクターが難解な謎を解くのを作品構成のパーツ（部品）として用いた。

また、ライトノベル・ミステリの探偵役キャラクターは事件の謎を解くだけではない。『クビキリサイクル』の「ぼく」は事件の展開を経て、徐々に玖渚友と向き合うようになっていく。また、『GOTH』の「僕」は数々の犯罪者を見ることによって、だんだん一線を超えて犯罪者の世界に近付いていき、自ら殺人を犯すまでに至った。すなわち前述のように、彼らライトノベル・ミステリのキャラクターは成長していくのである。この成長を見届けることがライトノベル・ミステリを読む意味なのであり、その成長の過程こそがライトノベル・ミステリの可能性でもあるのだ。

今後の展望

本論文で述べたように、ライトノベルに属する作品で語られているの

はキャラクターの世界である。ライトノベルの作品と他ジャンルの作品との違いは、他ジャンルが作品世界の要求に従って登場人物を設定するのに対し、ライトノベルは逆に登場人物であるキャラクターを際立たせること（＝キャラ立て）を前提にして構成するのである。ミステリの他に、ファンタジーやラブコメやSFなどのジャンルからの要素もまた「キャラ立て」のために取り入れられたのである。そこで、そうした多角的な要素がどのように取り入れられているのか、ライトノベルには今後どのような変容が起きていくのか、それを追跡することが今後の展望となる。



参考文献

テキスト

- 乙一(2002)『GOTH 夜の章』角川書店。
乙一(2002)『GOTH 僕の章』角川書店。
西尾維新(2008)『クビキリサイクル 青色サヴァンと戯言遣い』講談社。

日本の参考資料（執筆者名の五十音順、誌名の五十音順）

- 東浩紀(2007)『ゲーム的リアリズムの誕生 動物化するポストモダン 2』講談社。
井上貴翔(2007)「本格ミステリからの「逸脱」 西尾維新『クビキリサイクル』論」『日本近代文学会北海道支部会報』。
大塚英志(2006)『キャラクター小説の作り方』角川書店。
乙一(2000)『夏と花火と私の死体』集英社。
笠井潔(2006)『探偵小説と記号的人物（キャラ／キャラクター）—ミネルヴァの梟は黄昏に飛びたつか?』東京創元社。
笠井潔(2011)『探偵小説と叙述トリック—ミネルヴァの梟は黄昏に飛びたつか?』東京創元社。
小森健太郎(2007)『探偵小説の論理学』南雲堂。
堺愛由美(2010)「西尾維新「戯言シリーズ」論 〈鏡の向こう側〉の存在」『筑紫語文 第19号』。
新城カズマ(2006)『ライトノベル「超」入門』ソフトバンククリエイティブ。
中田永一(2010)『百瀬、こっちを向いて』祥伝社。
廣野由美子(2009)『ミステリーの人間学—英国古典探偵小説を読む』岩波書店。
山白朝子(2011)『死者のための音楽』メディアファクトリー。
山中智省(2010)『ライトノベルよ、どこへいく 一九八〇年代からゼロ年代まで』青弓社。
吉田司雄(2004)『探偵小説と日本近代』青弓社。
『ダ・ヴィンチ 2011年4月号』(2011)メディアファクトリー。
『西尾維新クロニクル』(2006)宝島社。
『文学界 第57巻 第12号』(2003)文藝春秋。
『ユリイカ 9月臨時増刊号 総特集 西尾維新』(2004)青土社。

台湾の参考資料

『謎詭ミステリー Vol.3』(2008)獨歩文化。

ネットの参考資料 (五十音順)

あのひとの「ほぼ日手帳」、『小説家西尾維新さん (前、後篇)』
<http://help.1101.com/store/techo/collection/category/02>、2014年5月14日閲覧。

刀語ホームページ概要 <http://www.katanagatari.com/outline/>、2014年5月14日閲覧。

神北情報局『ブロック記事「名付け親だぞ」2004年5月28日 06:57 投稿』
http://kamikita.cocolog-nifty.com/kia/2004/05/post_30.html、2014年3月3日閲覧。

中田永一@adachihirotaka(<https://twitter.com/adachihirotaka>)、2014年5月30日閲覧。

フルイチオンライン『このライトノベルがすごい！歴代 TOP10』
http://www.furu1online.net/site/sp/ln_award.html、2014年5月14日閲覧。

本格ミステリ作家グラフ(<http://honkaku.com/>)、2014年5月30日閲覧。

毎日新聞(2012年11月20日)「小説:「中田永一」も「山白朝子」もあの人気作家—別名義活動公式に認める」
<http://mainichi.jp/enta/news/20121120mog00m200035000c.html>、2014年5月30日閲覧。

web メフィスト

<http://bookclub.kodansha.co.jp/kodansha-novels/mephisto/award/>、2014年5月14日閲覧。